

發信人ニ豫算ノ金額ヲ納メシメ着信局ニ於テ實地ノ調査ヲナシ過剩アラハ發信人ニ還付シ不足アラハ受信人ヨリ徴收スヘシ

第六十六條 郵便ヲ以テ遞送スヘキ電報ハ郵便又ハ書留郵便ノ零符號ヲ以テ指定スヘシ但別配達郵便ハ之ヲ取扱ハス

第六十七條 艦船宛ノ電報ニシテ解船ヲ以テ配達スヘキモノハ解船配達ノ零符號ヲ以テ指定スヘシ

第六十八條 艦船宛ノ電報ニシテ別使ヲ以テ配達スヘキモノハ解船配達并別使配達ノ零符號ヲ以テ指定スヘシ

第六十九條 艦船宛ノ電報ニシテ解船配達ノ指定ナク實際解船ヲ要スルトキハ其解船料ヲ受信人ヨリ徴收スヘシ

第七十條 島嶼配達ノ電報ハ着信局ヨリ二里内外ニ拘ハラズ別使又ハ郵便ヲ用フヘキニ依リ何レカ其零符號ヲ以テ指定スヘシ但其記入ナキモノハ先拂郵便ヲ以テ遞送ス可シ

第七十一條 島嶼ノ別使配達料ハ水陸トモ實費ヲ徴收スヘキニ依リ發信人ヨリ豫算ノ金額ヲ發信局ヘ納ムヘシ其過不足ハ第六十五條ニ依リ處分スヘシ

第七十二條 電報ハ着信局ニ於テ受信シタル順序ニ依リ配達スヘシ

第七十三條 電報ハ送達紙ニ記シテ配達スヘシ

第七十四條 受信人ニ配達スル送達紙ニハ無手数料ニテ其發信局名及依托ノ月日時分ヲ記スルモノトス

第七十五條 送達紙ニ記載シタル宛名ノ者他所ヘ移轉シ其居所分明ナルモノ一里ヲ超ヘサルトキハ別ニ手数料ヲ要セスシテ配達スヘシ一里ヲ超ユルトキハ郵便ヲ以テ遞送スヘシ

第七十六條 條例第三十四條ニ依リ受信人豫テ電報ヲ受取ルヘキ人名ヲ指定スルトキハ其旨書面ヲ以テ申出證クヘシ

第七十七條 電信中央局又ハ分局ニ預リ置キ及留置ク電報ハ其發信人及受信人ノ住所氏名ヲ詳記シテ七日ヨリ少カラサル間其局前ニ揭示スヘシ

第六章 至急電報

第七十八條 官報私報ヲ問ハス通常電報ニ先チテ傳送ヲ要スルモノハ至急電報ノ零符號ヲ以テ指定スヘシ

第七十九條 至急電報ニシテ返信料ヲ前納シ其返信モ至急電報ト爲ストキハ至急電報ノ零符號ヲ以テ指定スヘシ

第七章 追尾電報

第八十條 發信人係受信人ノ轉居又ハ旅行等ヲ知リテ電報ヲ追送セントスルトキハ追尾電報ノ零符號ヲ以テ指定スヘシ

第八十一條 追尾電報ノ第一著局以外ノ料金ハ受信人ヨリ徵收スヘシ但一市内ニテ追送スルモノハ料金ヲ要セス

第八十二條 追尾電報ノ頼信紙ニハ追尾スヘキ受信人ノ居所ヲ逐次ニ記スヘシ

第八十三條 追尾電報ノ零符號アルモ追尾スヘキ居所ヲ逐次ニ記セサルモノニシテ若シ受信人不在ノトキ更ニ追尾スヘキ居所ヲ知ルコトヲ得タルトキハ直ニ之ヲ追送スヘシ若シ追送スヘキ居所不分明ナルカ又ハ之ヲ追送スルモ受信人ヲ尋得サルトキハ電報ヲ留置クヘシ

第八十四條 追尾電報ノ零符號アリテ且追尾スヘキ居所ヲ逐次ニ記シタルモノハ受信人ニ達スルマテ逐局之ヲ傳送シ若シ受信人ヲ尋得サルトキハ其終尾ノ局ニ於テ前條ニ依テ之ヲ取扱フヘシ但追尾電報ノ本文ハ固ヨリ一字モ省略セス逐局之ヲ傳送ス然トモ逐書シタル居所ハ其當サニ送ルヘキモノハミヲ存ジ己ニ經過セシモノハ之ヲ削除スヘシ

第八十五條 追尾ノ指定ナキ電報ニテモ受信家ノ者ヨリ之ヲ追尾電報ト爲ストキハ更ニ改追尾電報ノ零符號ヲ以テ指定シ之ヲ逐局傳送スルコトヲ得

第八十六條 追尾電報ニシテ其返信料ヲ前納スルトキハ追尾電報ノ零符號ノ次ニ返信料前納ノ零符號ヲ記シ第一著局マテノ返信料ヲ前納スヘシ

第八十七條 返信料ヲ前納シタル電報ヲ更ニ追尾電報ト爲ストキハ返信料前納ノ零符號ノ次ニ改追尾電報ノ零符號ヲ記スヘシ其著信局ニ於テハ第一著局マテノ返信料ヲ受信人ニ交付ス

第八十八條 何人ニテモ電報ノ配達ヲ受ル所ノ電信分局ヘ移轉等ノ事由ヲ書面ニテ申出置キ其電報ノ到着次第追尾電報ノ規則ニ依リ再送ヲ受ント請求スルコトヲ得此電報ハ著信局ニ於テ更ニ改追尾電報ノ零符號ヲ以テ指定シ移轉ノ居所所在ノ著信局ヘ追送スヘシ

第八十九條 追尾電報ヲ著信局ヨリ一里ヲ超ヘタル地ニ遞送スルトキハ前拂郵便ヲ用ヒ其送達紙中ニ電報料及郵便税ノ金額ヲ記シ之ヲ追徴ス

第九十條 受信人ニ配達スル追尾電報ノ送達紙ニハ第一發信局ノ局名月日時分ヲ記スルモノトス

第九十一條 追尾電報ヲ傳送シタル後受信人ノ所在不分明ニテ配達シ得サルトキ又ハ受信人ヨリ追尾料金ヲ出スコトヲ拒ムトキハ其追尾依托人ニ事實ヲ報シテ其料金ヲ追徴スヘシ

第八章 同文電報

第九十二條 發信人ヨリ同時ニ同文ノ電報ヲ一市内又ハ一市内ニ非サルモ着信局ヲ同  
クスル地方ニ住ンテ居所ヲ異ニスル數名ヘ差出サントスルトキハ同文電報ノ零符號  
ヲ以テ指定スヘシ

第九十三條 同文電報ノ賴信紙ニハ初筆ノ受信人ノ名下ニ零符號ト受信人ノ員數ヲ記  
スヘシ

第九十四條 同文電報ハ原信一通ニ定則ノ電報料ヲ課シ其餘ハ一通毎ニ同文電報料ヲ  
課スルモノトス

第九十五條 照校電報ヲ同文電報ト爲ストキハ同文電報ノ零符號ノ次ニ照校電報ノ零  
符號ヲ記スヘシ其電報ハ原信一通ニ照校電報料ヲ課シ其餘ハ同文電報料ノミヲ課ス  
ルモノトス

第九十六條 受信電報ヲ同文電報ト爲ストキハ同文電報ノ零符號ノ次ニ受信電報ノ零  
符號ヲ記シ同文電報料ノ外其通數ニ應シ受信電報料ヲ納ムヘシ

第九十七條 同文電報ハ發信人ニ於テ送達紙各通ニ受信人ノ連名ヲ記スルコトヲ請求  
セサルトキハ一通毎ニ二名ノミヲ記スルモノトス故ニ之ヲ請求スル者ハ同文電報ノ  
零符號ノ次ニ「レノンナイ」ト記スヘシ

第九十八條 住居大同クスル者ニ宛タル電報ニテモ同文電報ト爲スニ非サレハ電報一  
通ニ三名ヲ超ヘタル連名ヲ記スルコトヲ得ズ

第九十九條 同文電報ヲ送達スルニ或ハ郵便ヲ以テシ或ハ別使ヲ以テスル等各配達ノ  
方法ヲ異ニスルモノハ受信人ノ名下ニ一々郵便配達若クハ別使配達ノ零符號ヲ以テ  
指定スヘシ

第九章 照校電報  
第一百條 發信人ニ於テ電報中字句ノ誤謬ヲ豫防セシトスルトキハ照校電報ノ零符號ヲ  
以テ指定スヘシ

第一百一條 照校電報ハ各局傳送ノ際全文ヲ校正スルモノトス

第一百二條 返信料ヲ前納シタル照校電報ニテ其返信モ亦照校電報ト爲ストキハ照校電  
報ノ零符號ノ次ニ「ヘンシンセウカウ」ト記スヘシ

第十章 受信電報  
第一百三條 發信人電報ノ正ニ受信人ニ到達セシヤ否ヤノ報知ヲ受ケントスルトキハ受  
信電報ノ零符號ヲ以テ指定スヘシ

第一百四條 受信報知ヲ要スル電報ノ發信人ニハ受信人ノ電報ヲ受取リタル時刻ヲ報知  
スヘシ

第二百五條 受信電報ハ其原信ノ種類ニ依テ之ヲ傳送スヘシ

第二百六條 受信報知ヲ要スル電報ヲ受信人ニ配達スル能ハサルトキハ著信局ニ於テ先ツ發信局ニ其旨ノ局報ヲ送ルヘシ然ル後電報ヲ配達スルコトヲ得タルトキハ直ニ受信電報ヲ送ルヘシ若シ局報ヲ送リタル後二十四時ヲ過クルモ尙配達スル能ハサルトキハ更ニ其事由ヲ確報スヘシ

第二百七條 受信報知ヲ要スル電報ニシテ其著信局ヨリ受信人へ別使又ハ郵便ヲ以テ配達スヘキ者ハ受信電報ノ零符號ノ次ニ別使配達若クハ書留郵便配達ノ零符號ヲ記スヘシ

其郵便ヲ以テ配達スヘキモノハ郵便局へ付托セシ時刻ヲ答報ス

第二百八條 發信人配達區外ニ居住スルニ依リ別使又ハ郵便ヲ以テ受信電報ノ配達ヲ得ントスルトキハ賴信紙ノ端末ニ「別使」又ハ「郵便」ト記シ其別使料又ハ郵便稅ヲ前納スヘシ

第十一章 返信料前納

第二百九條 發信人ニ於テ受信人ヨリ納ムヘキ電報料ヲ前納シテ返信ヲ受ケントスルトキハ返信料前納電報ノ零符號ヲ以テ指定スヘシ

第二百十條 一音信又ハ五語ヲ超ヘテ返信料ヲ前納スルトキハ返信料前納ノ零符號ノ次ニ其字數又ハ語數ヲ記スヘシ

ニ其字數又ハ語數ヲ記スヘシ

例

和文 (ナツニ〇)

歐文 (RPS) 又ハ (RPIO)

第二百十一條 返信料ハ原信料ノ三倍ニ超ヘテ前納スルコトヲ得ヌ又歐文五語未滿ノ料金ヲ前納スルコトヲ得ヌ

第二百十二條 返信ノ爲メ前納スル料金ハ通貨ヲ以テスルモ妨ケナシ但着信局ニ於テハ此料金ニ當ル電信切手ヲ以テ電報ト共ニ受信人ニ交付スヘシ

第二百十三條 返信料前納ノ電報ヲ受信人ニ交付スルコト能ハス又ハ受信人ニ於テ返信料ヲ受領スルコトヲ拒ムトキハ其旨ヲ着信局ヨリ電報ヲ以テ發信局ヲ經テ發信人ニ報知シ其報知ノ電報ハ返信ノ代ト看做シテ前納シタル金額ヲ收入スヘシ但和文一音信以上歐文五語以上ノ料金ヲ前納シタルモノハ一音信若クハ五語分ヲ收メテ其餘ハ發信人ニ還付スヘシ

第二百十四條 返信料前納ノ電報ヲ郵便ニテ送達スルトキハ着信局ニ於テ電信切手ヲ電報ト共ニ封入シ書留郵便ヲ以テ遞送スヘシ

第二百十五條 前條ノ場合ニ於テハ返信料前納ノ零符號ノ次ニ書留郵便ノ零符號ヲ記スヘシ

第一類 行政法 電信取扱規則

第一百十六條 返信料前納電報ノ受信人ヨリ發スル返信ハ何時何地方ニテモ隨意ニ之ヲ送ルコトヲ得

第十二章 尋問改正

第一百十七條 條例第四十三條第四十四條ニ依リ既送現送ノ電報ニ關シ發信人又ハ受信人ノ依頼ニ依リ傳送スル電報ハ其種類ニ依リ取扱フモ之ヲ往復スルニハ局名ヲ以テスルモノトス

第十三章 原信正寫

第一百十八條 原信ノ正寫ニハ其手数料ニ當ル電信切手ヲ貼付シ且消印シテ交付スヘシ

第十五章 土地

○第一款 土地賣買讓渡規則 明治十三年十二月 第五十二號布告

第一條 凡ソ所有ノ土地ヲ賣渡シ又ハ讓渡サント欲スル者ハ(賣買讓渡)證文ニ地券ヲ添ヘ其地ノ戶長役場ニ差出シ與書割印ヲ受ケ之ヲ買受人又ハ讓受人ハ附與スヘシ

但シ一筆ノ土地ヲ分割シテ與書割印ヲ受ケント欲スル者ハ其分界及ヒ坪數等ヲ詳記シタル圖面ヲ添テ差出スヘシ

第二條 戶長役場ニ於テハ豫メ土地賣買讓渡與書割印帳ヲ備ヘ置キ與書割印ヲ請フモトアレハ地所賣入書入與書割印帳ヲ見合セ登記ナキニ於テハ(賣渡讓渡)證文ニ與書

割印ヲナスヘシ

第三條 買受人又ハ讓受人(賣渡讓渡)證文ヲ領收スル片ハ地券(書換裏書)願書ニ雙方連印ノ土地券ヲ添ヘ戶長役場ヲ經テ管轄廳ヘ差出スヘシ

第四條 第一條ノ手續ヲ以テ其土地所有權ヲ移轉スルコトヲ得ルト雖モ地租並ニ地方稅ハ地券ニ記載セル姓名ノ者ヨリ之レヲ徴収スヘシ

但シ地券紛失ノ際下附願出ルモ亦地券ニ記載セル姓名ノ者タルヘシ

第五條 死亡者失踪者ノ家督相續若クハ遺產相續及ヒ離縁戶主ノ家督相續ニ依リ土地ヲ讓受ケタル者ハ親族(親族ナキ者ハ近隣ノ戶主)ト連印ノ上戶長役場ヲ經テ地券(書換裏書)願書ヲ管轄廳ヘ差出スヘシ若シ家督相續又ハ遺產相續ノ日ヨリ六ヶ月以內ニ戶長役場迄之ヲ差出サ、ル者ハ證印稅五倍ノ科料ニ處ス

但シ本條期限內ニ地券(書換裏書)願書ヲ差出ス能ハサル事由アリテ之レヲ届出ル者ハ此限ニアラス

○第二款 土地分割取扱手續 明治十五年一月 第二號布達

明治十三年(十一月)第五拾貳號布告土地賣買規則第壹條但書之儀ニ付左ノ通取扱手續ヲ定ム

土地分割取扱手續

第一條 買賣讓渡等ノ爲メ一筆ノ土地ヲ分割シテ與書割印ヲ受テ地券書替ヲ請ハント欲スルモノハ境界ヲ明瞭ニシテ其反別ヲ正シ地位ノ優劣ニヨリ全筆ノ地價ヲ分配シ其書面ヲ戸長役場ニ差出スヘシ

第二條 戸長ハ實地ヲ檢シ不都合ナキ片ハ與書割印ヲ爲シ若シ反別地價配分上不適當ノモノアリト認ムル場合ニ於テハ其旨ヲ説諭シ願人承服セサル片ハ其意見ヲ付シ郡區役所ヲ經テ管轄廳ニ具申スヘシ

第三條 該廳ニ於テ前條ノ具申ヲ受ル片ハ更ニ實地ヲ審査シ分界ヲ檢シ坪數地位ニ適スル地價ヲ定メ其旨本人ニ申達シ與書割印ヲ受クルノ手續ヲナサシムヘシ

但買賣讓渡ニアラスシテ自己ノ都合ニヨリ一筆ノ土地ヲ分割スルモ前條々ノ例ニヨルヘシ

○第三款 地券証印稅規則 明治十四年五月第三十三號布告

地券証印稅左ノ通改正明治十四年七月一日ヨリ施行シ從前ノ證印稅則ハ同日ヨリ廢止候條此旨布告候事

證印稅則

地券ニ記セシ

金高拾圓未滿

券狀一通ニ付

金高(拾圓以上貳百圓未滿)

三錢

金高(貳百圓以上五百圓未滿)

千分ノ五 則拾圓ニ付五錢

金高(五百圓以上千圓未滿)

壹圓

金高(千圓以上貳千圓未滿)

壹圓貳拾五錢

金高(貳千圓以上五千圓未滿)

壹圓五拾錢

金高(五千圓以上壹萬圓未滿)

貳圓五拾錢

金高壹萬圓以上

三圓七拾五錢

左ニ掲グルモノハ券面代價ノ有無ニ拘ハラヌ券狀一通ニ付三錢トス

代換授與並ニ水火盜難ニヨリ地券書換

荒地其他無代價地券授與書換

荒地起返及ヒ開墾畝下年季明其他一筆地ヲ數筆ニ分裂數筆地ヲ一筆地ニ合併等ニテ

所有主變換セサル地券書換

○第四款 隱田切開切添 明治九年五月 地等處分規則 第六十七號布告

第一類 行政法 地券証印稅規則

隱田切開切添地等ノ儀ニ付テハ明治五年(九月)大藏省第百二十六號布達地券渡方規則中第二十一條及ヒ明治六年(九月)第三百十五號ヲ以テ及布告候趣モ有之候處更ニ左ノ通り被相定候條此旨布告候事

第一條 隱田切開切添地ノ此布告以前ニ係ルモノ該府縣地租改正濟マテニ申出ル片ハ其罪ヲ問ハス其者所有ニ可相定若シ之ヲ申出スシテ改正濟後ニ至リ發覺スルモノハ律ニ照シ處分スヘシ

但シ此布告以後ニ係ルモノハ地租改正濟ノ前後ヲ不論渾テ律ニ照シ處分スヘシ  
第二條 廢落殘歩ハ此布告ノ前後ヲ論セス該府縣地租改正濟マテニ申出ル片ハ其罪ヲ問ハス其者所有ニ可相定若シ之ヲ申出スシテ改正濟後ニ至リ發覺スルモノハ律ニ照シ處分スヘシ

第三條 官簿ニ記載アル地並ニ記載ナシト雖モ從來官山官林用地附屬地等ノ證アル地ヲ私ニ田畑宅地等ニ侵墾セシモノハ此布告以前ニ係ルモノハ該府縣地租改正濟マテニ申出ル片ハ其罪ヲ問ハス其民有地トナシ差支ナキモノハ其者ハ素地相當代價ヲ以テ可拂下其民有トナシ難キモノハ直ニ返地セシメ事情ニヨリテハ更ニ借地差許ス儀モ之アルヘシ

第四條 前條侵墾地々租改正濟後ニ至リ發覺スルモノ及ヒ此布告以後ニ係ル侵墾地ハ

渾テ律ニ照ラシ處分スヘシ

第五條 前條ノ地ハ舊藩縣ヨリ開墾願濟ノ分タリテ未タ地代金ヲモ納メスシテ未着手ノモノハ直ニ返地セシメ其民有地トシテ差支ナキモノハ更ニ相當代價ヲ以テ其者ヘ可拂下其地代金ヲ納メスモ己ニ着手スルモノハ直ニ其ノ者所有ト定ムヘシ

第六條 凡シ民有ニアラサル地ヲ私ニ賣買或ハ買入ト爲ヌ者此布告以前ニ係ル分地租改正濟迄ニ申出ルモノハ其罪ヲ問ハス其民有地トナシ差支ナキモノハ賣買并ニ流質地共買得者及ヒ買取主ヘ其儘無代價ニテ下渡其民有地トナシテ差支アルモノ并質地年限中ノモノハ官有地ニ編入スヘシ此布告以後ニ係ルモノハ地租改正濟ノ前後ヲ不論律ニ照シ處分スヘシ

○第五款 地所名稱區別 明治七年十一月 第百二十號布告

明治六年(三月)第百十四號布告地所名稱區別左ノ通改定候條此旨布告候事

官有地  
第一種 地券ヲ發セヌ地租ヲ課セヌ地方稅ヲ賦課セサルヲ法トス (十二年第三十四號ヲ以テ區入費ノ文字ヲ地方稅ト改ム)  
一 皇宮地 皇居離宮等ヲ云フ

一神地 伊勢神宮山陵官國幣社府縣社  
 及ヒ民有ニアラサル地ヲ云

第二種 地券ヲ發シ地租ヲ課セス地方稅ヲ賦セサルヲ法トス尤府縣所用ノ地ハ地券ヲ發セス唯帳簿ニ記入ス(明治八年第百十四號) 號布告ヲ以テ改正  
 但此地ニ在ル宮舎ヲ貸渡ス時ハ借地料ヲ賦スヘシ

一皇族賜邸

一官用地(官院省使寮司府藩縣(本支)廳裁判所警視廳陸海軍(本分)營其他政府ノ許可ヲ得タル所用ノ地ヲ云フ)

第三種 地券ヲ發セス地租ヲ課セス地方稅ヲ賦セサルヲ法トス  
 但人民ノ願ニヨリ右地所ヲ貸渡ス時ハ其間借地料ヲ納メシム

一山岳丘陵林藪原野河海湖沼池澤溝渠堤塘道路田畑屋敷等其他民有ニアラサル者

一鐵道線路敷地

一電信架線柱敷地

一燈明臺敷地

一各所ノ舊跡名區及ヒ公園等民有地ニアラサルモノ

一人民所有ノ權利ヲ失ヒシ土地

一民有地ニアラサル堂宇敷地及ヒ墳墓地

一行刑場

第四種 地券ヲ發セス地租ヲ課セス地方稅ヲ賦セサルヲ法トス

一寺院大中小學校說教場病院貧院等民有ニアラサルモノ

民有地(明治九年第八十八號布告ヲ以テ第一種ヲ第一種ト合セ第三種ヲ第二種ト改ム)

第一種 地券ヲ發シ地租ヲ課シ地方稅ヲ賦スルヲ法トス

一人民各自所有ノ確證アル耕地宅地山林等ヲ云フ  
 但此地賣買ハ人民各自ノ自由ニ任スト雖モ潰シ地開墾等ノ如キ大ニ地形ヲ變換スルハ官ノ許可ヲ乞フヲ法トス

一人民數人或ハ一村或ハ數村所有ノ確證アル學校病院鄉倉牧場練場社寺等官有地ニアラサル土地ヲ云フ  
 但此地賣買ハ其所有者一般ノ自由ニ任スト雖モ潰地或ハ開墾等ノ如キ大ニ地形ヲ變換スルハ官ノ許可ヲ乞フヲ法トス

第二種 地券ヲ發シテ地租地方稅ヲ賦セサルヲ法トス(明治八年第百十四號布告) ヲ以テ本條并一項改正

一官有ニアラサル鄉村社地及ヒ墳墓地等ヲ云フ

一民有ノ用惡水路溜池敷及堤敷及井溝敷地(明治八年第百五十四號) 布告ヲ以テ本項追加

一公衆ノ用ニ供スル道路(明治十三年第四十三號) 布告ヲ以テ本項追加  
 但其地形ヲ變換スル片ハ管轄廳ノ許可ヲ請フヘシ



○第六款 公用土地買上規則 明治八年七月第百三十二號達

公用土地買上規則別紙之通相定候條此旨相達候事

第一則 公用土地買上トハ國郡村市ノ保護便益ニ供スルタメ院省使廳府縣ニ於テ人民所有ノ土地ヲ買上ルヲ云フ

但國郡村市ノ保護便益ニ供スルタメ人民ニテ鐵道電線上水等ノ大土工ヲ起スルハ其事業ニヨリ特別官許ノ上此規則ニ準スルヲ得ヘシ

第二則 公用買上ハ必ス其地ヲ要セサルヲ得サルニアラサレハ之ヲ行ハサルモノトス故ニ人民之ヲ拒ムヲ得ス

但其地ニ屬シタル植物建造物等モ亦本文ニ同シ

第三則 院省使ニテ公用土地買上テヲ要スルキハ左ノ事由ヲ內務省ニ照會シ內務省ヨリ

地方官ニ諮詢シ差支ナキ旨ヲ回答ヲ得タル上該廳ヨリ太政官ニ上陳允裁ヲ得モノトス

廳府縣ニテ公用土地買上ヲ要スル片ハ左ノ事由ヲ具狀シテ內務省ニ稟請シ內務省ヨリ太政官ニ上陳允裁ヲ得ルモノトス

內務省ニ照會又ハ稟請スヘキ事由左ノ如シ

一 土地ヲ買上ルノ事由

一 該地ヲ必需スルノ事由

其管轄國郡村市

一 該地ノ番號

一 該地ノ字

一 該地ノ地種

一 該地ノ地主

一 東西何程南北何程

一方積何程

但該地ノ實測圖ヲ添ル者トス實測圖ハ近傍ノ地形ヲモ略記スヘシ

第四則 公用ノタメ買上ル地價ハ券面ニ記シタル代價タルヘシ然レモ地價相違ヲ生ゼシ時ハ所有主ト買上ヘキ該廳トノ商議ヲ以テ代價増減スルコトアルヘシ

但明治五年二月十四日以前遺地又ハ用地申付爲手當作德米等ヲ渡シ來リタル土地ハ同年ヨリ同七年迄三ヶ年ノ貢納石代平均ノ價ヲ以作德米七ヶ年半ノ金額ヲ一時

ニ下渡シ買上ルモノトス(明治八年第百六十號達ヲ以但書追加)

第五則 買上ヘキ土地ニ屬シタル植物建造物等ヲ併セテ買上ル片ハ地價ノ外別ニ植物建造物等ノ代價ヲ渡スヘシ其代價ハ所有者ト買上ヘキ該廳トノ協議タルヘシ

第六則 買上ヘキ土地ニ屬シタル植物建造物等ヲ買上サルルハ地價ノ外別ニ植物建造物等ノ轉移料ヲ渡スヘシ轉移料ハ所有者ト土地ヲ買上タル該廳トノ協議タルヘシ

第七則 土地ヲ買上ヘキ該廳ハ植物建造物等ヲ買上ルコトヲ要セスト雖モ人民植物建造物等ヲ併セテ買上フコトヲ求ムルルハ第五則ノ通タルヘシ

第八則 土地植物建造物等ノ買上代價及轉移料ノ見込所有者ト該廳ノ間ニ許多ノ差違ヲ生シ熟議ニ至リ難キハ双方ヨリ評價人各壹人ヲ出シ地方官之ヲ折衷シテ内務省ノ決ヲ請ヒ之ヲ定ムルモノトス

第九則 地方官土地及ヒ植物建造物等ノ買上ヲ公達シタルルハ直ニ買上代價ヲ渡スヘシ

第十則 人民買上代價ヲ受取タルルハ買上ラレタル土地植物建造物等ヲ三十日以内ニ渡スヘシ然レモ買上前ニ該廳ト別段ノ契約ヲ結ビタルハ特別トス

第十一則 (明治十六年十一月第五十號達改正) 土地買上ノ際事業ノ急施ヲ要スルトキニ特ニ其旨ヲ所有者ニ達シ三十日以上ノ期日ヲ定メ代價ヲ申出シムヘシ其期日迄ニ代價ヲ申出サルルカ又ハ代價ニ付雙方見込相協ハサルルハ更ニ建物アル地ハ三十日以上建物ナキ地ハ十日以上ノ期日ヲ定メ其期日迄ニ之ヲ引渡スヘキ旨ヲ達スヘシ但各其期日內ニ雙方共現在ノ實況及ヒ其見込ノ代價ヲ詳記シ評價人ノ意見書ヲ添ヘ地方

官ノ認印ヲ受置クヘシ

第十二則 (明治十五年第六十四號達追加) 第十一則ノ場合ニ於テハ所有者ノ請求ニヨリ土地ニ付テハ券面地價十分八ノ金額建造物等ノ轉移料又ハ代價ニ付テハ假定ノ金額(地方官實況ニヨリテ之レヲ定ム)ヲ渡シ置キ代價決定ノ上精算スヘシ

○第七款 官有地拂下貸下規程 明治十八年六月内務省甲 第二十一號(府縣へ)達

官有地拂下并ニ貸下之儀左ノ通相定メ明治九年(三月)内務省乙第三十四號達ハ廢止ス此旨相達候事

- 一 凡ソ官有地ヲ年賦月賦又ハ延納ニテ拂下タルモノ其代金未完納中ハ抵當トシテ其地券ヲ官廳へ差出サシムヘシ若シ之ヲ差出サ、ルモノハ地所拂下ノ効ヲ失フモノトス
- 一 凡ソ官有地ノ拂下代金ヲ期限ノ通上納セサルモノハ其拂下ヲ取消スヘシ此場合ニ於テ既納ノ代金アルモノハ之ヲ下戻シ地所ハ現形ノ儘返上セシメ之カ爲メ金利賠償等ヲ下付スルコトナカルヘシ
- 一 凡ソ官有地ノ借地料ヲ期限ノ通上納セサルモノハ其貸下ヲ取消スヘシ此場合ニ於テハ假令如何ナル勞費アルモ其價ヲ下付スルコトナカルヘシ
- 一 凡ソ官有地借用ノ許可ヲ得タル者ハ其當初出願ノ目的ニ隨テ之ヲ使用スルコトヲ得ル

ト雖モ他人へ書入又ハ質入ヲ爲スコトヲ得サル者トス但轉貸ハ官ノ許可ヲ得ルニ於テハ之ヲ爲スコトヲ得ヘシ

○第八款 民有荒地處分規則 明治十年一月 第八號布告

民有荒地處分規則左ノ通相定候條此旨布告候事

民有荒地處分規則

第一條

一荒地トハ山崩、川欠、押堀、石砂入、河原成、池成、川成、海成、湖水成等ノ天災ニ罹リタル土地ヲ云フ

第二條

一民有地荒地トナリタル時ハ荒地一筆限帳(字番號一筆限步數持主姓名及ヒ荒地ノ名稱ヲ詳記セシムヘシ)並ニ荒地繪圖(荒地ニ係ルモノ及ヒ接續ノ地形迄ヲ詳細ニ畫キ荒地ト生地ト色分ケヲナサシムヘシ)ヲ出サシメ畝杭ヲ建サセ境界ヲ明瞭ニシ其廣狹ヲ丈量シ反別ヲ限り損害ノ輕重ヲ區別シ該地圖面ヲモ照合シ免稅ノ年期ヲ定ムヘキモノトス

第三條

第一類 行政法 民有荒地處分規則

一荒地免稅ノ年期ハ其損害ノ輕重ト起返シノ難易ニ據リ實地ニ應シ損害ノ年ヨリ十年以內ヲ以テ相當ノ年期ヲ定ムヘシ滿期ニ至リ檢査ヲ經テ猶起返シ能ハサルモノハ年期ヲ繼クヘキモノトス

第四條

一川成、海成、湖水成等ノ荒地ニシテ地主持繼クヘキ望アルモノハ十年迄ノ年期ヲ定メ無代價ノ券狀ヲ付與スヘシ但右ノ場合ニ於テ所有主其土地起返シノタメ杭杙打連子若シクハ箒柵取設ケサルモノハ他人ノ漁魚採藻等ヲ拒ムノ權ナキモノトス

△(明治十四年九月內務省甲第九號布達)

明治十年第八號布告第四條但書ノ趣モ有之候處該地現今河身トナリ舟楫ノ航路トナレル場所ニ於テハ本條ニ依リ無代價ノ券狀請求スルヲ得ルト雖モ杭杙打連子箒柵ヲ取設ケ其航路ヲ遮斷シ又ハ他人ノ漁魚採藻等ヲ拒ム得ル儀ニ有之候條此旨布達候事

第五條

一右年期明ニ至リ原形ニ復セサルモノハ又十年以內ノ年期ヲ繼キ猶依然タルモノハ付與スル處ノ券狀ヲ還納セシメ荒地ノ名稱ヲ除去シ全ク川海湖地(即チ官有)ニ歸スルモノトス且此布告以前ニ係ル川海湖水成等ノ荒地ハ本年ヨリ(地租改正既濟ノ府縣ニテ荒地年期ヲ定メアル者ハ其時ヨリ)起算シ本條ニ據リ處分スヘキモノトス

第六條

一池成ノ荒地年期明ケニ至リ假令原形ニ復セサルモ水草魚鳥等ノ收利アルモノハ其利益ニ應シ地價ヲ定メ生地ニ組換ヘ池ト稱スヘシ

第七條

一荒地年期中竹木萱葎ノ類自然ニ生立多少利益アルモノハ年期明ノ際ヨリ藪林萱生地等ノ部分ニ組換フヘキモノトス

第八條

一荒地年期明ニ至リ起返ルモノハ荒地起返ニ筆限帳(荒地一筆限帳ノ体裁ニ準ス)并ニ荒地起返繪圖(荒地繪圖ニヨリ之ヲ製シ該地ニ接續スル從來ノ生地ト起返地及ヒ猶荒地ニテ殘ルモノアレハ一々明瞭ニ色分ヲナサシムヘシ)ヲ出サシメ畝杭ヲ建サセ一筆限リ耕地ノ分ハ畦畔ヲ除キ更ニ實地ヲ丈量シ該地ニ接續スル從來ノ生地及ヒ猶荒地ニテ殘ルモノアレハ之ヲ地券臺帳荒地帳面等ニ照シ綿密検査ヲ經起返反別ヲ定メ而シテ地價ヲ調査スヘキモノトス

第九條(明治十五年一月第六號布告追加)

一免稅年期明ニ至リ其實況直ニ原地價ニ復シ難キモノハ五割以内ノ減額ヲ以テ更ニ五ヶ年以下低稅年期ヲ附シ其期明ニ至リ原地價ニ復スヘキモノトス

第十條(明治十五年一月第六號布告追加)

一低稅年期明ニ至リ尙原地價ニ復シ難キモノハ近傍ノ地ニ比準シ更ニ相當ノ地價ヲ附スヘキモノトス

第十一條(明治十五年一月第六號布告追加)

一免稅年期明ニ至リ地目變換セルモノハ現地目組換ヘ近傍ノ地ニ比準シ相當ノ地價ヲ附スヘキモノトス

第九款 民有開墾地調査順序

明治十五年一月大藏省第一號(府縣)達

民有開墾地調査順序左ノ通相定候條此旨相達候事

民有開墾地調査順序

第一款 錄下年期

第一條 凡ソ民有ノ土地ヲ開墾スルニ際シ錄下年期ヲ願出ルルハ實際要スル費用ト成功ノ後該地ヨリ得ヘキ收利トヲ豫算シ其費用ヲ償却シ得ヘキ方法ニ至ルマテ詳細ニ取調願書ニ副ヘ差出サシムヘシ

第二條 前書ノ願書ヲ差出シタル片ハ實地ニ就キ反別ノ廣狹ヲ概量シ其調書ノ當否ヲ審査スヘシ

第三條 調書ハ左ノ數項ニ據リ審査スヘシ

第一類 行政法 民有開墾地調査順序

第一項 入夫ハ事業ノ難易ニヨリ其多寡如何  
 第二項 雇錢ハ近傍普通ノ賃金ニ較ヘ其昂低如何  
 第三項 収利ハ近傍ノ熟地ニ比シ其多寡如何  
 第四項 収量ニ換ヘタル金額ハ近傍市場ノ平均(既往三ヶ年或ハ五ヶ年間)相場ニ據  
 リ其當否如何  
 第四條 前條ノ審査ニ於テ其調書適當ナリト視認スルハ該費用ヲ償却シ得ルノ年數  
 ヲ目的トシ鉦下年期ヲ附與スルモノトス  
 第二款 年期明  
 第五條 鉦下年期明ニ至ラハ反別ヲ丈量シ相當ノ收穫地價トモ取調差出サシムヘシ  
 第六條 前條ノ調書ヲ差出シタルハ實地ニ就キ反別ヲ査定シ收穫地價ハ近傍類地ニ  
 比準シ適當ニ調査スヘシ  
 第七條 期明ニ至リ該地ノ幾部分ヲ竣功セシハ其部分ノミ第五六條ノ例ニヨツテ調  
 査スヘシ其殘地又ハ全部未着手ト雖モ引繼キ繼年期ヲ請求スルハ第一款第一條ニ  
 據リ更ニ詳細シ調書ヲ添ヘ出願セシムヘシ  
 第八條 第七條ノ繼年期ヲ請求スルハ第一款第二三條ニ據テ審査スヘシ  
 ○第十款 公賣地所處分方 明治十六年二月大藏  
 省第七號(府縣)達

地稅不納及ヒ賍金追徵民事身代限等凡ソ法律上公賣處分ヲ經タル地所又ハ地券書換ノ  
 訴件ニ付該裁判確定シタモノ、地券書換願書ハ舊所有者ノ連署ヲ要セス候條買受人若  
 クハ權利者ヨリ其證左ヲ添付シ戸長與印ノ上出願候ハ、書換下付シ舊所有者所持ノ地  
 券ハ無効ノ旨命令シテ還納セシムヘキ儀ト心得ヘク此旨相達候事  
 但從前ノ達指令等本文ニ牴觸候分ハ廢止トス  
 ○第十六章 森林

○第一款 山林保護 明治十三年十二月內務省  
 乙第四十九號(府縣)達  
 今般太政官ヨリ被相達候旨モ有之山林ノ義ハ水陸生産ノ殖スル所國家經濟上最忽セニ  
 スヘカラサル所ニシテ一タヒ其制ヲ愆レハ寒暑ノ序ヲ失ヒ水旱ノ禍ヲ招キ之ヲ大ニシ  
 テハ全國殖産ノ道ヲ妨ク之ヲ小ニシテハ一家需用ノ缺乏ヲ來スハ必然ノ儀ニ付全國山  
 林官民有ノ別ナク在來ノ材料ヲ愛惜シ濫伐野燒ノ憂ヲ防クハ勿論漸次閑地ニ於テ樹木  
 植栽等ニ着手シ山林保護ノ道相立候條此際一層注意シ管下人民ヘ懇ロニ相諭シ山林ノ  
 荒衰ヲ挽回候條取計可申此旨相達候事

○第二款 部分木仕付條例 明治十一年三月內  
 務省甲第四號布達  
 植林之儀ハ最モ方今ノ急務ニ付今般部分木仕付條例別紙ノ通施行候條其趣旨ヲ體認從

事候様可致此旨布達候事

(別紙) 部分木仕付條例

第一條 樹木ナキ官有ノ山野官ニ於テ差支無之時ハ人民ノ願ニヨリ之ヲ貸渡シ地味ニ適當セル木種ヲ植挿セシメ其幾分ヲ官納シ自ラ其幾分ヲ收メシムル之ヲ名ケテ部分木ト云

但官林伐木跡ト雖モ從前部分ノ慣行有之箇所ハ本文ニ準スルヲ得ヘシ

第二條 第一條ノ趣旨ヲ以テ官地ヲ拜借セント欲スルモノハ先ツ該所ノ反別ヲ測量シ地味ノ適否ヲ審査シ別紙第一號書式ニ照ラシ地方廳ニ願出ヘシ

第三條 前條ノ場合ニ於テハ地方廳於テ官吏ヲ派遣シ巡視點檢事實相違ナキ片ハ之ヲ聞届ケ別紙第二號書式ニ倣ヒ貸地券狀ヲ下メ渡スヘシ

第四條 樹木部分ノ方法ハ運輸ノ便否地味ノ善惡人民希望ノ厚薄ニヨリ二官八民假令本ノ立木ナレハ二十本ヲ官收シ以上實際適宜ニ之ヲ區分スヘシ (明治十一年內務省八十本ハ人民ニ付與スルヲ云フ) 甲第二十號ヲ以本文中削除改正

第五條 第四條掲ケル所ノ部分法方ハ成木ノ上立木ノ儘分配スルアリ又ハ伐木ノ節官民於テ各評價入ヲ出シ總計金額ヲ豫算シ金員ヲ以テ配賦スルアリ共ニ官民協議ノ上適宜ニ之ヲ定ムルモノトス

但不得已事故アツテ官ニ於テ該地入用ノ節ハ相當代價ヲ以テ其民有ニ當レル樹木ヲ買上リヘシ

第六條 地方廳ニ於テハ臺帳ヲ製シ毎年人民ハ貸渡シタル地所反別(植付挿付)木種員數及ヒ拜借人ノ住所姓名共詳細取調前年十二月迄ノ分翌年一月限リ內務省地理局ニ届出ヘシ

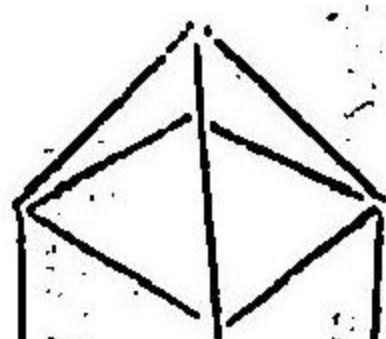
第七條 官ハ地所ノ貸渡料ヲ取立サルヘシ借人ハ植挿養護ヲ擔任スルモノトス

第八條 植挿ノ後樹木成育スルニ隨ヒ手入伐木セント欲スル片ハ前以テ地方廳ニ願出ツヘシ地方廳ニ於テ實地點檢不都合ナキモノハ是ヲ許可シ其除ノ樹木ハ悉ク仕立主ニ下付スヘシ而シテ臺帳ニ就キ其伐伐セシ木數ヲ削除シ其翌年一月限リ遺漏ナク內務省地理局ニ届出ツヘシ

但十五年以後ニ至リ拔伐スル木品ハ最初ノ約束ニ基キ各之ヲ配賦スヘシ

第九條 地所拜借願濟ノ上ハ四至境界ヲ正シ四隅ヘ左之通仕立主ヲシテ標木ヲ建設セシムヘシ

何府下何國何郡何町字何四至境界



第何號幾官幾民部分林反別何程

第一類 行政法 部分木仕付條例

何年何月 權付  
插付

仕立主何郡何町  
何 之 誰

第十條 仕立主ノ都合ニヨリ其部分木仕付ノ權ヲ他ニ讓渡サント欲スル片ハ其事實ヲ  
詳記シ地方官ニ願出ツヘシ地方廳ニ於テハ實際不都合ナキモノト認ムル片ハ證券ニ  
裏書シテ下渡シ追テ内務省地理局ヘ届出ツヘシ

但本文ノ樹木ヲ質入書入セント欲スル片ハ明治七年第六號公布ノ手續ニ準擬シ所  
戸長ノ檢認ヲ受クヘシ

第十一條 借地反別ハ豫メ其制限ヲ定メスト雖モ其植栽見込ノ員數ニ對照シ相當ノ地  
積ヲ貸付スルモノトス

但植立員數ノ都合ニヨリ廣大ノ地積ヲ要シ一時植挿ヲ爲シ得サル場合ニ於テハ三  
ケ年以内ノ期限ヲ以テ追次其植繼ヲ許スヘシ然レモ三ケ年ヲ過キ猶其植挿未了ノ  
地ハ直ニ返附セシムヘシ

第十二條 一時植立并追次植繼ニ拘ラス實地植立濟ノ上ハ其旨地方廳ニ届出之レカ檢  
査ヲ受クヘシ

○願書雛形

○印朱書

○第一號

○表  
紙

部分木 植付願  
插付願

何 府 縣 管 下 何 國 何 郡 何 町 村

華 士 族  
平 民

何 之 誰

○第一號

御管内何國何郡何町字何官山野反別何程へ何木何程幾官幾  
民ノ部分方法ヲ以テ御規則ノ通私費 植付 被差許度此段奉願  
候也

何 府 縣 管 下 何 國 何 郡 何 町 村

華 士 族  
平 民

何 之 誰 印

年 月 日

第一類 行政法 部分木仕付條例

三百八十七

○與書  
前書之通相違無之ニ付被差許度候也

年月日  
區戸長印  
地方長官宛

○證券雛形

○番號

部分木證券

何府下何國何郡何町

何縣下何國何郡何村  
何之誰

何府下何國何郡何町  
何縣下何國何郡何村  
何官山野

反別何程

何樹植付何程

樹種數品有之モノ本  
行ニ倣ヒ列記スヘシ

○右明治何年何月ヨリ地所貸渡候條  
植付ヨリ培養保護ニ  
至ルマテ全ク私費ヲ以テ可相辨尤成育ノ上ハ幾官幾民

○第二號  
○此割印  
ハ縣廳  
所用ノ  
印ヲ臺  
帳ニ割  
印ス

ノ割合ヲ以テ部分スヘキモノ也

年月日

地方長官姓名印

△内務省甲第十四號 明治十一年六月三日

本年三月當省甲第四號ヲ以テ部分木仕付條例及布達置候處右ニ照準出願ノ者ハ別紙ノ條  
件相心得不都合ノ儀無之様可致此旨布達候事

別紙

一部分木仕付條例ニ準シ官地拜借許可濟ノ後條例第十條ノ手續ヲナサス竊ニ其地ヲ他  
人ニ貸シ又ハ質入書入ヲ爲スモノ

一同斷許可濟ノ日ヨリ滿一年ヲ過キテ植着着手セサルモノ

但條例第十一條但書ノ場合ハ本文ト抵觸スルコトナシ

一同斷一々年以内ト雖モ主願ノ樹木ヲ植着セス他事ニ使用セルモノ

第一類 行收法 部分木仕付條例



一 植樹ノ爲メ甲ノ地ヲ拜借シ置乙ノ地ニ苗床ヲ設テ實植苗植等ヲナシテ他日生育ヲ待  
テ甲地ニ移植スヘキコト著明ナルキト雖モ最初許可ノ日ヨリ滿三年ニ至リ猶甲地ニ  
移植セサルモノ

右條々ノ所爲アルモノハ直ニ其地并地上ニ附着セルモノヲ取上テ最初貸渡許可ノ日ヨ  
リ而後ノ借地料ニ當ル金額ヲ徵收シ且其者等ハ書入質入ニ取リタル者モ亦同シ  
條例ニ由リ官地ヲ貸渡スヲ許サス

△明治十一年三月内務省乙第二十七號(府縣)へ達  
森林ノ經國ニ緊要ナルハ勿論ニ候處近來工事進歩土木多端ノ折柄木材ノ需用日一日相  
増候ニ付テハ植樹ノ儀ハ最モ方今ノ急務ニ有之然ルニ偶種樹ニ志アルモ所有地無キカ  
爲着手致シ得サル者有之哉ニ相聞候ニ付今般部分木仕付條例頒布候條其趣旨管下人民  
へ丁寧告諭國益ヲ永遠ニ圖候様可致此旨相達候事

○第三款 斫伐停止 明治十七年二月 第三號布達

民有森林ノ中水源ヲ養ヒ土砂ヲ止メ又ハ風潮ヲ防キ積雪ヲ支フルノ類國土保安ニ關係  
アル箇所ニシテ漫ニ其樹木ヲ斫伐シ鐵物土石ヲ掘採セハ他ニ障害ヲ及ホスコト不抄ニ  
付是等ノ箇所ハ實地ノ景狀ニヨリ其事業ヲ停止セシムルコトアルヘシ

右布達候事

△明治十五年二月農商務省第三號府縣達(沖繩縣ヲ除ク)  
今般第三號布達相成候ニ付テハ民有林ノ内水源涵養土砂打止風潮除積雪止等ノ如キ國  
土保安ニ關係アル箇所ニ於テ伐木セント欲スルモノアルトキハ其都度實地ノ景狀ヲ檢  
査シ處分方可伺出此旨相達候事

○第十七章 船車

○第一款 商船規則 明治三年正月 二十七日布告

郵政商船規則別冊之通御定ニ相成候條此段相達候事

別冊

西洋形商船買入ノ儀ニ付先般相觸置候趣モ有之軍艦ヲ除ノ外在來日本製造ノ船ハ勿論  
西洋形商船ニ至迄總テ民部省中通商司ノ管轄ニ被仰付候條得其意右西洋形商船所持ノ  
モノ或ハ新規買求候モノハ民部省外務省連印ノ免許狀可申受尤別紙規則書一通開港場  
邊上所ヨリ相渡令所持候條其旨可相心得候一體日本被造ノ船ハ度々難破ノ患モ有之人  
命荷物等ノ損傷不少詰リ皇國ノ御損失ト相成候ニ付追テハ不殘西洋形ノ大船ニ仕替度  
御旨趣ニ付當今西洋形ノ船所持ノ者ハ厚御引立被遣候條其旨可相心得候乍去密商拔荷  
等不心得ノ儀相働候者ハ嚴重取締不致候テハ不相濟ニ付別紙ノ御規則御取極相成候儀

ニ付津々浦々於テ此旨屹度可相守事  
右之通御沙汰候事

(免狀案答ス)

規則

西洋形商船買入度者ハ其旨開港場運上所へ可願出其上船ノ善惡新古檢閲ノ上免許狀差遣可申事

一御國旗之事

右ハ決テ取外シ候事不相成附屬ノ舛舟ニ至迄必可揚置候事

一毎朝西洋時規第八字ニ引揚ケ夕方ハ日沒迄ヲ限引卸スヘキ事

但右御國旗引揚無之節ハ海賊船ノ取扱請候ヲモ申譯ナキ事萬國普通ノ公法タル事  
一御國旗ノ寸法別紙ノ通ニ候事

但大旗ハ祝日ニ引揚平日ハ小旗ヲ引揚ケ風雨晦暝ノ節ハ小旗迄引卸置不苦候事

祝日

正月朔日 正月十五日 三月三日 五月五日 七月七日 七月十五日 八月朔日

九月九日 九月廿二日

右之通

一御軍艦へ出合候節ハ我旗章ヲ三度昇降致禮儀ヲナスヘキ事

一夜間ハ旗章ト引替ニ燈明可引揚燈明ハ青赤白ノ三座ヲ設ケ航海中赤ハ左舷青ハ右舷

ニ點火シ白ハ前櫓頂遠方ヨリ見留易キ所ニ揚置キ燈明消ヘサル様可致事

一船ノ込合タル節並風雨浪高ノ折ハ別テ心ヲ用ヒ互ニ突當ラサル様可致右ハ日本船ヲ

リ共同様ナレハ外國船ハ別テ此規則嚴重ナレハ精密ニ用心スヘシ

一貿易港碇泊中荷物陸揚船積共運上所へ願立免許狀ヲ受出入可致事

但手數銀差出ニ不及候事

一貿易港於テ荷物ノ取引致候ハ、其旨通商司へ可相届事

一航海中ハ兼テ帳面用意致置開港場ハ不及申諸港へ入津ノ節ハ十二時西洋<sup>十四</sup>時ノ間ニ

其所ノ運上所又ハ港役所へ届出檢印可請出帆ノ節同斷ノ事

(右檢印ノ式畧ス)

一(明治八年十一月第四十號第十項廢止)

一西洋形商船並在來日本商船トモ積荷ノ總數品物ノ名並其送り先ヲ認通商司並運上所

へ可差出尤其港ヨリ陸揚又ハ船積スヘキ品物ハ一々相届可申事

一諸港へ着船ノ節港役人船改ノ爲メ出張致引續キ爲取締乘組居候事

但船中於テ聊ノ品タリ共仕向ケ間敷儀一切不相成事

- 一 船中乘組ノ者病死致候節ハ水葬不相成陸地へ相當ノ葬禮可取行事
- 一 大砲小砲玉藥類ハ積込陸揚トモ其港運上所或ハ役所ノ免許ヲ乞フヘキ事
- 一 海賊防禦其外ノ用意ノタメ相當ノ銃器備置候儀ハ苦シカラス尤兼而挺數等ノ免許狀民部省ヨリ請取居ヘキ事
- 一 滯船入費ハ一噸ニ付一日金二朱ト被定置候間商賈向ハ勿論假令官府ノ御用タリ共船ノ進退自由ヲ得ス雜費相懸リ候節ハ其價右ノ噸數ヨリ割出シ取立候テ不苦候事
- 一 但諸港於テ威權ケ間敷振舞及ヒ無故出帆差留候節ハ右ノ價可申立事
- 一 免許ナシ外國へ通船ノ儀不相成候万ニ相犯スニ於テハ船並荷物共取上屹度御答可有之事
- 一 免許ヲ受候上外國人ヲ雇ヒ船中使役ノ儀不苦事
- 一 但不開港ノ地ニテ無據上陸爲致候節ハ護衛ノ者急度附添其所ノ役所へ相届官許ノ証據差出可申事
- 一 困難ト見請候船ハ内外國人ノ差別ナク救助致シ可通事
- 一 但外國人ハ開港場ノ役所へ可引渡尤右ニ付入費等有之節ハ開港場運上所ヨリ相當御下々金有之ヘキ事
- 一 外國人ニ貸遣候節ハ約定書ヲ以テ通商司へ届出候得ハ直ニ運上所へ掛合ノ上其國々

- 旗章引揚候儀御差許可相成候事
- 一 外國人ト申合近海於テ密商致シ候儀勿論右ノ外御規則ニ相背候儀取計候節ハ其船取上屹度御答可有之事
- 一 (明治十二年五月第百八十一號布告第二十二項廢止)
- 一 西洋形商船汽汽ハ百噸ニ付一箇年金拾五兩風帆ハ百噸ニ付一箇年金拾兩宛税金通商司へ可相納候事
- 一 但在來日本製商船之分ハ積石數百石ニ付金壹兩宛可相納事
- 右之通相定候條嚴重ニ可相守事

民部省  
外部省

○第二款 船稅規則 明治十六年四月  
第十三號布告

船稅規則別冊之通制定シ明治十六年七月一日ヨリ施行ス  
但船稅ニ關スル從前ノ布告布達ハ廢止ス

第一章 鑑札 稅率 免稅

- 第一條 凡ソ船船ハ此規則ニ依リ課稅スル者トス
- 第二條 船船所有主ハ其船船定繫場ヲ定定繫場所所在ノ地方廳ニ願出檢査ヲ受ケ鑑札ヲ

第一類 行政法 船稅規則

芝フヘ

第三條 新規造船シタル者其造船場所在ノ府縣管内ニ定繋場ヲ定メサル時ハ該廳ニ願出検査ヲ受ケ假鑑札ヲ乞ヒ定繋場ニ回漕ノ上其地方廳ニ願出本鑑札ト引換ヲ乞フヘ

第四條 船體ヲ變更シ積量若クハ間數ニ増減ヲ生スル時ハ其定繋場所在ノ地方廳ニ願出検査ヲ受ケ鑑札ノ引換ヲ乞フヘ

第五條 船舶ヲ買賣譲與シタル者ハ雙方連署ノ上買受譲受主ノ定ムル定繋場所在ノ地方廳ニ願出鑑札ノ引換ヲ乞フヘ

第六條 船舶ノ稅率ハ左ノ如シ

西洋形蒸氣船

百噸ニ付一年金拾五圓

同風帆船

同 同 金拾圓

日本形船舶積石五拾石以上

百石ニ付同 金貳圓

同積石五拾石未滿

淨漁船小廻船積石ニ

長 自船梁 三間迄ハ一年金三拾錢

但三間以上一間ヲ加フル毎ニ金拾五錢ヲ增加ス

遊船 長 自船梁 三間迄ハ一年金五拾錢

但三間以上一間ヲ加フル毎ニ金貳拾五錢ヲ增加ス

第七條 本鑑札又ハ假鑑札ハ航行若クハ回漕ノ時之ヲ本船ニ所持スヘ

但日本形積石五拾石未滿ノ船並淨漁船小廻船遊船ノ本鑑札ハ其船ニ釘付スヘ

第八條 解船被破又ハ水火盜難等ニ因リ船舶ヲ失ヒタル者ハ其旨定繋場所ノ地方廳ニ届出鑑札ヲ還納スヘ

第九條 鑑札ヲ亡失毀損シタル時或ハ改名代替ノ片或ハ船號ヲ改メ若クハ定繋場ヲ變換シタル時ハ其旨定繋場所ノ地方廳ニ願出鑑札ノ再度若クハ引換ヲ乞フヘ

第十條 左ニ掲クル船舶ハ其稅ヲ免除ス其所有主ハ地方廳ニ届出免稅ノ烙印ヲ乞フヘ

倉庫船

水田ノ耕作ニ用フル船

水災ノ爲メ陸地ニ備ヘ置ク船

橋梁ニ換ヘ渡場ノニ用フル船

船橋ノ組成ニ用フル船

航海中本船ニ揚ケ置ク傳馬船「ハツテ」ラ「松」ノ類

第二章 納稅

第一類 行政法 船稅規則

第十一條 税金ハ一年ヲ二期ニ分チ一月一日七月一日現在ノ船ヨリ徴收スル者トス其前半年分ハ一月三十一日限リ後半年分ハ七月三十一日定繫場所在ノ地方廳ニ上納スヘシ

第十二條 新規造船シタル者ハ鑑札ヲ受クル時該期ニ係ル税金ヲ上納スヘシ

第十三條 船體ヲ變更シ積量若クハ間數ニ増減ヲ生シタル時ハ次期ヨリ其積量又ハ間數ニ隨ヒ税金ヲ納ムヘシ

第十四條 他管下ニ定繫場ヲ定ムル者ハ該地ニ代人ヲ定メ連署ノ上其定繫場所在ノ地方廳ニ届出納稅ヲ辨セシムヘシ

第十五條 本籍管内ニ定繫場ヲ定メタル者不在ノ時ハ代人ヲ定メ其地方廳ニ届出納稅ヲ辨セシムヘシ

第十六條 假鑑札ヲ受ケタル船泊定繫場ニ回漕中納稅期限ニ係ル時ハ豫メ定繫場所在ノ地ニ代人ヲ定メ其地方廳ニ届出納稅ヲ辨セシムヘシ

第十七條 此規則ヲ犯シ脱稅ニ係ル者ハ處罰シ後其税金ヲ追徵ス

第三章 罰則

第十八條 此規則ヲ犯シ脱稅ニ係ル者ハ其脱稅高五倍ノ科料若クハ罰金ニ處ス

第十九條 免稅船ヲ有稅船ノ用ニ充テタル者ハ貳圓以上五拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十條 第三條第五條第七條第九條第十四條第十五條第十六條ヲ犯シタル者及第二十條ノ免稅船ニ烙印ヲ受ケタル者ハ壹圓以上壹圓九拾五錢以下ノ科料ニ處ス

第二十一條 此規則ニ依リ罰金若クハ科料ニ處スル者ハ刑法ノ不論罪及ヒ減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス但刑法第七十五條第七十六條ノ場合ハ此限ニアラス

○第三款 船稅取扱心得書 明治十六年六月大藏省第三十六號(府縣へ)達

本年(四月)第十三號ヲ以テ船稅規則制定布告相成候ニ付右取扱心得書別紙ノ通相定ム但明治四年十二月廿六日達噸石數改方法則ノ外船稅規則ニ關スル從前ノ達ハ廢止ス右相達候事

船稅取扱心得書

第一條 西洋形(蒸汽風帆)船並ニ日本形積石五十石以上ノ船鑑札ハ第一號雛形ノ通日本形積石五十石未満ノ船並ニ解漁船小廻船遊船ノ鑑札ハ第二號雛形ノ通府縣廳ニ於テ調製下付スヘシ

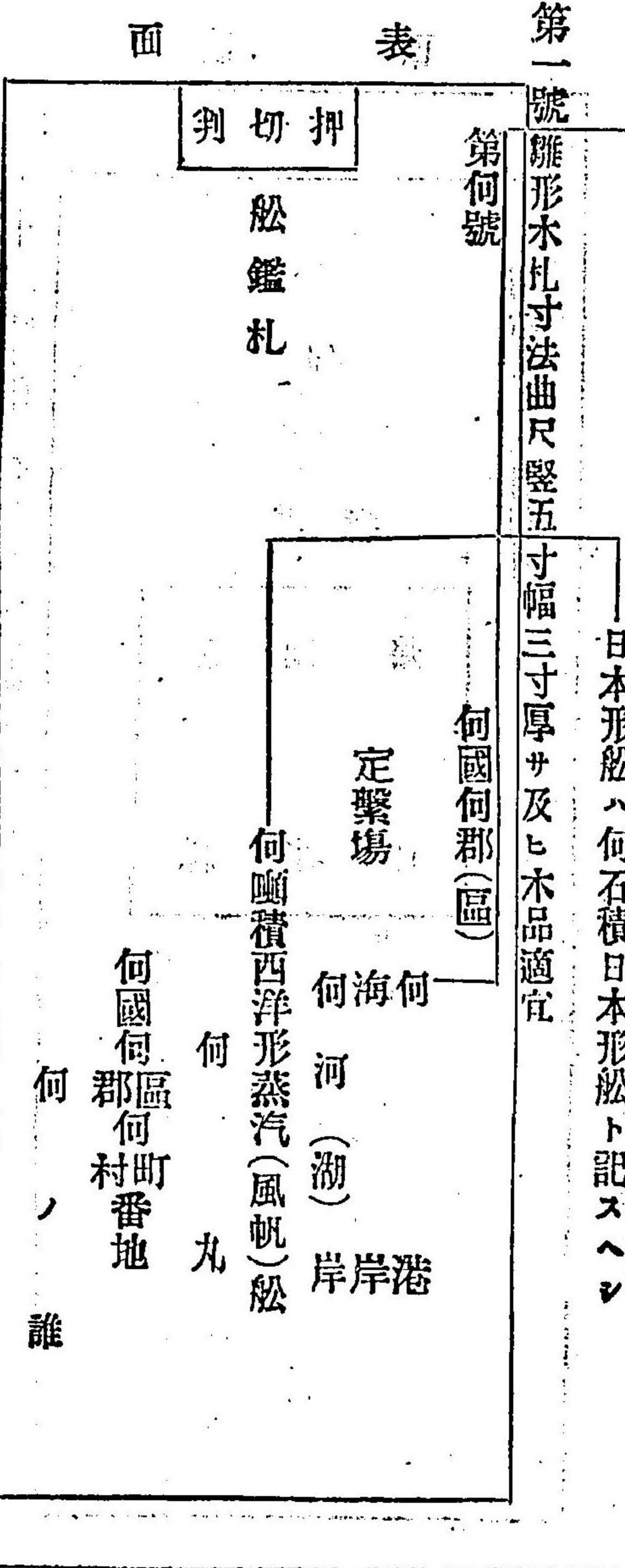
但假鑑札ハ雛形鑑札ノ上ヘ假ノ字ヲ記入スヘシ

第二條 噸數ハ壹噸積石數ハ壹石間數ハ壹間ニ止メ其以下端數ハ切捨ツヘシ

第三條 (明治十七年三月同省第廿號達訂正)規則第七條但書鑑札釘付ノ箇所及ヒ同第

十條 免稅印烙記ノ箇所ハ該船舶ノ艙外部後面ニ之ヲ爲スヘシ  
 但烙印ハ從前離形ノ如ク府縣廳ニ於テ調製スヘシ  
 第四條 規則第三條ニ據リ檢査ヲ爲シ假鑑札ヲ付與シタルトキハ其旨定繫場所在ノ管  
 廳ニ通知スヘシ其通知ヲ受ケタル管廳ハ直チニ其地ノ船籍ニ編入シテ該期ノ税金ヲ  
 收入シ追テ木鑑札引換相渡シタル上最前通知ノ管廳ニ報道スヘシ  
 第五條 船舶賣買讓與其他ニテ定繫場ヲ變換シ其新舊定繫場甲乙兩管廳ニ交渉スルト  
 キ乙管廳ニ於テ其地ノ船籍ニ編入鑑札引換相渡シタル上ハ直ニ甲管廳ニ報道スヘシ  
 第六條 前二條ノ手續ニ依リ鑑札引換ノ節ハ更ニ該船ノ檢査ヲ要セス舊鑑札若クハ假  
 鑑札ニ記載ノ噸石數又ハ間敷等ニ據ルヘシ  
 但其返納セン舊鑑札假鑑札ハ不取締無之檢消却シ最初下附シタル管廳ヘ返戻ニ及  
 ハス  
 第七條 (明治十七年三月同省第二十號達訂正) 船舶ノ内其船體ノ構造若クハ網具ノ裝  
 置等西洋形ニ模擬センモノハ總テ西洋形船ニ準テ課稅スヘシ  
 第八條 西洋形(蒸汽風帆)船ハ港灣湖川等ヲ運用スル小船ト雖モ總テ其噸數ニ依リ解  
 漁船小廻船ハ積石數五十石以上ト雖モ總テ其間敷ニ依リ課稅スルモノトス  
 第九條 港灣其他ノ海岸又ハ湖川等ニ碇泊又ハ繫キ置ク船舶ハ主任官隨時之ヲ檢査ス

第十條 船稅表及ヒ免稅船員數表ハ第三號第四號離形ニ倣ヒ每半年分ツ、調製翌期  
 (二七)月三十一日限リ該地差立租稅局ヘ送付スヘシ  
 海岸又ハ何河(湖)岸ト書スルモノハ郡區ノ下其町村ヲ記スヘシ  
 第二號離形亦同シ  
 日本形船ハ何石積日本形船ト記スヘシ



第一號 行政法 船稅取扱心得書

鑑札下附ノ年月日第二號雕形亦同シ

裏面

明治何年何月何日

何  
府 縣

府 廳 烙  
縣 名 印

第二號雕形

木札寸法其他前ニ同シ

解漁松又ハ小廻船遊船ト記ス但日本形積石五十石未滿ノ松ハ小廻船ト記スル

壹間未滿ノ松ハ壹間未滿ト記スヘシ

表面

第何號

押切判  
松鑑札

明治何年何月何日

府 廳 烙  
縣 名 印

何國何郡  
何區  
何港 何岸 何湖(河)  
何場 何定  
何松 何間 何梁 何マテ

何國何郡何町番地  
何村  
誰

(裏面略之但白木)

(第三號雕形松稅表略ス)

第一卷 行正法 松稅取扱心得書

(第四號離形免稅松表容ス)

○第四款 西洋形日本松各開港場出入規則 明治八年十一月 第六十三號布告

第一條 凡ソ西洋形日本松ハ蒸氣風帆ノ別ナク横濱神戸大阪長崎箱館新潟ノ六港ニ入津スルトキハ其投錨時刻ヨリ十二時間ニ第一號書式ノ通り其港稅關ヘ届出ヘキ事

但シ風潮ノ不順等ニ因リ一時無餘儀入港シ十二時間ニ出港スルモノハ届書ヲ出スニ及ハス

第二條 貨物ノ積卸ハ其港稅關ノ免許ヲ受ケタル後チニアラサレハ一切相成ラサル事

第三條 輸入稅未納ノ外國貨物及ヒ貨主外國人ニテ輸出稅未納ノ内國貨物回漕ノ儀ハ本年第二十號布告ニ照ラフ夫々手數致スヘキ事

第四條 出港セントスル片ハ必ラス二時前マテニ第二號書式ノ通り稅關ニ届出ヘキ事

第五條 (明治九年三月第二十九號布告改正) 出入港ノ届ヲ等閑ニスル者ハ左ノ通り料申付クヘキ事

第一號  
入港御届  
一松名 蒸氣 風帆  
噸數  
乗組  
船客 日本人  
仕出場及月日  
着港日  
右御届申上候也  
明治 年 月 日  
某港稅關 御 申  
船長或ハ會社 誰 印

Blank form area for the shipping notice, containing lines for name, tonnage, passengers, date, and signature.



第二號

出港御届  
 一 船名 蒸氣  
 二 船主 帆船  
 三 噸數  
 四 乘組日本人  
 五 船客外國人  
 六 仕向場  
 七 出港日  
 八 右御届申上候也

明治 年 月 日  
 某港稅關  
 御 中

松長或ハ會社  
 謹 印

○第五款 内外貨物廻漕規則 明治八年二月 第二十號布告

第一條 日本郵船會社其他日本船ニテ日本沿海廻漕免許ヲ得タル外國形船舶ニ限リ自今國內各開港場間ニ輸入稅未納ノ外國貨物並ニ貨主外國人ニテ輸出稅未納ノ內國貨物廻漕差許候就テハ從來内外交涉密實買ノ儀ハ嚴禁ノ處尙ホ右ニ類スル所業有之候テハ不相濟儀ニ付廻漕規則ヲ設クルノ左ノ如シ

第二條 凡ソ外國形ノ日本船ハ都テ出入港手數並ニ諸貨物積卸共各開港場ニ於テハ稅關ノ所轄トス

第三條 前條ノ船滯港中ハ稅關ヨリ監吏乘勤スヘシ

第四條 前條ノ船貨物ヲ積卸シ或ハ船卸スルハ日出ヨリ日没マテニ限ルヘシ若シ夜中竊ニ貨物ヲ積卸スルハ其現品ヲ沒收シ且其品價同額ノ罰金ヲ其船長或ハ其會社ニ課スヘシ

但日没ヨリ日出マテハ船中ノ艙口ヲ固封シ蓋シヘシ若シ勝手ニ開封スルハ其船長或ハ其會社ニ金六拾圓ノ罰金ヲ課スヘシ

第五條 甲港ヨリ乙港ニ廻漕スル前條ノ船ニ未納稅内外貨物ヲ積入レ乙港ニ輸送セント欲ル片ハ其貨主或ハ其引受人ヨリ差出書積送差出書式ニ貨物ノ品種箇數記號番號元價等詳細相認メ積送ノ儀稅關ヘ願出貨物檢査濟シ上積送免狀ヲ受ケ積入ルヘシ若シ此手數ヲ經スノ積入ル、片ハ其現品ヲ沒收ス故ニ其船長或ハ會社タル者ハ必ス

第一類 行政法 内外貨物廻漕規則

右免狀ヲ點視シ之ニ照ラシテ其品ヲ積入ルヘシ若シ無免狀ノ貨物ヲ船積セハ事ノ成否ヲ問ハス其會社或ハ其船長ヘ其品價同額ノ罰金ヲ課スヘシ

第六條 甲港ニ碇泊スル外國船ヨリ都合ニヨリ直ニ貨物ヲ船移シ乙港ニ積送ラント欲スルキハ其貨主或ハ其引受人ヨリ船積廻漕ノ差出書各稅關ニ用フニ貨物ノ品種箇數記號番號等詳細相認メ船移ノ儀稅關ヘ願出右免狀ヲ受テ船移スヘキ儀ナレハ其船長或ハ會社タル者ハ右免狀ヲ點視シ之ニ照ラシテ其品ヲ船移スヘシ若シ無免狀又ハ免狀外ノ貨物ヲ船移スルキハ其現品ヲ沒收シ且ツ其品價同額ノ罰金ヲ其船長或ハ其會社ニ課スヘシ

第七條 前條ノ船船ヨリ輸出稅未納內國貨物ヲ外國船ヘ積移スルコトヲ許サス若シ密ニ之ヲ船移シ又ハ船移セント謀ラバ事ノ成否ヲ問ハス其貨物ヲ沒收シ且其會社或ハ其船長ニ其品價同額ノ罰金ヲ課スヘシ

第八條 前條ノ船貨物積尺ノ甲港ヲ出港セント欲スルキハ其船長或ハ其會社ヨリ第壹號ノ如ク積送貨物ノ總目錄二枚一枚ハ甲港稅關ヘ置キ一枚ハ乙港稅關ヘ送達ス一ヲ認メ稅關ヘ差出シ出港免狀ヲ受ケ出港スヘシ若シ此手數ヲ經ズシテ出港スルキハ總目錄ニ記載スヘキ品價同額ヲ罰金トシテ其船長或ハ其會社ニ課スヘシ但シ該船ハ出港前二十四時ヲ隔テ此手數ヲ爲スヘシ

第九條 前條ノ船甲港ヨリ乙港ニ通港中風順ニヨリ不開港場ヘ入津スルニ船輸入稅未納ノ外國貨物或ハ貨主外國人ニシテ內國品ヲ船卸スヘカラス若シ船卸スルキハ密商スルト否トヲ問ハス其現品ヲ沒收シ且其品價同額及ヒ金壹千圓ノ罰金ヲ其船長或ハ其會社ニ課スヘシ

第十條 前條ノ船乙港ニ入港セハ其稅關ヘ第貳號書式ノ如ク未納稅內外貨物ノ輸入總目錄一通ヲ差出スヘシ尤モ此手數ハ入港下碇後休日ヲ除キ四十八時間ニ爲スヘシ此時間ヲ過ルキハ一日毎ニ金六拾圓ノ罰金ヲ課スヘシ

第十一條 前條ノ輸入貨物總目錄中若シ誤脱アルヲ覺知セハ休日ヲ除キ二十四時間ニ更正スルコトヲ得ヘシ若シ此期限ヲ過キ更正スルキハ金十五圓ノ罰金ヲ課スヘシ

第十二條 前條ノ輸入貨物總目錄ヲ甲港ヨリ已ニ廻達アリシ積送貨物總目錄ニ照會シ過不足アルキハ其事由ヲ註明シ條理判然セサレハ不足ノ貨物ハ甲乙兩港間ニ於テ密商セシ者ト看做シ其品物同價ノ金額并ニ金壹千圓ノ罰金ヲ其船長或ハ其會社ニ課スヘシ若シ貨物過ナルキハ其現品ヲ沒收シ且其品價同額ヲ罰金トシテ其船長或ハ其會社ニ課スヘシ

第十三條 前條ノ船入港手數ノ上未納稅內外貨物ヲ陸揚スルキハ其貨主或ハ其引受人ヨリ差出書(各稅關ニ用フル輸入書式)ニ貨物ノ品種箇數記號番號元價等詳細相認メ

陸揚ノ儀税關へ願出貨物検査濟ノ上陸揚免狀ヲ受ケ陸揚スヘシ若シ無免狀或ハ免狀外ノ貨物ヲ船卸セハ事ノ成否ヲ問ハス其貨物ヲ沒收ス故ニ其船長或ハ會社タルモノハ右免狀ヲ點視シ之ニ照シテ其品ヲ船卸スヘシ若シ無免狀或ハ免狀外ノ貨物ヲ船卸シ若シクハ船卸セント謀ラハ事ノ成否ヲ問ハス其會社或ハ其船長へ其品價同額ノ罰金ヲ課スヘシ

但外國貨物ハ輸入税上納ノ上陸揚免狀ヲ受ケ陸揚スヘシ

第十四條 前條ノ船卸便利ニ依リ此規則ニ關係スル貨物ヲ互ニ船移スル片ハ税關へ願出免許ヲ受クヘシ若シ無免狀又ハ免狀外ノ貨物ヲ船移スル片ハ其現品ヲ沒收シ且ツ其品價同額ヲ罰金トシテ双方ノ船長或ハ双方ノ會社ニ課スヘシ

第十五條 各港税關ハ祝日祭日及ヒ日曜日ヲ除クノ外毎日午前十時ニ開キ午後四時ニ閉ス可シ故ニ此規則ニ揭示シタル時限ト税關ノ開閉時限トヲ計リ以テ其期限ヲ愆ルヘカラス

第十六條 此他會社或ハ船長タル者貨主又ハ代人ニ與スルト否トヲ問ハス故ラニ税金ヲ脱セント謀リ若クハ其他諸般ノ方畧ヲ以テ脱税ヲ謀ル者アレハ金壹千圓ヨリ多カラサル罰金ヲ課スヘシ若シ其事過失ニ出テ犯則ニ涉ル者アレハ此規則ニ照ラシテ罰スヘシ

第十七條 總テ事犯則ニ涉ル者其二犯俱發スル者ハ重キニ就テ處分ス可シ

第十八條 若シ此規則ヲ變更スルコトアレハ一月前之ヲ布告スヘシ

未納稅品輸出目錄

記號番號	箇數	品名	斤	或	貨主姓名
内國品			入	等	
外國品					

右ハ當港ヨリ某港ニ廻漕仕候タメ當港ニ於テ當某丸船ニ積受候未納稅品書面ノ通聊カ相違無之且途中不開港場ニ於テ決シテ一個タリハ船卸仕間數候以上

年月日

某會社總代 姓名 印

某丸船長 姓名印

第貳號書式

某港稅關長官謹啟

未納稅品輸入目錄

記號番號	箇數	品名	斤量或等	貨主姓名
內國品				
外國品				

右ハ某港ヨリ當港ニ廻漕仕候タメ當某丸船ヲ以テ積來候未納稅品書面之通聊カ相違無之且途中不開港場ニ於テ一個タリハ船卸仕候儀決シテ無之候以上

某會社總代 姓名印  
某丸船長 姓名印

年月日

某港稅關長官謹啟

○第六款 廻漕貨物取扱條例 明治八年十二月 第百八十四號布告

- 第一條 一廻漕貨物ノ荷造リハ濡沾減損或ハ漏脱等ノ難ヲ防クヘキ豫務ヲ堅固ニシテ其品柄又ハ荷造ノ模樣ニ依リテハ錠鎖或ハ封印スヘシ
- 第二條 一穀物鹽類ノ俵物酒醬液ノ樽物等總テ減損漏脱シ易キモノハ積入ノ時必ス船主貨主ノ間ニ特殊ノ約束ヲ爲スヘシ
- 第三條 一船主ハ荷造ノ粗礎ナルカ錠鎖或ハ封印ナキヲ以テ第一條ノ難ヲ防キ難シト思惟スルトキハ貨主ヘ其趣ヲ通知シテ之ヲ堅固ナラシム或ハ錠鎖封印セシメ又第二條ノ物品ヲ托セラシム片ハ特殊ノ約定ヲ爲スヘキヤ否ヤヲ訊問スヘシ
- 第四條 一貨主ハ第三條ノ通知或ハ訊問ヲ得ルモ之ヲ堅固ナラシメス或ハ錠鎖封印セズ又其約定ヲ爲サハルキハ濡沾減損或ハ漏脱等ノ難ヲ運漕中生スルハ船主ニ對シ其

第一類 行政法 廻漕貨物取扱條例

辨償ヲ要スル權利ナカルヘシ

第五條 一廻漕運賃ハ發船ノ甲地ニ於テ渡戸場或ハ船主ノ倉庫等船主ノ其貨物ヲ受取ルヘキ適當ノ地ト定メタル場所ヨリ着船ノ乙地ニ於テハ渡戸場或ハ其船主ノ倉庫等船主ノ其貨物ヲ引渡スヘキ適當ノ地ト定メタル場所ノ外之ヲ取集メ及ヒ配達スルノ費用ヲモ合スルモノニアラス故ニ其取集及ヒ配達ヲモ船主ニ托スルハ貨主ハ廻漕本賃ノ外ニ相當ノ取集及配達賃ヲ拂ハサルヘカラス

第六條 一前條乙地ニ着船スルハ船主ヨリ貨主ニ其貨物ヲ渡スヘキ適當ト定メタル場所ニ於テ何日何時ヲ限リ其貨物ヲ渡スヘキ旨ヲ報告スヘシ若シ貨主ノ都合ニ依リ其時日ヲ過キテ之ヲ受取ラサルハ其後ニ至リ危險損害ヲ生スルハ船主ハ其責メニ任セサルヘシ

但シ其報告スヘキ日時ハ必ラス貨主ノ受取得ヘキ適當ノ時間ヲ以テスヘシ若シ不適宜ノ時間ヲ以テスルハ之ヲ報告セサルト同般ト見做スヘシ然ルハ之ニ生スル危險損失ハ船主ノ責ヲ免カルヘカラス

第七條 一前條ノ如ク其報告時限ヲ過ルハ船主ハ之ニ生スル危險損失ハ其責ニ任セスト雖モ必ス危險損失ヲ生セサル様之ヲ倉庫ニ納メ或ハ番人ヲ附テ或ハ雨覆等ノ備ヲナシ勉メテ保護ノ手立ヲ爲スヘシ然ルハ相當ノ倉敷料番人賃其他之ニ屬スル費用

用ヲ貨主ヨリ拂ハシムヘシ

第八條 一廻漕運賃ハ第五條ニ記載セル甲乙約定地ノ全運航賃ナルニ因リ其全運航ヲ畢ヘサル間ハ貨主ハ之ヲ拂フコトヲ拒ムノ理アリ又幾百石何千斤ニ付此運賃若干ト約定セルニ其全量中幾分ノ不足ヲ生スルハ貨主ハ其全運賃ヲ拂フコトヲ拒ミ得ヘシ然レモ其全量幾何千箇ヲ運送セルモ其一俵一箇ニ付運賃幾許ト約定セルハ其全量ノ如何ヲ問ハス之ヲ受取ラタル俵數箇數ニ就テ約定運賃ヲ拂ハサルヘカラス又封印ヲ檢シ外包ノ異狀ナキヲ以テ之ヲ受取後其包中ノ物品ニ不足或ハ損傷アルモ其辨償ヲ船主ニ責ムルヲ得ヘカラス

第九條 一船主ハ其約定ヲ履テ安全ニ其貨物ヲ運送スルヲ本分ノ義務トス故ニ第一條及ヒ第二條ニ遵ヒタル貨物或ハ正ニ請取シ旨ヲ証シタル貨物ノ全數中ニ損害不足ヲ生スル等ノ事アルハ其貨物ノ原價ニ從ツテ之ヲ辨償スヘシ

但シ海上難船ノ災厄ニ罹ルモノハ危險受負法或ハ海上平均法ノ別種ニ屬シテ此限ニアラス

第十條 一運賃ハ船主貨主ノ協議ニ依リテ甲地又ハ乙地ニ於テ受拂フヘシ然レモ之ヲ乙地ニ於テ受拂フハ其貨物ト引換ヲ以テスヘシ若シ貨物ヲ受取リタル後チ其拂方ヲ怠ルハ船主ハ其受取ルヘキ賃額ヘ對シ相當ノ利息ヲ課シテ要請スルヲ得ヘシ

○第七款 危害品積込規則

明治六年八月 第二百九十二號布告

危害品生スヘキ物品ヲ漫リニ積込致シ候テハ他ノ物品ヲ傷害シ甚シキハ全船ヲ失ヒ人命ヲ損シ不易儀ニ付左ノ條件之法則ヲ定メ當明治六年十月一日ヨリ令施行候條此旨布告候事

一 火藥硝石硫黃ノ類及ヒ發火シ易キ製藥品其他油脂醬液並ニ腐敗シ易キ性質ニシテ他物ヲ損害スヘキ物品積込致シ候片ハ其品名ヲ表包ノ外部ニ書キ記シ或ハ其送狀ニ記載致シ船主船長又ハ運漕會社危難請合會社等ノ承諾ヲ得テ後チ差出スヘシ若シ其手數無之尋常ノ荷物ト伴リ之ヲ積込致シ或ハ船積セント謀ルモノハ金五百圓以內ノ罰金ニ處スヘキ事

一 尋常ノ品物トシテ差出シタル荷物ノ内ニ前條ノ如キ危害品可有之ト見受候片ハ船主船長運漕會社危難請合會社ハ何時ヲ限ラス何地ヲ論セス直ニ發包シテ之ヲ視查スルノ權利可有之事

但シ爲視查發包シタル荷物中ニ危害品無之片ハ船主會社等ノ入費ヲ以テ故ノ如ク荷遣可致然レハ其荷物中ニ危害品有之片ハ是等ノ入費都テ荷主ヨリ可拂事

一 危害品ヲ船積セサル以前運漕會社又ハ危難請合會社ノ倉庫ニ於テ見出ス片ハ之ヲ安

全ノ場所ニ移シ置キ直ニ其管轄廳或ハ裁判所ヘ可届出事

但シ安全ノ場所ニ之ヲ移スノ費用ハ荷主ヨリ辨償可致事

一 此危害品ヲ既ニ船積シタル後チ見出シ之レヲ安全ノ場所ニ保チ難キ片ハ船中ニ於テ三人以上ノ保證人ヲ立テ之レヲ海中ニ投棄シ若港ノ上直チニ其次第書及ヒ荷主ノ姓名ヲ其地ノ管轄廳或ハ裁判所ヘ可届出事

但シ投棄シタル荷物及ヒ是ヨリ生スル荷主ノ損失ヲ辨償スルニ不及事

一 船長及ヒ運送會社等荷主ト申合セ此ノ危害品ヲ尋常ノ荷物トシテ船積ミシ或ハ船積ミセント謀ルモノハ金五百圓以內又之レヲ見出スト雖モ官ニ訴ヘ出サル片ハ金貳百圓以內ノ罰金ニ處スヘキ事

○第八款

北海道諸產物出港稅則 明治十年八月 並各港船政所規則 第五十六號布告

第一條 北海道諸產物 紙生絲器具ヲ除ク 各府縣ヘ輸送ノ節ハ官私用品ヲ除ク 陸海軍用ノ別ナク 出港稅トシテ其原價百分ノ四ヲ貨主ヨリ下條ニ掲載スル一ノ船政所ニ納ムヘキ

但シ本文ノ稅金ハ船長ニ於テ取纏メ 外國船ヲ以輪送ノ節ハ貨主納入ノ手續ヲ爲スヘシ

第二條 (明治十三年七月第三十三號布告明治十三年十一月第五十一號布告明治十四年十二月第六十六號布告ヲ以テ本條ヘ追加並ニ改正左ノ如シ)

第一類 行政法 北海道諸產物出港稅則並各港船政所規則 四百十七

船政所有之各港

渡島國龜田郡函館港 同國松前郡福山港 同國檜山郡江差港 膽振國室蘭郡室蘭港 後志國小樽郡小樽港 同國壽都郡壽都港 釧路國厚岸郡厚岸港 根室國根室郡根室港

左ノ十一ヶ所ニ於テ毎年五月ヨリ十月マテノ間船政派出所ヲ置キ船政所同様ノ事務ヲ取扱フヘシ

渡島國松前郡吉岡 同國上磯郡石別 同國松前郡江良町 同國耐志郡熊石 後志國古平郡古平 同國岩内郡岩内 石狩國石狩郡石狩 天鹽國増毛郡増毛 日高國浦河郡浦河 釧路國厚岸郡濱中 千島國振別郡振別

第三條 諸産物ノ原價ハ右各港ニ於テ毎月上中下旬三度賣買相場ヲ蒐集シ之ヲ査定スヘシ

但シ相場詳カナラサル物品ハ賣買仕切狀ヲ檢査シテ之ヲ定ムヘシ

第四條 諸船各府縣下ヨリ北海道ヘ入船スルハ船免狀或ハ船稅鑑札ヲ添ヘ第一號書式ノ通り其港津船政所ハ地方役所又ハ區戶長役場以下同シヘ速ニ届出ヘシ

但北海道産物ニ類似ノ物品ヲ青森秋田兩縣下等ヨリ回漕スル分ハ其品名數量ヲ詳記シタル仕切物ノ送狀或ハ賣買仕切狀ヲ添ヘ届出ヘシ

第五條 北海道各港津ヲ廻漕スル諸船舶ハ出帆ノ節甲港船政所或ハ地方役所ヘ申出改

所役所ニ於テハ第二號書式ニ法リタル檢印帳ヲ付與シテ廻漕セシムヘシ其船乙港ヘ入津セハ乙ノ船政所或ハ役所ヘ速ニ檢印帳ヲ納メ置キ出帆ノ節乙港ノ檢印ヲ乞フテ携帶スヘシ丙丁港ノ出入モ又之ニ準ス

但シ回漕數月ニ渉ル船モ該年中マヘノ檢印帳ヲ用ヒシメ翌年ハ更ニ之ヲ付與スヘシ

第六條 諸船舶北海道内ヨリ各府縣ヘ向ケ回漕ノ節ハ第二條ニ掲グル各港ノ内何レカ

一港ヘ入船シテ其船政所ヘ檢印帳ヲ還納シ第三號甲ノ書式ニ法リタル出港稅納目錄ニ通テ差出シ産物積載セサル節ハ第四號甲ノ書式ノ出帆届ニ通テ差出スヘシ改所ニ於テハ審査ノ上産物積載シタルハ定期ノ税金ヲ領収シ第三號乙ノ書式ニ法リ産物積載セサルハ第四號乙ノ書式ニ法リ與書シテ一通ハ留置キ一通ヲ下付シテ出帆差許スヘシ

但シ許可ヲ得タル後チ都合ニ依リ三日以内ニ出帆セサル船ハ更ニ其旨ヲ届ケ出ツヘシ

第七條 船政所ナキ地方ヨリ産物積取直ニ各府縣ヘ輸送セント欲スル者ハ其積受ノ地ヘ航行ノ節第二條ニ掲グル各港ノ内何レカ一港ヘ入津シ豫メ其積取ルヘキ産物ノ高

第一類 行政法 北海道諸産物出港稅則並各港船政所規則 四百十九

ヲ計算シ第三號甲ノ書式ニ法リタル出港稅前納目錄ニ通テ差出シ船政所ニ於テハ前納目錄ノ高ニ從ヒ定則ノ稅金ヲ領収シ同號乙ノ書式ニ法リ與書シテ一通ハ留置キ一通ヲ下付シテ直航差許スヘシ

但シ本條許可ヲ得テ其地ニ到リ產物積取ノ節ハ其地方役所ニ申立検査ヲ受クヘシ  
役所ニ於テハ出港稅前納濟ノ目錄ニ照較シテ之ヲ検査シ若シ產物不足ノ節ハ其由ヲ詳記セル書面ヲ右目錄ニ添ヘテ船長ヘ下附シ船長之ヲ翌年七月マテニ彙キニ納稅ノ船政所ヘ差出スニ於テハ過納ノ金額下戻スヘシ

第八條 出港稅納濟ノ諸物產都合ニ依リ第二條ニ掲グル各港之内ハ陸揚スル片ハ該港船政所ヘ願出スヘシ改所ニ於テハ現品審査ノ上稅納濟ノ目錄ヲ引上ケ稅金下戻スヘシ

但シ出港稅ヲ收納シタル港内ニ於テ難破ノ災ニ罹リ稅納濟ノ產物流沒シタル分ハ實際検査ノ上稅金下戻スヘシ

第九條 各港船政所及ヒ役所ハ休日ヲ除クノ外毎日午前九時ヨリ午後四時迄船舶出入ノ事務取扱マヘシ尤モ諸貨物船積卸ハ日出ヨリ日没マテテテ限リトス

但シ臨時出入港ノ手數ヲ請ヒ或ハ時限外ニ貨物ヲ積卸セント欲スル者ハ其事由ヲ具シ船政所或ハ役所ヘ願出ヘシ

第十條 諸船舶出港稅未納或ハ納稅目錄外ノ產物ヲ竊ニ積載セ各府縣ヘ輸送セント謀リ又ハ府縣下ニ於テ陸揚スルモノハ科料トシテ船長ヨリ其物品原價其發露スル地方テ之レ十分ノ二及出港稅ヲ徵收スヘシ

第十一條 各港船政所及ヒ役所ニ於テハ每船ノ出入ヲ審査シ若シ此規則ニ循ハサルモノアリテ其踪跡詳カナラサル片ハ開拓使ヨリ直ニ其船主ノ本管廳ヘ通報シ本管廳ニ於テハ出港稅及ヒ科料ヲ徵收シ其事由ヲ詳記シテ書面ヲ添ヘ同函館支廳ヘ送付スヘシ

但シ北海道回漕中暴風等ノ難ニ罹リ止ムヲ得スシテ直テニ府縣下ヘ入船スルモノハ本條ノ限リニアラサル故其事由ヲ具シ檢印帳ヲ添ヘ速カニ其地方廳ヘ届出スヘシ地方廳ハ事實篤ト取札ノ上疑ナキニ於テハ其現存スル物品ノ出港稅原價ハ其入方賣買ノ價格ヨリ其運賃ヲ除キ之ヲ定ムヲ徵收シテ本文同様送付スヘシ

第十二條 出入港ノ届及檢印帳ノ納受ヲ等閑ニスルモノ或ハ許可ヲ得スシテ時限外ニ荷物ヲ積卸シスルモノハ左ノ算則ニ從ヒ船長ヨリ科料ヲ徵收スヘシ

日本形船 五拾石マテ金拾五錢 五拾壹石以上拾石毎ニ壹錢ヲ加フ  
外國形船 五拾壹石以上拾石毎ニ壹錢ヲ加フ



三拾噸マテ金五拾錢 三拾壹噸以上拾噸毎ニ拾七錢ヲ加フ  
 同風帆船  
 三拾噸マテ金三拾錢 三拾壹噸以上拾噸毎ニ拾錢ヲ加フ  
 第十三條 總テ犯則ノ者ヲ他ヨリ訴出ルルハ犯人科料ノ半額ヲ賞トシテ與フヘシ  
 第壹號

入港御届	
船形	一船名
積高	何何
船主	何何 府 縣 管下何國何郡何所何之誰
乘組	外何 長 縣 管下何國何郡何所何之誰
積荷	目録ノ通
仕出場所及仕出場所出帆月日	
入港日	
右御届申上候也	

明治 年 月 日	右船長 何之誰印
何港	
何郡	
何所	
役所	
區戸長	
御中	

第貳號	檢印帳
船形	一船名
積高	何何 府 縣 管下何國何郡何所何之誰
船主	何何 府 縣 管下何國何郡何所何之誰
乘組	外何 長 縣 管下何國何郡何所何之誰

第一類 行政法 北海道諸產物出港稅則並各港船政所規則 四百二十三

出港日

右北海道廻漕差許候也

明治 年 月 日

以下乙丙港出入檢印ノ書式

入港月日

出港月日

開拓使管下

何 郡

何 所 □

開拓使管下

何 郡

何 所 □

第三號

船形

一船名

積高

何 噸

出港稅納目錄

何郡出產

一品名 何百石

但百石ニ付金何百圓相場

船主何 縣管下何國何郡何所何之誰

乘組外何人

此代金何百何拾何圓何拾錢

此稅金何拾何圓何拾何錢何厘

但代金百分ノ四

甲 何郡出產

一品名

何百何十貫目

但何貫ニ付金何圓相場

此代金何拾何圓何拾何錢

此稅金何圓何拾何錢何厘

但代金百分ノ四

稅合金何拾何圓何拾何錢何厘

右之通出港稅金上納仕候間今

何港へ直航御差許被下度候以上

右船長

何 之 誰 印

明治 年 月 日

何港 船政所

前書之通產物出港稅金領収出帆中直航差許候也

開拓使管下

第一號 行取法 北海道諸島出港稅則並各港船政所規則 四百三十五

乙  
明治年月日  
第何號

何港  
何姓名印

第四號

出帆御届

松形

一松名

積高

何何

何何

何何

何何何何何何何何何何

甲 乘組

何何

何何

何何何何何何何何何何

何何

何何

何何

仕向場

出港口

右御届申上候也

右松長  
何之誰印

明治年月日

何港

船政所  
御中

乙

出帆査部

第何號

○第九款 西洋形商船海員雇入雇止規則 明治十二年三月 第九號布告

第一條 西洋形商船(蒸氣船ハ拾噸以上風帆船ハ廿噸以上)ニ於テ海員ヲ雇入又ハ雇止  
ヲ爲ス時ハ總テ此規則ノ條款ニ準據スヘシ

(明治十三年第十號布告ヲ以テ商船ノ文字ヲ刪リ西洋形船ト改正)

第二條 雇入ノ時ハ其地ニ於ケル浦役場ニ於テ農商務省(明治十四年九月第四十三號  
省ト改ム)ヨリ發スル海員雇入證書用紙ヲ以テ其定約書ヲ作リ雇者被雇者記名調印ノ上  
浦役人ノ公認ヲ受クヘシ

但定約書ハ正副武通ニ作リ其本書ハ本船ニ保チ置キ副書ハ浦役場ニ止メ置クヘシ  
第三條 内海回漕船ニ於テハ雇入期限ヲ六ヶ月以内ト定ム然レモ外國航船ニ於テハ六  
ヶ月以外ヲ約スルヲ得ヘシ

第四條 雇止ノ時雇者ハ其地ニ於ケル浦役場ニ於テ農商務省ヨリ發スル海員雇止證書  
用紙ヲ以テ雇止證書ヲ作リ記名調印ノ上浦役人ノ公認ヲ受ク之ヲ其被雇者ニ付與ス

第一類 行政法 西洋形商船海員雇入雇止規則

四百二十七

△(明治十六年十二月第四十四號布告第四條)左ノ三項追加同年七月一日ヨリ施行)雇  
 入又ハ雇止ノトキ技術免狀ヲ所持スルモノハ浦役人ノ檢査ニ供シ且其檢査証書ヲ申  
 受ヘシ  
 雇入又ハ雇止ノ公認ヲ受クルトキハ手數料トシテ被雇者給金一月分ノ百分一ニ當ル  
 金額ヲ雇者被雇者ヨリ各其半額ツ、浦役場ニ納ムヘシ  
 雇入定約書及ヒ雇止證書ヲ亡失毀損シ其寫ヲ乞フ者ハ貳名以上ノ保証人ト連署シテ  
 當初公認ヲ受ケタル浦役場ニ申出ヘシ浦役人ハ簿冊ニヨリ之ヲ製シ認印ヲ捺シテ交  
 付スヘシ  
 第五條 雇止ハ雇入地ニ限リ行フヘシ故ニ雇入地外ニ於テ滿期ニ至ルモ雇入地ニ販着  
 スル迄ハ雇入期限内ニ看做スヘシ  
 但シ雇者被雇者双方ノ協意ヲ以テスルモノハ本條ノ限リニアラス  
 第六條 左ノ場合ニ於テハ雇入地外ト雇入期限内トニ拘ハラズ雇者ヨリ雇止ヲ爲スチ  
 得ヘシ  
 一 疾病又ハ體質孱弱ノ故ヲ以テ本務ヲ執行シ能ハサル者  
 一 本船難破其他ノ災厄ニ罹リ進行シ能ハサル時

但以上二項ノ場合ニ於テハ雇者ノ費用ヲ以テ雇入地へ販還セシムヘシ  
 一 第十條ニ掲ケル違約一ヶ月内三回以上ニ至ル者  
 一 第十一條ヲ犯ス者  
 第七條 又左ノ場合ニ於テハ雇入地外ト雇入期限内トニ拘ハラズ被雇者ヨリ其定約ヲ  
 解クヲ得ヘシ  
 一 苛虐ノ取扱ヲ受ケシ時  
 一 飲食物又ハ給金ノ全額或ハ幾分ヲ給與セラザル時  
 但シ右ノ場合ニ於テハ雇入地へ販着ノ旅費ヲ請求スルヲ得ヘシ  
 第八條 外國ニ於テ雇入若クハ雇止ヲ爲ス片ハ其國駐留ノ我國領事館ニ於テ農商務省  
 ヨリ發スル用紙ヲ以テ定約書若クハ雇止證書ヲ作り記名調印ノ上領事ノ公認ヲ受ク  
 へシ  
 但シ定約書ハ正副二通ニ作り其本書ハ本船ニ保チ置キ副書ハ領事館ニ止メ置ヘシ  
 第九條 新クニ海員トナル者及ヒ此規則施行以前雇止ト爲リシ者ヲ除クノ外被雇者ハ  
 必ス最後ノ雇止證書ヲ所持スヘシ又雇者ハ最後ノ雇止証書ヲ所持セサル者ヲ雇入ス  
 可カラズ  
 第十條 船長ノ指圖ヲ背ク者許可ヲ得スシテ上陸シ又ハ許可ノ時限ヲ過キテ販船スル

者(第十一條ノ脱船者ニアラス)本務ヲ怠ル者喧嘩口論ヲ爲ス者酩酊スル者私ニ銃器  
刀鎗或ハ酒類ヲ船中ニ貯フ者ハ毎回其給金三分ヨリ多カヲナル額ヲ違約金トシテ  
雇主之ヲ収メ且ツ其銃器刃鎗或ハ酒類ヲ取上ルヲ得ヘシ

第十一條 船中ニ於テ徒黨ヲ謀ル者船長ヲ切ス者脱船スル者(雇入期限内ニ逃亡スル  
者ヲ云フ)ハ其事情ニ因リ百日以内ノ懲役ニ處ス若シ船体船具ヲ毀傷シ又ハ賊貨ヲ  
私用スル者ハ其實價ヲ償ハシムルノ外本條ニ依テ其罪ヲ科スヘシ

第十二條 海員ヲ虐使シ飲食物或ハ給金ノ全額又ハ幾分ヲ給與セサル者ハ其事情ニ  
因リ百圓以内ノ罰金ヲ科シ其給與セサル金額ハ年六分ノ利子ヲ加ヘ償還セシムヘ  
シ

第十三條 此規則中第十條第十一條第十二條ヲ除キ其他ノ諸條款ヲ犯ス者ハ其事情ニ  
因リ五拾圓以内ノ罰金ヲ科スヘシ

○第十款 海員雇入雇止事務取扱手續 明治十七年三月 農商務省第九號

沿海府縣及滋賀縣へ達

客年十二月第四十五號布告ヲ以テ明治十二年第九號布告西洋形船海員雇入雇止規則第  
四條へ三項追加相成候ニ就テハ右事務取扱手續左ノ通相定候條此旨相達候事

海員雇入雇止事務取扱手續

第一條 雇入ノ公認ヲ與フルニ際シ浦役人ハ左項ニ注意スヘシ

第一 船長、運轉手、機關手、技術免狀ノ有無ヲ檢問スル

第二 被雇者ニ於テ最後ノ雇止證書ヲ所持スルヤ否ヲ推問スル

第三 被雇者ヲシテ雇入定約ノ旨趣ヲ了解シタルヤ否ヲ推問スル

第二條 浦役人ハ船長、運轉手、機關手、技術免狀ヲ檢査シ真正ノモノト認ムルハ農  
商務省ヨリ發行シタル技術免狀檢査證書ニ該免狀ノ種類及船名定繫港名等ヲ記シ之  
ヲ交付スヘシ

第三條 浦役人ハ被雇者ヨリ最後雇止證書ヲ出サシメ其證書裏面へ何年月日何港ニ於  
テ更ニ何船へ雇入トナリタル旨ヲ記入シ且之ニ認印スヘシ但新ニ海員トナリ最後雇  
止證書所持セサルモノハ此限ニアラス

第四條 被雇者中定約ノ旨趣ヲ了解セサルモノアレハ浦役人ニ於テ或ハ之ヲ讀聞セ或  
ハ解釋シテ充分了解セシムヘシ

△(明治十七年七月農商務省第二十五號達)

本年三月第九號達海員雇入雇止事務取扱手續第四條ノ次へ左ノ一條ヲ追加シ之ヲ第  
五條トナシ舊第五條以下順次操下ケ候條此旨相達候事

第一類 行政法 海員雇入雇止事務取扱手續

第五條 新タニ海員トナル者ニ雇入ノ公認ヲ與ヘタルハ其族籍氏名年齢ヲ本籍ノ戸長ニ照會シ從前海軍兵役ノ有無ヲ取調ヘ雇入證書ノ寫若クハ海員名簿ニ記入ス

第六條 雇入ノ片ハ勿論雇止ノ片ト雖モ其證書ノ寫ヲ浦役場ニ保存スヘシ且雇入雇止事務繁劇ノ場所ニ於テハ更ニ海員名簿ヲ備置雇者被雇者ノ住所、氏名、乘組船名等ヲ記入シ他日ノ參照ニ供スヘシ

第七條 雇止ノ公認ヲ爲スハ前定約面ト相違ノ有無ヲ取糺シ若シ當初雇入ノ定約面ト相違ノ難有之ハハ船内日記簿其他ノ書類ニ據リ雇者ヨリ其實實ヲ証明セシメ海員名簿ニ其旨ヲ記入シ而シテ之ガ公認ヲ與フヘシ

第八條 甲地浦役場ニ於テ雇入ノ公認ヲナシタルモノヲ乙地浦役場ニ於テ雇止ノ公認ヲ爲シタルハ郵便其他便宜ノ方法ヲ以テ甲地浦役場ヘ遅クモ一月以内ニ之ヲ通報スヘシ此場合ニ於テハ甲乙兩浦役場ニ於テハ其雇入證書ノ寫若クハ海員名簿ニ其事由ヲ記入スヘシ

第九條 雇入雇止證書中被雇者年齢ハ必ス生年月日ヲ記入セシムヘシ

第十條 雇入雇止證書中書損アル片ハ必ス正誤セシメ浦役場之人ニ認印スヘシ若シ書損甚シク字句不分明ナル片ハ更ニ新調セシムヘシ

第十一條 雇入期限中脱船又ハ死者アリシコトヲ届出タル時ハ雇入證書中事故摘要ノ部ヘ其事故ヲ記載シ尙ホ其證書ノ寫若クハ海員名簿ニ之ヲ記入スヘシ

第十二條 雇入證書ハ假令ヒ餘白アリト雖モ再度之レヲ使用スルヲ許サス故ニ其餘白ハ總テ斜線ヲ畫スヘシ

第十三條 雇入期限内雇者被雇者ヨリ雇止ノ公認ヲ請フモノアル時ハ規則ニ照シテ其事由ヲ查明シ之ガ公認ヲ與フヘシ但正副雇入證書及ヒ海員名簿ニ其事由ヲ記入スヘシ

第十四條 雇入期限内ニ雇者變更スト雖モ更ニ雇入約定ヲ爲サシムルニ及ハス然レモ此場合ニ於テ滿期雇止ノ片雇者變更ノ事由ヲ正副雇入證書若クハ海員名簿ニ記入スヘシ

△(明治十八年三月同省第七號達追加)

第十五條 海技免狀ヲ受有スル者ハ海員雇入雇止證書職務欄内ニ免狀ノ種類及ヒ現ニ服務ノ職名ヲ記シテ公認ヲ與フヘシ

○第十二款 浦役場事務條款  
(明治九年十二月第百十七號  
 (開拓使及沿海府縣ヘ)達)

從來浦役人ノ名稱有之候得共其事務ノ定限モ無之ニ付自今左ノ條款ニ從ヒ浦役場ヲ設

置シ浦役人ヲ命スヘシ此旨相達候事

第一條 浦役場ハ沿海大市及ヒ商船輻湊ノ地ニ於テハ便宜ノ場所ヲ撰テ之ヲ設置ス可

第二條 浦役場ハ當分ノ中區務所等ヲ以テ代用シ浦役人ハ區長若クハ戶長ニ兼勤申付  
書記用掛等ヲシテ補助セシムヘシ

第三條 浦役人ハ其地繫泊船ニ關スル庶務（警察事務稅關事務其他主管アル事務ヲ除  
キ）及ヒ難破船取扱難破浦證交付與等ノ事ヲ掌ラシムヘシ

第四條 浦役場設置ノ地名ハ明治十年三月三十一日限リ內務省ニ報告シ以後毎年十二  
月中ニ其廢置變換等ヲ同省ヘ報告スヘシ

○第十二款 西洋形船長運轉 明治十四年十二月  
手機關手免狀規則 第七十五號布告

西洋形船々長運轉手機關手免狀規則

此規則ハ海軍諸艦ニ關セサルモノトス  
此規則中內國航船ト稱スルハ支那朝鮮ノ間ニ於ケル鴨綠江ヨリ露領黑龍江ニ至ル  
ノ沿岸及ヒ薩噠噠諸港ニ航スルモノモ亦包含ス

第一條 船長運轉手機關手ノ職ヲ執ル者ハ此規則ニ遵ヒ其職ニ應スル等級ノ免狀ヲ農  
商務卿ヨリ受ケ之ヲ所持スヘシ

第二條 免狀ハ甲乙及ヒ小形船機關手ノ三種トナシ又甲乙ノ兩種トモ船長一等運轉手  
二等運轉手一等機關手二等機關手ノ五ニ分テ各試驗規程ニ從ヒ及第セシ者ニ授與ス  
ヘシ

第三條 試驗ノ規程ハ第一號布達ニ據ルヘシ

第四條 高等ノ免狀ハ下等ノ免狀ニ代用スルヲ得下等ノ免狀ハ高等ノ免狀ニ代用スル  
ヲ得ス

甲種船長ノ免狀ハ乙種船長ノ免狀ニ對シ高等ノ効力ヲ有シ運轉手機關手ノ免狀ニ於  
ケルモ亦同シ

乙種二等運轉手ノ免狀ハ從前ノ小形船々長ノ免狀ニ對シ高等ノ効力ヲ有シ乙種二等  
機關手免狀小形船機關手免狀ニ於ケルモ亦同シ

第五條 從前授與シタル本免狀ハ甲種免狀ト同一ノ効力ヲ有シ又假免狀ハ當分ノ内乙  
種免狀ニ代用スルヲ得

從前授與シタル小形船々長ノ免狀ハ其効力ヲ存シ又從前ノ小形船機關手ノ免狀ハ當  
分ノ内本則ノ小形船機關手免狀ニ代用スルヲ得

第六條 免狀ノ書換又ハ再授ヲ請フキハ手数料金壹圓ヲ納ムヘシ但シ再授ヲ請フ者ハ二名以上ノ証人ヲ要ス

第七條 免狀ハ其筋吏員ノ指圖ニ應シ何時タリトモ其検査ヲ受クヘシ

第八條 甲種免狀試験課程ニ合格スト認メタル外國政府ノ本免狀ヲ所持セル船長、運轉手、機關手ハ更ニ試験ヲ要セス原免狀同等ノ免狀ヲ授與スヘシ

第九條 左ノ三項ニ記載スル各船ハ其所用ノ區別及ヒ登簿噸數、公稱馬力ノ限度ニ從ヒ應等若クハ高等ノ免狀ヲ受有スル職員ヲ乘組マシムヘシ

第一項

三百噸未満

外國航船

甲種免狀船長

一名以上

同一等運轉手

三百噸以上

同

甲種免狀船長

同

同一等運轉手

一百馬力未満

同

同一等機關手

同

一百馬力以上

同

同一等機關手

同

第二項

二百噸以上

內國航船

乙種免狀船長

同

同一等運轉手

五百噸以上

內國航船

同一等運轉手

一名以上

二百馬力以上

同

甲種免狀船長

同

五十馬力以上

同

乙種免狀二等機關手

同

五十馬力未満

同

乙種免狀一等機關手

同

一百馬力以上

同

甲種免狀一等機關手

同

一百馬力未満

同

甲種免狀二等機關手

同

第三項

二十噸(汽船ハ)以上

同

乙種免狀二等運轉手

同

一百噸未満

同

若クハ從前ノ小形船々長

同

二十馬力未満

港内若クハ湖川用

小形船機關手

同

二十馬力未満

同

小形船機關手

同

但シ二十馬力以上ノモノハ第二項ニ準ヒ機關手ヲ乘組マシムヘシ  
前記各項ニ從ヒ應等若クハ高等ノ免狀ヲ受有セス或ハ禁止停止ニ係リ受有シ能ハス  
シテ其職ヲ執ル出航スル者及ヒ之ヲシテ其職ヲ執ラシメ又ハ其職員ヲ減シテ出航セ

第一類 行政法

西洋形船々長運轉手機關手免狀規則



シムル者ハ各貳圓以上二百五拾圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ

第十條 農商務卿ハ舩長運轉手機關手ノ技術劣等ニシテ其職ヲ執ルニ不適當ナリト考察スルハ又ハ左ニ掲クル事項ニ於テハ其筋ノ吏員ヲシテ之ヲ審問セシメ其免狀ノ使用ヲ停止シ或ハ禁止スルコアルヘシ

第一 亂醉、粗暴其他不品行若クハ指揮ニ悖戾シ又ハ職務ニ怠ル者

第二 失錯又ハ不當ノ所爲ニ由テ舩ヲ失ヒ或ハ棄テ或ハ之ニ大損害ヲ生シ又ハ人命ヲ害ヒ或ハ大傷痕ヲ被ラシメシ者

第三 輕罪以上ノ刑ニ處セラレタル者

第十一條 前條審問中檢察官又ハ被害者ヨリ裁判所ニ出訴スルトキハ農商務卿其審問ヲ中止シ裁判確定ヲ俟テ之ヲ處分スヘシ

第十二條 免狀ノ使用ヲ停止シ或ハ禁止スルハ農商務卿其免狀ヲ取揚シヘシ若シ之ヲ拒ムモノハ貳圓以上貳百五拾圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ

但シ第九條末項ノ罪ト俱ニ發スルトキハ罰金ヲ並ヒ科スヘシ

第十三條 免狀使用ノ停止或ハ禁止ノ處分ニ服セサル者ハ其筋へ上訴スルトキ得ヘシ

第十四條 免狀ノ使用ヲ禁止シタル者ト雖モ一々年ノ後ニ至リ農商務卿ノ考察ヲ以テ更ニ相當ノ免狀ヲ授與スルコトアルヘシ

○第十二款 西洋形舩水先免狀規則

明治十一年十二月第三十七號布告

第一條 明治十二年一月一日ヨリ以後下ニ記載スル海港即チ水先區ニ於テ西洋形舩ノ水先人トナリ營業スル者及ヒ西洋形舩舩ノ水先舩トシテ使用スル諸舩へハ此規則

ニ從テ發行スル免狀ヲ交付スヘシ

第二條 水先ノ事業ニ關係シタル諸般ノ事務ハ農商務省(明治十四年九月第四十三號正ス故ニ今其改正布告ニ從フ以下倣之)ノ統轄ニ屬シ同省ニ於テハ充分其筋ニ明ナル者ヲ撰ニ此規則

ニ準據シテ各試驗出願人ヲ試驗スヘシ

第三條 免狀ハ左ニ記載ノ海港即チ水先區ニ於タル水先人ニ交付シ且現況ニ從テ其他ノ地方ニ於タル水先人ニ交付スヘシ

第一 東京灣

即チ伊豆國石廊岬ヨリ同國神子本島及ヒ大嶋波濤港ヲ通過シテ安房國野島岬ニ至ル一線ヲ以テ疆界線トス

第二 和泉灘

即チ紀伊國宮岬ヨリ淡路國潮崎ノ仁頃ニ至ル一線ヲ以テ其南界ヲ畫シ北ハ淡路國極北ノ部ニ於タル東經百三十五度ノ所ニ於テ畫シタル一線ヲ以

テ疆界線トス

第三 和泉灘ヨリ瀬戸内ヲ通過シテ長崎迄

第四 長崎港

即チ肥前國福田村ヨリ同國伊王嶋ノ極北ヲ通過シ同國沖島及ヒ香燒島ヲ

經テ同國深堀ニ至ル一線ヲ以テ疆界線トス

第五 津輕海峽

即チ陸奥國尻矢崎ヨリ渡嶋國惠山崎ニ至ル一線ヲ以テ其東界ヲ畫シ陸奥

國大間村ヨリ同國龍飛崎ニ至ル一線ヲ以テ其南界ヲ畫シ同國龍飛崎ヨリ

渡島國白神崎ニ至ル一線ヲ以テ其西界トス

第四條 各海港即チ水先區内ニ供備スヘキ免許水先人ノ員數ハ其海港即チ水先區ノ現

況ニ從フヘシ

第五條 水先人ノ免狀ヲ出願スル者ハ自己ノ技業及ヒ性質殊ニ平素ノ行狀ニ係リ確實

ナル履歷證書ヲ豫テ其本貫又ハ寄留地ノ地方官廳ヲ經テ農商務省ヘ差出シ置キ或ハ

試験開場ノ時ニ於テハ直チニ司驗官ヘ差出スヘシ

第六條 水先人タル者ハ年齢二十二歳ニ滿チ少クモ一少年間ハ一百噸以上ノ西洋形船

ニ於テ船長若クハ一等選轉手ノ職ヲ執リシ者若クハ六少年間航海ニ從事シ其中一ケ

年間ハ自今營業免許ヲ受ケントスル水先區内ニ於テ既ニ水先見習人ト爲リ航海ニ從事セルモノニ限ルヘシ但シ其水先區内ニ在ル諸港灣海峽及ヒ碇泊場ハ勿論危險ノ場所及ヒ之ヲ避ルタメノ重立タル記標或ハ方位又ハ潮ノ滿干潮流燈光浮標礁標ノ位置ニ悉皆通曉シ且大船ヲ指揮シテ之ヲ運轉スルニ充分適當セリト司驗官ヲ満足セシムルコトヲ要スヘシ

第七條 受驗人試験ヲ受ケ正シク須要ノ條件ニ叶ヒタルト司驗官之ヲ認ムル片ハ其旨

ヲ農商務省ニ報告シテ直チニ免狀ヲ交付スヘシ

但シ此免狀ハ翌年一月一日以後全ク其効力ヲ有セサルモノトス

第八條 免狀ノ書替ヲ請願セントスル者ハ毎年十一月一日以前其願書ヲ農商務省ヘ差

出スヘシ但シ之ヲ許可シ或ハ許可セサルトハ都テ農商務省ノ意見ニ因ルヘシ

第九條 免狀ヲ遺失スルモノ又ハ摩損スルモノハ其事由ヲ記シタル願書ヲ農商務省ヘ

差出シ書替新免狀ヲ申請クヘシ

第十條 水先人ハ始メテ其免狀ヲ願受ルキハ金拾圓又其書替毎ニ金一圓ノ手数料ヲ上

納スヘシ

第十一條 水先人ノ試験ヲ爲ス井ハ定日ヨリ少クモ十四日前其旨ヲ和洋兩種ノ新聞紙

ヲ以テ公告スヘシ此公告ニハ其免狀ヲ與フヘキ人數ノ限及ヒ試験ノ場所月日ヲモ記

載スヘシ

第十二條 試驗出願人ノ履歷證書ヲ以テ充分満足ノモノト爲ルルハ其出願ノ順次ヲ以テ其姓名ヲ登簿シ登簿ノ順次ニ從テ之カ試驗ヲ爲スヘシ

第十三條 此規則ニ從テ水先免狀ヲ受ケタル外國人ハ其執業上ニ限リ日本帝國内何レノ海岸ト雖モ上陸シ且其出發地ヘ陸路歸ルヲ得ルノ特許ヲ與フヘシ

第十四條 第三條ニ規定セル水先區内ニ於テ無免許ノ水先人船ヲ嚮導スルハ免許水先人ヨリ其船ヲ嚮導ヲ爲サント申入シ又ハ其爲メ信號ヲ爲スルハ何時ニテモ免許水先人ヘ其職ヲ讓ルヘシ其職ヲ讓ルヲ拒ミ仍ホ其船ヲ嚮導シ或ハ免許水先人ト詐稱シ正當ナラサル免狀ヲ用ユル者ハ五拾圓以內ノ罰金ヲ科スヘシ

第十五條 水先料ハ別表ニ記ス金高ニ超過スヘカラス但シ表中記載セサルモノハ其距離ノ遠近ニ隨テ船長ト水先人ノ間ニ相當ノ約束ヲ以テ定ムヘシ

第十六條 二人以上ノ免許水先人同時ニ於テ船ヲ嚮導ヲ申入シ又ハ其信號ヲ爲スルハ最初現ニ乗船シタル者其嚮導ヲ爲シ其水先料ヲ收領シ得ヘシ

第十七條 免許水先人水路嚮導専用ノ水先船ハ第十九條第一節第二節ニ示セル式ノ如ク之ヲ製シ其免狀ヲ農商務省ニ願出ツヘシ農商務省ハ檢査ノ上其免狀ヲ與フヘシ但シ此免狀ハ水先人免狀同様其効ニシテ年ニ限ル者トシ年々其書替ヲ願出ツヘシ

第十八條 各免許水先船ハ免許ヲ得タル區域内ニ於テ其水路嚮導用ノ爲メニハ港灣稅噸稅燈臺稅等ノ諸稅ヲ免スヘシ

第十九條 各水先船ハ左ノ徵候ヲ以テ區別スヘシ

第一 水先船ノ外部ハ総テ黒色タルヘシ

第二 船尾及ヒ大帆ノ上部ニ於テ國字及ヒ羅馬字ニテ免許水先船ノ文字並ニ其番號ヲ明瞭ニ書スヘシ

第三 免許水先船ニ免許水先人ノ乗込アルルハ桅上或ハ船首或ハ旗竿若クハ他ノ認メ易キ場所ニ於テ日田ヨリ日没マテ水先旗ヲ翻揚スヘシ但シ水先旗ハ明治十年一月甲第一號海軍省布達ニ照準スヘシ

第四 (明治十二年九月第三十九號布告改正) 水先船其營業場ニ於テ水路嚮導ニ從事スルルハ他船ニ用フル燈火ヲ掲ケス只橋頭ニ於テ周回諸方ヨリ見ユヘキ白燈一個ヲ掲ケ且十五分時ヲ超エサル間歇ヲ以テ閃光一個又ハ數個ヲ發スヘシ水先船其營業場ニ於テ水路嚮導ニ從事セサルルハ他船同様ノ燈火ヲ掲クヘシ

第二十條 日中ニ於テ左ニ記載スル信號ヲ表スルルハ水先ヲ要求スルノ信號ト認ムヘシ

第一 前橋ニ於テ其船ノ船首旗「英言」又ハ國旗ヲ掲揚スル事

第二 万国普通ノ水先信號ノ符「T」字ヲ掲示スル事

夜間ニ於左ノ信號ヲ同時若クハ別時ニ表示スルルキハ水先ヲ要求スルノ信號ト認ムヘシ

第一 十五分毎ニ青燈ヲ掲出スル事

第二 須臾ノ間歇ヲ以凡ソ一分時ノ間透明ナル白燈ヲ上甲板ノ舷部ニ於射發スル事  
第二十一條 各免許水先人ハ其免狀ハ勿論此規則ノ寫ヲ一通ツ、交付スヘシ故ニ其筋ノ官吏又ハ雇主ヨリ其書類ノ閱覽ヲ要スルルキハ直ニ之ヲ示スヘシ若シ之ヲ拒ムルハ農商務省ニ於テ其執業ヲ停止シ或ハ其免狀ヲ取上クヘシ

第二十二條 此免狀ハ他人ニ貸與シ或ハ讓與スヘカラス若シ貸與シ或讓與スルルキハ農商務省ニ於テ其免狀ヲ取上クヘシ

第二十三條 農商務省ニ於テ免許水先人其本分ノ職務ニ堪ヘサルカ若クハ亂醉又ハ不行跡アルカ或ハ故ナクシテ其職務ヲ執ルコト嫌ヒ若クハ之レヲ怠リタルコトアリト思惟スルルキハ同省ヨリ吏員ニ命ジテ之レヲ密問セシメ其情狀ニ隨ヒ其執業ヲ停止シ或ハ其免狀ヲ取上クヘシ

○第十四款 海上衝突豫防規則 明治十三年七月 第三十五號布告

總則

第一條 此規則中蒸氣船ト雖モ帆ニテ走リ蒸氣ヲ用ヒサル時ハ帆前船ト看做シ蒸氣ヲ

用ニルルハ帆ヲ用フルト用ヒサルトハ差別ナク總テ蒸氣船ト心得ヘシ  
燈火 燈火ハ船中必ス左ノ燈火ヲ掲クヘシ

第二條 各船日没後日出迄ノ間ハ天氣ニ拘ハラヌ第三條第四條第五條第六條第七條第八條第九條第十條第十一條ニ記載スル燈火ヲ掲クヘシ決シテ他ノ燈火ヲ用フヘカラス

第三條 蒸氣船ハ航海中必ス左ノ燈火ヲ掲クヘシ

(甲) 前檣又ハ其前面ニ於テ船体上ニ二丈ヨリ低カラサル所ニ亮明ナル白燈一箇ヲ掲クヘシ若シ船幅二丈ヲ超ユルルキハ船体上其船幅ヨリ低カラサル所ニ之ヲ掲クヘシ○此燈火ハ常ニ不同ナク亮明ノ光ヲ發シテ鐵盤ノ二十方位ヲ照スヘク製造シ之ヲ左右舷外ヘ十方位ツ、即チ船ノ正首ヨリ各舷正横後ニ二方位マテ光線ノ及フヘキ様ニ裝置シ且晴天ノ暗夜ニ少クモ五里(海里)ニテ算ス以下之ニ倣ヘ)ノ距離ヨリ見ユヘキモノヲ用フヘシ

(乙) 右舷ニ綠燈ヲ掲クヘシ○此燈火ハ常ニ不同ナク亮明ノ光ヲ發シテ鐵盤ノ十方位ヲ照スヘク製造シ之ヲ船ノ正首ヨリ右舷正横後ノ二方位マテ光線ノ及フヘキ様ニ裝置シ且晴天ノ暗夜ニ少クモ二里ノ距離ヨリ見ユヘキモノヲ用フヘシ

(丙) 左舷ニ紅燈ヲ掲クヘシ○此燈火ハ常ニ不同ナク亮明ノ光ヲ發シテ鐵盤ノ十方位ヲ照スヘク製造シ之ヲ船ノ正首ヨリ左舷正横後ノ二方位マテ光線ノ及フヘキ様ニ裝

置シ且ツ晴天ノ暗夜ニ少クモ二里ノ距離ヨリ見ユヘキモノヲ用フヘシ

(丁)右舷紅ノ舷燈ニハ燈火ヨリ前ニ少クモ三尺出テタル屏風標ノ隔板ヲ其燈火ノ内側ニ當テ、裝置シ右舷燈ハ左舷ニ在ル舩ヨリ見ヘス左舷燈ハ右舷ニ在ル舩ヨリ見ヘサル様ニナスヘシ

第四條 蒸氣舩他舩ヲ引テ航行スル時ハ兩舷燈ノ外ニ亮明ノ白燈二個ヲ三尺ヨリ少カラサル間ヲ隔テ、縱ニ連掲シ獨走ノ蒸氣舩ト區別スヘシ此燈火ハ獨走ノ蒸氣舩ニ掲クル白燈ト同製ナルヲ用ヒテ同所ニ掲クヘシ

第五條 帆前舩ト蒸氣舩トノ差別ナク海底電信線ノ布置又ハ引揚ニ從事スル時及ヒ事變ノ爲メニ運用自由ヲ得サル片ハ夜間ハ直徑八寸三分ヨリ少カラサル球形ノ紅燈三個ヲ帆前舩ナレハ蒸氣舩ニ掲クル白燈ノ位置ニ蒸氣舩ナレハ其白燈ノ代リニ三尺ヨリ少カラサル間ヲ隔テ縱ニ連掲スヘシ又晝間ハ直徑二尺ノ黒球三個ヲ前橋ノ前面ニ於テ其頭部ヨリ低カラサル所ニ三尺ヨリ少カラサル間ヲ隔テ縱ニ連掲スヘシ

右黒球及ヒ燈火ハ近寄ル他舩ニ於テ運用自由ヲ得スレテ航路ヲ避クル能ハサル舩ノ信號ト看認ムヘシ

右ノ舩全ク運行セサル時ハ舷燈ヲ掲クヘカラスト雖モ運行スレハ必ス之ヲ掲クヘシ第六條 帆前舩ハ自ラ走ル下他舩ニ引カル、トノ差別ナク白燈ヲ除クノ外第三條ニ記

載スル蒸氣舩ノ燈火ヲ掲クヘシ決シテ白燈ヲ掲クヘカラス

第七條 小形舩ニ於テ天氣ノ模様ニ依リ綠紅ノ二燈ヲ掲ク置キ難キ片ハ綠燈ハ右舷ニ紅燈ハ左舷ニ於テ何時ニテモ標スヘキ様甲板上ニ用意シ置キ他舩ノ我舩ニ近寄り來ルカ又ハ我舩ノ他舩ニ近寄り行ク片ハ衝突ヲ防クニ充分ナル時間ヲ見定メテ各舷燈ヲ他舩ヨリ最モ見ヘ易キ様各舷ニ標スヘシ但此時綠燈ハ左舷ヨリ見ヘス紅燈ハ右舷ヨリ見ヘサル様注意スヘシ

此綠紅ノ燈ヲ置違ヒナク容易ニ取扱フ爲メ綠燈ノ燈籠ハ綠色紅燈ノ燈籠ハ紅色ニテ外面ヲ塗リ且成規ノ隔板ヲ之ニ備ヘ置クヘシ

第八條 帆前舩ト蒸氣舩トノ差別ナク碇泊中ハ最モ見ヘ易ク舩体上ヨリ二丈ヲ超ヘサル所ニ白燈一個ヲ掲クヘシ○此燈火ハ直徑六寸六分ヨリ少カラサル球形ノ燈籠ニテ常ニ不同ナク最モ亮明ノ光ヲ發シ少クモ周回一里ノ距離ヨリ見ユル様ニ爲スヘシ第九條 水先舩其營業場ニ於テ水路嚮導ニ從事スル時ハ他舩ニ用ユル燈火ヲ掲ケス唯

橋頭ニ於テ周回諸方ヨリ見ユヘキ白燈一個ヲ掲ケ且十五分時ヲ超ヘサル間歇ヲ以テ閃光一個又ハ數個ヲ發スヘシ

水先舩其營業場ニ於テ水路嚮導ニ從事セサル時ハ他舩ト同様ノ燈火ヲ掲クヘシ第十條 甲板ナキ漁舩及ヒ甲板ナキ小舩航行中ハ必スシモ他舩ニ用ユル舷燈ヲ掲クル

コ及ハス然レハ舷燈ノ代ニ一面ハ綠色ノ硝子板一面ハ紅色ノ硝子板ヲ備ヘタル燈籠一個ヲ手近ニ備置キ他船ノ我船ニ近寄り來ルカ又ハ我船ノ他船ニ近寄り行ク片ハ衝突ヲ防クニ充分ナル時間ヲ見定メテ其燈籠ヲ標スヘシ但シ此時ニ綠光ハ左舷ヨリ見ヘス紅光ハ右舷ヨリ見ヘサル様注意スヘシ

右漁船及ヒ小艇碇泊シタルカ或ハ網ヲ卸シタル片ハ亮明ナル白燈一個ヲ標スヘシ且ツ便宜ニ從ヒ度々閃光ヲ發スルモ苦シカラス

第十一條 他船ニ追越サレトスル船ハ他船ニ向テ船尾ヨリ白燈ヲ標シ又ハ閃光ヲ發スヘシ

霧中信號

第十二條 蒸氣船ハ汽笛ヲ音響ノ妨碍物ナキ所ニ裝置シ且ツ霧中號角及ヒ號鐘ヲ備フヘク帆前船ハ同標ノ號角及ヒ號鐘ヲ備フヘシ但此汽笛號角及ヒ號鐘ハ善ク其用ニ適セサルヘカラス

霧中又ハ降雪中ハ晝夜ノ差別ナク本條ニ記載セル信號ヲ左ノ如ク用フヘシ

(甲) 蒸氣船航行中ハ汽笛ヲ以テ二分時ヨリ多カラサル間歇ヲ以テ長聲ヲ一發スヘシ

(乙) 帆前船航行中ハ號角ヲ以テ二分時ヨリ多カラサル間歇ヲ以テ右舷開ナレハ一聲ヲ發シ左舷開ナレハ二聲ヲ連發シ船ノ正横後ニ風ヲ受タル片ハ三聲ヲ連發スヘシ

(丙) 帆前船ト蒸氣船トノ差別ナク航行中ニ非サレハ二分時ヨリ多カラサル間歇ヲ以テ號鐘ヲ鳴スヘシ

霧中速力

第十三條 帆前船ト蒸氣船トノ差別ナク霧中及ヒ降雪中ハ程好キ速力ヲ以テ走ルヘシ

航法

第十四條 二艘ノ帆前船互ニ近寄りテ衝突ノ懼アル片ハ一方ノ船ヨリ左ノ如ク他船ノ航路ヲ避クヘシ

(甲) 一杯ニ開カサル船ハ一杯ニ開キタル船ノ航路ヲ避クヘシ

(乙) 左舷ニ一杯ニ開キタル船ハ右舷ニ一杯ニ開キタル船ノ航路ヲ避クヘシ

(丙) 一杯ニ開カサル二艘ノ船風ヲ受クル舷方同シカラサル片ハ左舷ニ風ヲ受ケタル船ヨリ他船ノ航路ヲ避クヘシ

(丁) 一杯ニ開カサル二艘ノ船風ヲ受クル舷方同シキ片ハ風上ノ船ヨリ風下ノ船ノ航路ヲ避クヘシ

(戊) 船尾ヨリ風ヲ受ケタル船ハ他船ノ航路ヲ避クヘシ

第十五條 二艘ノ蒸氣船正シク真向又ハ殆ント真向ニ行逢フテ衝突ノ懼アル片ハ兩船共鐵路ヲ右舷ニ轉シ互ニ他船ノ左舷ノ方ヲ行過スヘシ

本條ハ兩船正シク真向又ハ殆ト真向ニ行逢フテ衝突ノ懼アル片ニ限り應用スヘク  
 各其鐵路ヲ保テテ必ス替リ行フ時ニ應用スヘカラス  
 本條ヲ應用スヘキ至當ノ場合ハ兩船共ニ正シク真向又ハ殆ト真向ニ行逢ヒタル時  
 即チ晝間ハ我船ノ檣ト他船ノ檣ト一直線又ハ殆ト一直線ニ見ユル時夜間ハ互ニ他  
 船ノ兩舷燈ヲ一時ニ見ル時ニ限ルヘシ  
 本條ハ晝間他船ノ我鐵路ヲ横切リテ我船ノ前面ニ見ユル時又ハ夜間我船ノ紅燈他  
 船ノ紅燈ニ對シ或ハ我船ノ綠燈他船ノ綠燈ニ對スル時又ハ我船ノ前面ニ綠燈ナク  
 シテ紅燈ヲ見或ハ紅燈ナクシテ綠燈ヲ見ル時又ハ綠紅ノ兩燈ヲ我船ノ前面ヨリ他  
 船ノ位置ニ見ル時ハ應用スヘカラス  
 第十六條 三艘ノ蒸氣船互ニ航路ヲ横切リ衝突ノ懼アル片ニ我右舷ニ他船ヲ見ル船ヨ  
 リ他船ノ航路ヲ避クヘシ  
 第十七條 帆前船ト蒸氣船ト互ニ近寄り衝突ノ懼アル片ハ蒸氣船ヨリ帆前船ノ航路ヲ  
 避クヘシ  
 第十八條 總テ蒸氣船他船ニ近寄り衝突ノ懼アル片ハ速力ヲ緩ニシ又ハ時宜ニ依リ停  
 止シ且後退スヘシ  
 第十九條 蒸氣船此規則ニ遵テ鐵路ヲ取ル片ハ左ノ旗笛信號ヲ以テ他船ニ其鐵路ヲ通

知スルヲ得ヘシ

短聲一發

我船ノ鐵路ヲ右舷ニ取ル

短聲二發

我船ノ鐵路ヲ左舷ニ取ル

短聲三發

我船一杯ノ速力ヲ退却ス

此信號ヲ用フルト否ラサルトハ隨意タルヘシ但シ此信號ヲ用ヒタル時之ヲ用ヒタ  
 ル船ハ必ス其信號通りニ其鐵路ヲ取ラサルヘカラス

第二十條 帆前船ト蒸氣船トノ差別ナク他船ヲ追越サントスル片ハ以上ノ規則ニ拘ハ  
 ラス總テ他船ノ航路ヲ避クヘシ

第二十一條 總テ蒸氣船險ノ水路ヲ通航スルニ當リ無難ニ通行シ得ル片ハ其航路ノ  
 中流ヨリ其船ノ右舷ニ當ル方ヲ航行スヘシ

第二十二條 以上ノ規則ニ依リテ兩船ノ内一船ヨリ他船ノ航路ヲ避クル片ハ他船ニ於  
 テ其鐵路ヲ保守スヘシ

第二十三條 此規則ヲ遵守スルニ就テハ航海上百般ノ危險ニ心ヲ配リ且危險切迫シテ  
 此規則ヲ遵守スル暇ナキ特別ノ場合ニ於テハ臨機ノ處置ヲ以テ之ヲ避クルニ注意ス  
 ヘシ

懈怠ノ責

第二十四條 此規則ニ於テ點燈又ハ信號又ハ見張ヲ怠リ又ハ海員ノ常務又ハ臨機處置ニ於テ必要ナル用心ノ怠リヨリ生シタル事件ニ於テハ船主船長乘組人員各其責ヲ免ル可カラサルモノトス

別則

第二十五條 此規則ハ各地官府ニ於テ特ニ制定シタル港、川其他内海ノ航行規則ノ施行ニ干渉セサルモノトス

第二十六條 此規則ハ二艘以上ノ軍艦又ハ軍艦ニ護送セラル、船ニ増揚スル列位燈火及ヒ信號燈火ニ付各國政府ニ於テ特ニ制定シタル規則ニ干渉セサルモノトス

△明治十四年五月第三十三號布告左ノ通追加

罰則

第二十七條 凡船舶合格ノ燈籠及ヒ信號器ヲ所持セス若クハ點燈及ヒ信號ヲ怠リ又ハ裝置ヲ過リタル者ハ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ニ處ス

但甲板ナキ漁船及ヒ甲板ナキ小船ハ此限ニアラス

○第十五款 船燈製造罰則 明治十四年五月第三十四號布告

明治十三年(七月)第三十五號布告海上衝突豫防規則ニ記載シタル檣燈及ヒ舷燈ハ農商

務省ノ許可ヲ受ケタル者ニアラザレハ之ヲ製造スルヲ得ス犯ス者ハ貳圓以上拾圓以下ノ罰金ニ處ス

○第十六款 外國船乘込規則 明治九年三月第三十號布告

第一條 外國船ニ乘込旅行セントスル者ハ出船當日或ハ一日前其屬籍住所姓名及ヒ何國人所持船何號ニ乘込何港迄赴ク旨ヲ具シタル届書ヲ其出船スル地ノ廳ニ差出シ乘船證書ヲ受クヘシ

第二條 乘船證書ハ一人一枚タルヘシ

第三條 乘船證書ヲ受取ルニハ一枚ニ付手数料トシテ金貳拾五錢ヲ納ムヘシ(九年第一號布告ヲ以テ金貳拾五錢ヲ改正)

第四條 乘船證書ハ每人親ヲ出廳シテ受取ヘシ代人ヲ以テスルヲ許サス

第五條 乘船證書ハ着港上陸ノ上其地警察官吏ニ返付スヘシ其途中一時上陸(例ヘハ横濱港ヨリ長崎港ニ到ルモノ其船舶神戸港ニ卸碇シタル時用便ノ爲メ暫時上陸スルノ類)スル時ハ其地臨檢警察官吏ニ其證書ノ檢閲ヲ受クヘシ

第六條 乘船證書ハ一度ノ出船ニ用フルモノトス故ニ途中ヨリ上陸スル歟又ハ事故アリテ乘込ヲ止メ更ニ他ノ船ニ乘込ガ又ハ同船タリトモ他日航海ノ便ニ乘込ム時ハ最

第一類 行政法 外國船乘込規則



初受取タル證書ハ其出船スル地ノ應ニ納メテ更ニ證書ヲ受取ルヘシ  
 第七條 乘船證書ヲ所持セシメテ乘船シタル者ハ上陸ノ節違式ニ照ラシテ處分スヘシ  
 第八條 開港場アル地方應ニ於テハ外國船ニ乗込ントスルノ届書ヲ差出ス者アル時ハ  
 第一條第四條ノ手續ニ相違ナキヤテ檢閲シ別紙雛形ノ證書ヲ直ニ本人ニ相渡シ手數  
 料ヲ領収スヘシ

第九條 右地方應ハ兼テ船場ノ要所ニ於テ警察官吏ノ出張所ヲ設ケ置キ外國船出入港  
 毎ニ若干員ヲ臨檢セシメ内國人ノ乘船又ハ上陸スル者ノ證書ヲ一々檢閲シ若シ證書  
 所持セサル歟又ハ其證書最前ノ出船ニ請取リタルヲ其儘再用シタル歟ヲ視認メタル  
 時ハ詳カニ其所由ヲ取糾シ證書所持セサルモノハ乘船證書ヲ受取ル手續ヲナサレメ  
 或ハ其乗込ミヲ止ム證書ヲ再用スルモノハ違式ニ照シテ處分スヘシ

第十條 警察官吏乘船證書ヲ臨檢シ着港上陸者ノ分ハ之ヲ領收シ一時途中上陸者ノ分  
 ハ之ヲ本人ニ還付スヘシ(證書雛形見ス)

○第十七款 內國松破及漂流物取扱規則 明治八年四月 第六十六號布告

第一條 諸通船海上又ハ川筋ニ於テ難破沈没其他ノ災厄ニ逢ヒ候節救助心得方及ヒ之  
 ニ屬スル諸費用ノ立方ハ總テ左ノ箇條ニ從テ取扱フヘシ

第二條 各地浦方ニ於テ難破救助ノ爲メ其管應ヨリ區戸長其他用掛リ等ノ内ヲ以テ適  
 宜ニ浦役人ヲ申付置クヘシ

第三條 諸通船難風ノ爲メニ困難シ又ハ其他災厄ニ罹リ候節ハ最寄ノ者見付次第直ニ  
 浦役人ニ報知シ且ツ浦役人ヨリ指圖無之ニ速ニ助船ヲ出シ救助方精々盡力致スヘシ  
 但シ救助ノ者困難船ニ漕寄セ候節船長其他重立タル者ヨリ頼談無之内ハ狼リニ船  
 中ノ物品ヲ積ミ移スヘカラス

第四條 浦役人ハ難船ヲ見附或ハ其報知ヲ得ル片ハ速カニ其乗組人及ヒ船體積荷ヲ救  
 助保安スルノ手立ヲ盡スヘシ若シ多人數ヲ要スル程ノ大難船ト見受ケ候節ハ板木半  
 鐘等打鳴ラシ人数ヲ呼聚メ且ツ近隣ノ船持ニ申付助船ヲ出サシムヘシ

第五條 小人数ニテ救助シ得ヘキ片ハ勿論前條ノ如ク多人數ヲ要スル程ノ大難船ノ節  
 モ浦役人ニ於テ諸事取締ヲ付テ成式ケ失費掛カラサル様篤ク注意致シ救助方行届候  
 ハ、早速人数ヲ退散セシムヘシ  
 第六條 保安シタル船具積荷其他ノ物品ハ最モ安全ニシテ且ツ便利ノ場所ニ之ヲ置  
 クヘシ尤モ小屋掛ヲ要シ番人ヲ差置クヘキ程ノ場合ニ於テハ夫々其手數ヲ爲シ諸事  
 懇切ノ取り扱ヒヲ致スヘシ  
 第七條 難船ニ逢ヒタル船長又ハ乗組ノ者ハ上陸次第直チニ電信郵便其他ノ急報ヲ以

テ之ヲ船主又ハ荷主ニ報知スヘシ

第八條 難船物ヲ保安スル者ヘハ左ノ割合ヲ以テ保安料ヲ遣ハスヘシ

第一 海面ニ漂流スル物品ハ其二十分一

第二 海中ニ沈没スル物品ハ其十分一

第三 川面ニ漂流スル物品ハ其三十分一

第四 川底ニ沈没スル物品ハ其十五分一

但シ其所持主ノ都合ニ因リ代價又ハ現物ニテモ妨ケナシ

第九條 浦役人ハ救助ノ爲メ集マリタル人数及ヒ救助ノ爲メニ出シタル小舟現ニ難船品ヲ保安シ及ヒ之レニ就テ尽力シタル証跡顯然タラサルニ於テハ保安料及ヒ其他ノ賃錢等ヲ割渡スヘカラス

第十條 保安シタル物品又ハ船滓等ノ餘殘物又ハ沙入り水滯レ等ノ爲メニ腐敗スヘキ恐シアルモノハ二名以上ノ浦役人及ヒ船長其他重立乗組ノ者二名以上合議ノ上其所ニ於テ之レヲ入札拂ヒニ爲メスヲ得ヘシ

但シ本條ノ場合ニ於テハ浦役人ニテ成ルヘク丈ケ最寄ヘ廣告シ公ケノ場所ニ於テ入札入其他衆人ノ眼前ニテ之レヲ爲シ且ツ其物品ノ目錄及ヒ買入ノ證書並ニ其附直段ノ第三番迄ヲ取置クヘシ

第十一條 保安物ヲ賣拂ヒタル片ハ其代價金高ノ内ヲ以テ左ニ掲載シタル諸費用ヲ其船主荷主ヨリ出サシムヘシ

第一 保安料

第二 救助ノ節働人足賃及ヒ小舟賃

第三 保安物ノ爲メニ取設タル小屋掛ケ入費及ヒ番人ノ賃錢

第四 乗組人ノ者怪我人有之節其療養入費

第五 同前ノ者溺死スル片其搜索入費

第六 同前ノ者溺死ノ節埋葬入費

若シ物品賣拂金高諸費ノ高ヨリ少キ片ハ其金高限リ出サシメ不足ノ分及ヒ賣拂フヘキモノモ之レナキ片ハ第十五條ニ照準シテ處置スヘシ

第十二條 左ニ掲載シタル諸入費ハ之レヲ三分シ其二分ハ船主荷主ヨリ出サシメ其一分ハ之ヲ其管内民費ト爲ヘシ

第一 難船取扱中浦役人ノ日給

第二 浦方ニ於テ難破ノ爲メニ費シタル薪炭蠟燭及ヒ筆紙墨代

第三 浦方ニシテ官廳其外等ヘ發シタル電信郵便及ヒ飛脚賃

第四 救助入溺死シタル片其搜索入費

第一類 行政法 内國船難破及漂流物取扱規則

第五 同前ノ者死傷スル片治療埋葬入費

第十三條 難破ノ節浦方ヨリ乗組人ニ給セシ衣服食物其他ノ必需品代料又ハ飯郷旅費等ヲ貸過ハシタル片ハ證書取置キ第十九條ノ通り精算書中ニ記載シ追テ本人ヨリ償却セシムヘシ

第十四條 大難船ノ節諸費用割賦ノ儀ハ 船体皆破沈没乗組人ノ死去及積荷ノ大損害現場ノ救助方ヲ除クノ外各般ノ處置ハ其管應ニ申立テ其筋出張官員ノ差圖ヲ受クヘシ尤モ小難船ノ處置ハ貳名以上ノ浦役人及ヒ船長其他重立乗組ノ者二名以上合議ノ上之ヲ決スルヲ得ヘシ

第十五條 船体積荷ヲ併セテ悉皆沈没ニ至ルノ大難船ハ浦方ニ於テ其救助ノ爲ニ許多ノ雜費相掛リ候トモ船主荷主ヨリ之ヲ取立ルヲ得ス故ニ其差出スヘキ費用ノ分ハ官費ヲ以テ支給スヘキニ付費用明細帳ヲ作り浦役人船長連署押印シ管應ヘ差出スヘシ  
第十六條 危難ヲ冒シテ乗組人ノ必死ヲ救フ者又ハ救助ノ爲メ盡力シテ死傷ニ至ル者アルトキハ必ス管應ヘ届出ツヘシ其事實ノ輕重ニヨリ相當ノ賞與或ハ手當金ヲ給スヘシ

第十七條 總テ浦役人及船長合議ノ上處置シタル片ハ其事柄ヲ詳細ニ記シタル證書ニ通テ作り之レニ連署押印シ其二通ヲ船長ヘ渡シ他ノ一通ヲ浦役人ニテ保テ置クヘシ

第十八條 二名以上ノ浦役人合議ノ片ハ其内一名ハ必ラス他村ヨリ出スヘシ

第十九條 難船救助ニ屬スル諸費用ハ二名ノ浦役人及ヒ船長其他重立乗組ノ者二名以上立會ノ上第十一條第十二條第十三條第十五條ニ照ラシ夫々其費用ノ種類ヲ區別シ成ル可ク速ニ精算書ヲ作り之ニ難破明細書ヲ添ヘテ管應ニ差出シ其檢査ヲ受クヘシ但シ精算取調ノ節ハ成丈ケ船主又ハ荷主ノ立會ヲ要スヘシ

第二十條 前條ノ精算書ハ管應ニ於テ速カニ調査ヲ遂ケ不審ノ處無之片ハ早速下ケ渡スヘシ然ル上浦役人ハ第十五條ニ記スル場合ヲ除クノ外船主荷主或ハ船長ヨリ夫々出金致サスヘシ若シ其即時辨金相成難キ分ハ相當ノ日數ヲ猶豫スヘシ

第二十一條 洋中ニ於テ難破或ハ打荷等有之趣ヲ以テ浦證文ヲ願出ル片ハ二名以上ノ浦役人立會ノ上船長及ヒ乗組ノ者三名以上ヲ別々ニ取調ヘ其實跡アルカ又ハ航海日記アルモノハ之レニ照シ各々符合スル片ハ浦證文ヲ作り連署調印シテ之ヲ船長ニ付與シ寫ヲ以テ管應ヘ届出ヘシ但シ浦證文中左ノ箇條ヲ載スヘシ

- 第一 難破ニ逢ヒタル場所其時日及ヒ風波ノ模様
- 第二 破損ノ箇所

第三 打荷種類ノ箇數並他ノ積荷ノ種類  
 第四 船號及ヒ免狀ノ番號並船主船長ノ本貫苗字名乘組人數  
 第五 荷打シタル荷物主ノ苗字名本貫  
 第六 仕出シ地及ヒ仕向ケ地ノ港名  
 第七 乘組ノ内死傷有之キハ其本貫苗字名年齢  
 第二十二條 軍艦其他ノ官有船困難候節ハ早速助船ヲ出シ精々盡力シテ救助スヘシ且  
 ツ其難破ノ大小ニ拘ハラズ其旨ヲ直チニ管廳ヘ告知スヘシ  
 第二十三條 前條ノ救助ニ屬スル諸費用ハ船將又ハ其筋ノ士官ヨリ直チニ受取ルヘシ  
 但シ總テ管廳ノ指揮ヲ受クヘシ  
 第二十四條 貢米及ヒ其他ノ官物ヲ積入候船難破ニ及ヒ候節現場救助ヲ除クノ外總テ  
 ノ處置ハ管廳ヘ申立ノ上其指揮ヲ受クヘシ  
 第二十五條 難船取扱ノ間浦役人ノ日給ハ一日五十錢ヨリ多カラス十錢ヨリ少ナカラ  
 サルモノトス  
 難破ノ節働人足賃及ヒ小舟賃ハ土地ノ異同ト勞役ノ難易ニ依リテ同レカラスト雖モ

各管廳ニ於テ適宜見積リ豫カンシ其額ヲ定メ置クヘシ  
 第二十六條 船長及ヒ擔任ノ者怠慢ニヨリ難破沈没其他ノ損害ヲ生スルハ右損失ヲ  
 其者ヨリ償却セシムヘシ若シ其災厄人智ノ前知スヘカラス人カノ豫防スヘカラサル  
 ニ出ルコトヲ瞭然證明スルトキハ此限ニ在ラス  
 第二十七條 浦役人船長其他救助ノ者ト申合セ其保安シタル難船物ヲ沈没ト偽リ竊ニ  
 賣買スル者ハ律ニ照シテ處分ス可シ  
 第二十八條 凡テ難船ノ節救助ニ託シテ積荷船具其他ノ物品ヲ竊盜或ハ掠奪スル者又  
 ハ其竊盜掠奪ニ與スル者又ハ其本犯ヲ隱匿スル者又ハ竊盜物ト知テ之ヲ賣買スル者  
 ハ律ニ照シテ處分スヘシ  
 以上漂着ノ部  
 第二十九條 凡テ原因ノ知レサル難船漂着物及ヒ乘組人ナキ漂着船ヲ見附タル者ハ之  
 ヲ浦役人ニ報知スヘシ浦役人ハ其調書ヲ作り之ヲ其管廳ヘ届出ヘシ  
 第三十條 乘組人ナキ船ハ其漂着ノ月日船ノ大小破損ノ模様等ヲ精細ニ書記シ漂着物  
 ハ其品名箇數等精細ニ書記ルシ其漂着近傍人民輻輳ノ地ノ揭示場及ヒ船改所ヘ六十  
 日間張出スヘシ尤モ漂着物ノ代價貳拾圓以上ト思量シ或ハ貳拾圓以下タリモ必要ノ  
 品柄ト思量スルハ其管廳ヨリ三府五港ノ管廳及ヒ税關ヘ報告シテ張出ヲ爲シ或ハ  
 新聞紙ニ載セテ公告スヘシ

第三十一條 漂着物ノ持主知レタルトキハ左ノ區別ニ循ヒ處置ス可シ

第一 一ケ年以内ハ其見積代價ノ三分一ヲ取揚主ニ與ヘ其現品ハ持主ニ返還スル事

但シ持主ノ情願ニヨリ現品賣拂ヒ其代金ニテ受取ルコトヲ得ヘシ

第二 一ケ年ヲ過クシテハ之ヲ公賣シ其代價ヲ平分シ一半ハ其取揚主ニ與ヘ一半ハ官ニ收ムル事

但シ三ケ年以内ニ其持主知レタルトキハ官ニ收メシ部分ハ下戻スヘシ

第三十二條 乘組人無之漂着物ノ持主知レタルトキハ左ノ區別ニ循ヒ處置スヘシ

第一 一ケ年以内ハ其見積代價ノ十分ノ一ヲ見附主ニ與ヘ其物ハ持主ニ返還スル事

但書ハ前條第一項ニ同シ

第二 一ケ年ヲ過クシテハ之ヲ公賣シ其代價ノ三分ノ一ヲ見附主ニ與ヘ其餘ノ二分ハ官ニ收ムル事

但書ハ前條第二項ニ同シ

第三十三條 前二條ニ記スル場合ニ於テハ律例得遺失物ノ條ト抵觸スルコトナカル可シ

第三十四條 凡ソ漂着物ヲ保存シ及ヒ之ヲ公告スル等ノ事ニ付費用アルモノハ第十一

條ニ照シ浦役人ノ與印シタル證書ヲ以テ代價ノ全部中ヨリ之ヲ償却スヘシ

第三十五條 洋中ニ於テ難破ノ物トシテ梳櫛其他ノ器具ニ取附キ海岸ニ漂着致シ候者有之

節ハ浦役人ヨリ一通リ取調ヘ相當ノ保護ヲ加ヘ置キ直チニ管廳ニ届出其指揮ヲ受ク

可シ尤モ本人販郷ノ旅費其他ノ手當等貸遣ハン候節ハ第十三條ノ通り追テ本人ヨリ

償却セシムヘシ

第三十六條 凡ソ漂着物ヲ見附タル者之ヲ浦役人ニ報知スルコトナク其物品ヲ私カニ使

用シ又ハ之ヲ賣買スル者ハ第二十八條ニ照ラシテ處分スヘシ

第三十七條 (明治十年三月第二十九號布告改正) 暴風雨等ニテ流失ノ材木ヲ取揚クル

トキハ此規則第二十九條以下ニ照準シ其代價十分ノ一ニ過キサル取揚料ヲ遣ハスヘシ

△(明治十一年十月第三十二號布告第三十八條追加)

第三十八條 前條ノ場合ニ於テ取揚タル材木巨大ニシテ領置ニ不便ナルモノハ官之ヲ

公賣シ其代價ヲ以テ現物ト看做シ材主ノ有無ニ從ヒ處分スヘシ

○第十八款 不開港場規則 明治三年二月

難船救助心得 廿九日布告

不開港場規則難船救助心得方等ノ條目別紙彫刻ノ通り被仰出候間此旨相違候事

別紙

第一類 行政法 不開港場規則難船救助心得

外國貿易之儀ハ神奈川港ヲ初メ大阪兵庫崎新瀧箱館六ヶ所御取開相成候上ハ諸商賣トモ右場所ニ於テ取引可致處不開港場ニ於テ密商イタシ候哉ノ趣相聞ヘ以之外ノ事ニ候右ニ付テハ先達テ御布令之趣モ有之御條約面ニモ明細ニ掲載致シ有之儀ニ付キ向々ニ於テ厚ク可相心得筋コハ候得共津々浦々邊鄙ノ場所ニ至候而者取計方不相辨モノモ可有之或ハ難松救助ノ筋ト入混シ難松人ヘ對シ不親切ノ取扱ヒイタシ候テハ御交際上ニ差響キ候儀ニ付キ夫是以テ今般猶又廉々別紙ノ通心得方被仰出候依テハ府藩縣ニ於テ取締不行屆其土民共外國人ヲ引入レ内密ニ賣買致シ候節ハ假令其事不仕遂候共當人並ニ其支配タル者マテ急度御答可被仰付候尤モ吟味ノ上其土地管領ノモノ同意致シ居候歟又ハ心得ナカラ見通シ候儀相知レ候節ハ猶更嚴重御處分可有之候ニ付向々ニ於テ取締ノ儀猶ホ一層行屆候様可致候事

一外國人之儀ハ自己相對ヲ以テ雇入候儀不相成趣者兼テ御布令ノ通ニ候得共諸學科又ハ國地開發或ハ西洋形ノ松々運用筋ニ付相雇度モノハ其次第ニ依リ御聞届可相成候間給料年限等取極其筋々ヨリ書面ヲ以テ東京外務省ヘ可別出其上御印章御渡可相成候尤モ御印章所持シ外國人ハ何レノ向ニテモ御國人同様相心得無隔意接待致シ無差支通行セムヘク候尤モ諸場所ニテ右御印章相改メ可申方ニ御印章所持不致外國人有之節ハ御許容不相顧私ニ雇入候筋ニ付内地通行不相成儀ハ勿論縮ニ隱シ置キ相顯

ルニ於テハ急度御沙汰之品モ可有之間心得違無之様可致事

午正月

太政官

追テ別紙條目ノ儀ハ外務省ニ摺モノ有之候間不足ノ向ハ何部ニ而モ同省ヘ申立可受取候事

條目

不開港場取締心得方規則

一何レノ邊邊又者港浦オイト西洋形之松入津候ハ、時刻ヲ移サズ直線湊役人役人同居村長ノ内ニ其松へ乘組入津之趣意可相尋事  
 一尋問之上薪水食料ニ盡キ其品々ヲ求メ候メ入津之儀ニ候ハ、其土地ヨリ横濱兵庫長崎新瀧箱館迄之里數ヲ勘辨イタシ格別遠路ニモ無之候ハ、右品々ヲリトモ前文開港場之内ヘ參リ可受取旨申サトシ渡方ヲ斷リ可申或ハ右開港場ヘ七八十里又ハ百里モ遠キ場所ニ候ハ、無餘儀事ニ付其土地支配ニテ承届候上右里數ヲ計リ松中人數相當之分丈渡遣シ代金可受取事  
 一但シ金高品數ハ勿論松之碇泊日數制限等委細相ヒ認メ届出可申事

第一類 行政法 不開港場規則難松救助心得

一其船之國名船主之名書付ニテ承リ糺スヘキ事  
 但船名者多ク船之艦ニ横文字ノ摺書ニテ認メ有之モノニ付右字樣寫取置ヘキ事  
 一船ニ引上ケ有之國旗並ニ船主之旗等總而目印ニ可相成モノハ其雛形寫取可差出事  
 一闕乏之品相渡候上出帆通々致シ候様子ニ候ハ、早々出帆候樣催促可致事  
 一御免許之上海岸測量之タメ船ヲヨセ候節ハ相當ニ世話イタシ岩石隠レ洲有之場所等  
 差示可遣尤モ御免許之船ハ其印狀必ス所持イタシ居候事  
 一軍艦ニ候ヤ商船ニ候ヤ蒸氣船風帆船共總而船形大小トモ取糺相届可申事  
 一軍艦ニ候ハ、大砲之備有之商船トハ船形相違ニ付假令見ナレサルモノニ而モ相知レ  
 可申軍艦ハ別而何事モ禮儀ヲ正シ不敬之取扱イタサ、ル樣可心掛候事  
 一薪水食料等船中必用之品ノ外餘分ハ勿論其外土地產物類相求度旨申立候ハ一切賣渡  
 シ候事不相成萬一利益ニ迷ビ賣渡候者有之後日相顯ハル、ニ於テハ吟味ノ上屹度御  
 咎可有之事  
 一船中ニ積載有之品々彼方ヨリ賣渡度段申立候トモ買求候儀是又一切不相成萬一竊ニ  
 取引イタシ候節ハ前同條御咎可有之事  
 一濱邊ニ近キ村里之モノ共其濱邊之モノ共内々外國人ト荷物之取引致シ候様子ニ候ハ  
 、其支配ガ又者開港場ヘ可申立時宜ニ御賞可有之事

一難船ニ無之食料欠乏等ニ托シ密商仕向候節ハ定テ其土地ニモ右ヲ呼迎候者可有之速  
 ニ探索ノ上彌密商致候ニ相違無之候ハ、双方共サシ押ヘ外國人者引留置御國人ハ入  
 半手鎖等其土地相當ノ仕置ニ致シ早々申立差圖可受尤モ横文字之書付類後日之證據  
 ニ可相成品ハ始末致シ可置事  
 但シ各國御條約書ニ何レモ外國人共日本不開港場等ヘ參リ密商シ或ハ密商ヲ企テ  
 ントイタシ候者ハ其犯セル度毎ニ其品取上ケ爲過料ヲキンコドルラルニテ千枚ニ  
 當候程御取立相成候間御國人ニ於テモ右同條ノ企致シ候者於有之ハ兼而御布告ノ  
 通其品取上過料トシテ金千兩御取上ノ事  
 一御國人買求候西洋形商船ニ外國人乘組居萬一商賣取引等致シ度段申立候歟或ハ其乘  
 組御國人手引ニテ商賣致シ候樣ニ相見候ハ、篤ト様子ヲ探索致シ嚴敷拒絕可致萬一  
 仕遂候跡ニ候ハ、其事實穿鑿之上早々其筋ヘ可申立事  
 但シ本文西洋形商船ニ不限御國通例之地乘船ニ而西洋人乘組居候節モ同條之事  
 一外國船ヲ御國人トモ借リ受開港場ヨリ開港場ヘ荷物運輸之儀ハ願之上御開届可相成  
 筋ニ候得共不開港場ヘハ決而御開届無之儀ニ付萬一不良ノ徒村民ヲ欺キ御免許受候  
 ニ付賣買致シ度坏ト申唱ヘ候トモ一切差許申問敷事  
 但シ地方鐵艦等ニテ不得止事外國船相雇不開港場ヘ相廻リ候事御免許無之筋ニモ

無之其節ハ府藩縣之知事ヨリ其沙汰可有之且乘組人之内開港場之役人爲取締之立會居候等ニ付事實実留候上其取扱ニ可及事

一 濠へ碇泊イタサハ沖繫リ又ハ其近海ニ於テ双方ノ船出會致密商候様子ニ候ハ、是又早々穿鑿可致事

一 不開港場へ外國船碇泊イタシ薪水食料而已賣渡候儀ニテ聊カ心障リ之事無之トモ其都度相届可申事

難船救助之事

一 難船ニ而困苦ノ体ニ相違無之節ハ其困苦ノ輕重ニ從ヒ相當ニ扶助イタシ可遣事

但シ船ニ乘組居リカキ程ニ候ハ、其海岸最寄寺院也民家也可然場へ止宿爲致食料衣服等迄任附可遣事

一 船之修覆ニ取掛リ候ハ、鍛冶大工職其他人夫ハ勿論器材迄用意致シ可遣事

一 乘組人之内溺死之尸有之歟或者滞留中病死之者埋葬之儀申立候ハ、墓所ノ内都合ニキ場所へ埋葬可爲致事

一 洋中ニチイテ大船破摧シ乘組外國人之内猶船具等ニ取付生殘リ居候体見當候ハ、早々我船へ助ケ載開港場へ送届候歟又者其土地支配之者へ引渡シ其支配ノ者受取海陸便宜ヲ見計開港場へ可差送事

一 難船漂着候ハ、早々外務省歟又者開港場之内可成里數近キ所へ晝夜ニ不限注進ニ及其掛リ官員之出張ヲ申立差圖可受事

一 難破イタシ船難用立陸路ヨリ開港場へ罷越度段外國人ヨリ願出候ハ、承届附添之者可成餘計ニサシ出最寄之開港場へ可送届事

一 困難之船隠レ洲等ニ乘懸ケ難引出其儘船主引拂候節ハ右船洋又ハ鐵具碇鎖等迄沈没之マ、追々流失候トモ又ハ村方ニ而取捨候トモ向後異存ナキ旨外國人ヨリ横文之書面取置ヘキ事

一 難破之船洋其マ、差置外國人ハ一旦引拂追々右船引出シテ再可差越候ニ付其間船其外之モノトモ預リ置キケレ候様外國人ヨリ相頼ニ候トモ容易ニ引受申問敷彼方ヨリ遮而申立候ハ、其筋へ伺之上可引受勿論入費可相掛儀ニ付右貸銀受取候儀ハ不及申跡々ニ而異論不差起様何事ニモ書面可取置事

△(明治八年五月第七十號布告左ノ如ク改正)

一 沿海地方ニ於テ外國船困難ノ節救助方ニ付出費ノ儀ハ總テ其船主ニ屬シ相當ニ候得共船主ニ屬スヘカラサル部分於有之ハ内譯精細區分致シ其地管轄ノ府縣廳ヨリ官費ヲ以テ仕拂候事ト相心得船主へ談判致シ船主ヨリ相當償却高ノ外猶不足ノ殘額ハ内譯精細書相添へ管轄府縣ヨリ大藏省へ申立處分ヲ可受候或ハ船主ノ自費ト地方廳ノ



官費ト區別判然致サ、ル部分ハ暫ク官費ヲ以テ操替置キ船主滯留中ナラハ其趣船主  
 へ心得置セ若シ船主其他乗組ノ者既ニ困難場引拂後ナル片ハ先以テ最寄開港場ノ府  
 縣長官へ照會シ同所長官ヨリ其旨船主又ハ船主管轄ノ領事へ申入置セ而後右區分ノ  
 見込外務省へ申出何分ノ指揮ヲ可受若シ船主ヨリ受取ルヘキ分本人持合セ無之候ハ  
 、證書取置是又前文同様開港場ノ府縣長官へ可相廻事

一難破ノ船具又ハ沙濡之荷物或ハ船滓等賣拂度旨外國人ヨリ申立候ハ、右ハ相當ノ價  
 ナ以テ買求メ候儀不苦尤モ其段可相届事

一難破ニ而永々滯留可相成様子ニ候ハ、府藩縣トモ其筋ヨリ警衛之モノ可差出事

一乗組人無之西洋之難破船海岸へ漂着候ハ、其様子イサイニ可相届出事

一總而外國人ニ取引イタシ候勘定書或ハ證書之類ニ至ル迄和文ニ而者難用立候ニ付彼  
 國之文字ニ而爲相認書キ判又ハ調印爲致置クヘシ和文ニ而者後日之證ト難相成候此  
 方ヨリ可差出證文等有之候ハ、和文ニ相認メ右へ調印イタシ可差出彼方ヨリ望候ト  
 モ意味不相知西洋文へ調印ハ勿論名而認載候儀不相成被欺候儀有之候トモ後ニ其詮  
 無之事ト可相心得事

一右條目ニ有之伺出候儀又ハ届書トモ其場所ヨリ最近キ開港場歟又ハ東京外務省へ差  
 出候事ト可心得勿論事柄永引キ手輕ニ不相濟儀ハ開港場へ相届候上猶又外務省へ可

申立事

○第十九款 船舶積量測度規則 明治十七年四月  
 第十號布告

船舶積量測度規則別紙ノ通制定シ明治十七年七月一日ヨリ之ヲ施行ス

船舶積量測度規則

- 第一條 凡シ船舶(海軍艦船ヲ除ク)ノ積量ハ此規則ニ依リ測度スル者トス
- 第二條 船舶ノ積量ヲ測度スルハ總テ曲尺ヲ用イ尺位ヲ以テ單位トシ其尺度ハ分位ニ  
 止ムヘシ
- 第三條 西洋形船ノ積量ハ百立方尺ヲ以テ一噸トシ日本形船ノ積量ハ十立方尺ヲ以テ  
 一石トス
- 第四條 西洋形船ニシテ甲板一層ノ者ハ其甲板ヲ以テ量噸甲板トシ二層ノ者ハ其上層  
 ヲ以テ量噸甲板トシ三層以上ノ者ハ其最下ヨリ第二層ニアル者ヲ以テ量噸甲板トス
- 第五條 西洋形船ニシテ甲板一層若クハ二層ノ者ハ量噸甲板下ノ噸數ニ量噸甲板上諸  
 室ノ噸數ヲ合セテ之ヲ該船ノ總噸數トシ又甲板三層以上ノ者ハ量噸甲板下ノ噸數ニ

量噸甲板各甲板間ノ噸數及ヒ最上甲板上諸室ノ噸數ヲ合セテ之ヲ該船ノ總噸數ト  
ス甲板ナキ者ハ舷端以下ノ噸數ヲ以テ該船ノ總噸數トシ又舷端以上ニ艙室アレハ其  
噸數ヲ合セテ之ヲ該船ノ總噸數トス

第六條 汽船ノ登簿噸數ハ總噸數ヨリ乘組人常用室及ヒ機關室ノ噸數ヲ除キタル者ト  
ス帆船ノ登簿噸數ハ總噸數ヨリ乘組人常用ノ噸數ヲ除キタル者トス

第七條 乘組人常用室トシテ除クヘキ噸數ハ總噸數ノ百分ノ六トス

第八條 機關室トシテ除クヘキ噸數ノ割合ハ左ノ如シ

外車汽船機關室ノ噸數該船總噸數ノ百分ノ二十ヨリ三十マテハ總噸數ノ百分ノ三十  
七暗車汽船機關室ノ噸數該船總噸數ノ百分ノ十三ヨリ二十マテハ總噸數ノ百分ノ三  
十二機關室ノ廣狹ニ依リ前項ノ割合ニ適セサル者ハ該室ノ噸數ニ外車汽船ナレハ其  
二分ノ一ヲ加ヘ暗車汽船ナレハ其四分ノ三ヲ加ヘタル者トス

第九條 日本形回漕船ハ艙梁上下艙船ノ石數ヲ以テ該船ノ積石トシ又其構造回漕船ニ  
異ナル者ハ舷端以下ノ石數ヲ以テ該船ノ積石トス

第十條 帆船ノ噸數及ヒ積石測度ノ方法ハ布達ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

○第二十款 帆船積量測度方法 明治十七年四月  
第十號布達

今般第十號ヲ以テ帆船積量測度規則布告候付テハ帆船積量測度方法別紙ノ通相定ム  
右布達候事

帆船積量測度方法

第一條 西洋形帆船噸數ヲ測定スルハ左ノ方法ニ據ルヘシ

第一項 量噸甲板上ニテ船首ノ内側ヨリ船尾ノ内側ニ至ル長ヲ測リ之ヨリ甲板ノ厚  
ニ準ヒ船首船尾ノ傾度ニ對スル甲板ノ長及ヒ終尾船梁ノ矢(船梁ノ弧形ヲナス高)  
ノ三分ノ一ニテ船尾ノ傾度ニ對スル甲板ノ長ヲ減シテ量噸甲板下ノ長トシ之ヲ  
左ノ等級ニ準ヒ等分スヘシ

第一級 量噸甲板下ノ長五十尺迄ノ船ハ四箇〇第二級 同五十尺以上百二十尺迄  
ノ船ハ六箇〇第三級 同百二十尺以上百八十尺迄ノ船ハ八箇〇第四級 同百八十  
尺以上二百廿五尺迄ノ船ハ十箇〇第五級 同二百廿五尺以上ノ船ハ十二箇

量噸甲板下ノ長ヲ等分シタル後其各分長點ニ於テ該甲板ノ下面ヨリ船底内板ノ  
上面ニ至ル深ヲ測リ之ヨリ船梁ノ矢三分ノ一ヲ減シ之ヲ各分長點ニ於ケル量噸  
甲板下ノ深トス而シテ中央分長點ニ於ケル深十六尺迄ハ四個十六尺以上ナル片ハ  
六個ニ各深ヲ等分スヘシ各深ヲ等分シタル後其各分深點及上下兩端ニ於テ船内  
ノ幅ヲ測定スヘシ各分深點ニ於テ幅ヲ測リタル後之ヲ上端ヨリ數ヘ偶數ニ當ル

第一類 行政法 帆船積量測度方法

幅ハ四倍シ奇數ニ當ル幅(上下兩端ヲ除ク)ハ二倍シ此合數ニ上下兩端ノ幅ヲ加ヘ之ニ分深點ノ間隔三分ノ一ヲ乘シ其得數ヲ各分長點ニ於ケル橫截面積トス各分長點ノ橫截面積ヲ測リタル後之ヲ船首ヨリ數ヘ偶數ニ當ル面積ハ四倍シ奇數ニ當ル面積(船首船尾ノ兩端ヲ除ク)ハ二倍シ此合數ニ船首船尾ノ面積(若シアレハ)ヲ加ヘ之ニ分長點ノ間隔三分ノ一ヲ乘シテ其得數ヲ百ニテ除シ之ヲ量噸甲板下ノ噸數トス

第二項 最上甲板諸室ノ噸數ヲ測定スルニハ該室内ノ平均ノ長ト高ヲ測リ其高ノ中央ニ於テ該室ノ前後ト中央ノ幅ヲ測リ而シテ中央ノ幅ノ四倍ニ前後ノ幅ヲ加ヘ之ニ平均ノ長ノ六分ノ一ヲ乘シ又之ニ平均ノ高ヲ乘シテ其得數ヲ百ニテ除スヘシ  
第三項 甲板三層以上ノ船ニ於テ量噸甲板上各甲板間ノ噸數ヲ測定スルニハ甲板間ノ平均ノ高ヲ測リ其高ノ中央ニ於テ船首ノ内側ヨリ船尾ノ内側ニ至ル長ヲ測リテ之ヲ量噸甲板下ノ長ト同一ニ等分シ而シテ高ノ中央ニ於テ其各分長點及ヒ前後兩端ノ幅ヲ測リ之ヲ船首ヨリ數ヘ偶數ニ當ル幅ハ四倍シ奇數ニ當ル幅(船首船尾ノ兩端ヲ除ク)ハ二倍シ此合數ニ船首船尾ノ幅(若シアレハ)ヲ加ヘ之ニ分長點ノ間隔三分ノ一ヲ乘シ又之ニ平均ノ高ヲ乘シテ其得數ヲ百ニテ除スヘシ

第二條 機關室ノ噸數ヲ測定スルハ左ノ方法ニ據ルヘシ

第一項 機關室内平均ノ長幅深ヲ測リ之ヲ相乘シ其得數ヲ百ニテ除シ之ヲ機關室ノ噸數トス

第二項 機關室ノ上端ニ機關運轉又ハ空氣流通等ノ爲メ圍ヒタル場所アルトキハ其長幅深ヲ測リ之ヲ相乘シテ其得數ヲ百ニテ除シ之ヲ機關室ノ噸數ニ加フヘシ

第三項 暗車汽船ニ於テハ軸室平均ノ長幅高ヲ測リ之ヲ相乘シテ其得數ヲ百ニテ除シ之ヲ機關室ノ噸數ニ加フヘシ

第三條 甲板ナキ西洋形船ノ噸數ヲ測定スルハ左ノ方法ニ據ルヘシ

第一項 船首上端ノ内側ヨリ船尾上端ノ内側ニ至ル長ヲ測リ之ヲ第一條第二項ニ據ル等級ニ準ヒ等分シ其各分長點ニ於テ船舷ノ上端ヲ境線トシ之ヨリ船底ニ至ル深ヲ測リ其他第一條第一項ニ據リテ噸數ヲ求メ之ヲ該船ノ總噸數トス

第二項 船舷上端ノ境線ヲ超ヘ船室ノ設アルモノハ境線上ニ於ケル該室平均ノ長幅高ヲ測リテ之ヲ相乘シ其得數ヲ百ニテ除シ之ヲ該線下ノ噸數ニ加フヘシ

第四條 日本形回漕船ノ石數ヲ測定スルハ左ノ方法ニ據ルヘシ

第一項 船舷ノ上端ヲ境線トシ之ヨリ船梁ノ上面ニ至ル平均ノ高ヲ測リ又船首室ノ境界ニ至ル長ヲ測リ又船舷ノ内側ヨリ内側ニ至ル平均ノ幅ヲ測リテ此長幅高ヲ相乘シ其得數ヲ十ニテ除シ之ヲ船梁上船艙ノ石數トス

第二項 船首室ノ境界ヨリ船尾ノ内側ニ至ル船底ノ長ヲ測リ之ヲ四箇ニ等分シ其各分長點及ヒ前後兩端ニ於テ深ヲ測リ又各深ノ中央及ヒ上下ニ於テ平均ノ幅ヲ測リテ其深幅ヲ平均シ而シテ此平均ノ深幅ト長ヲ相乘シ其得數ヲ十ニテ除シ之ヲ船梁下船艙ノ石數トス

第五條 日本形ニシテ其構造回漕船ニ異ナル船ノ石數ヲ測定スルハ左ノ方法ニ據ルヘシ  
船首ノ内側ヨリ船尾ノ内側ニ至ル船底ノ長ヲ測リ之ヲ四箇ニ等分シ其各分長點ニ於テ船舷上端ヲ境界線トシ之ヨリ船底ニ至ル深ヲ測リ其深ノ中央及ヒ上下ニテ平均ノ幅ヲ測リテ其深幅ヲ平均シ而シテ此平均ノ深幅ト長ヲ相乘シ其得數ヲ十ニテ除シ之ヲ該船ノ石數トス

○第廿一款 西洋形船檢査規則 明治十七年十二月三十號布告

西洋形船檢査規則別冊ノ通制定シ明治十八年七月一日ヨリ施行ス  
右奉 勅旨布告候事

(別冊) 西洋形船檢査規則

第一條 西洋形船舶 海軍艦船ヲ除ク ハ此規則ニ遵ヒ檢査ヲ受クヘシ但登簿船免狀ヲ受有スルニ及ハサル風帆船ハ此限ニアラス

第二條 船檢査所設置ノ場所ハ農商務卿之ヲ定ム

第三條 檢査所所在ノ地方ヲ航行スル船舶ノ檢査ハ其最寄檢査所ニ願出ヘシ

第四條 檢査所未設ノ地方ヲ航行スル船舶ノ檢査ハ其船籍アル地方廳ヲ經テ農商務省ニ願出ヘシ

第五條 登簿船免狀ヲ受有スルニ及ハサル漁船ノ檢査ハ其船籍アル地方廳ニ願出ヘシ

第六條 檢査官吏ハ農商務卿之ヲ命ス但第五條ノ漁船ニ係ル檢査官吏ハ府知事縣令之ヲ命ス

第七條 檢査官吏ニ於テ船舶ヲ檢査シ航行ニ適當ト認ムルトキハ農商務省ヨリ左ノ事項ヲ記載シタル檢査證書ヲ交付ス但地方廳ノ檢査ニ係ル者ハ其廳ヨリ之ヲ交付ス

- 一番號
- 一船名
- 一船主氏名
- 一定警場名
- 一登簿噸數

第一類 在記注 西洋形船檢査規則

一端松其他必要ノ所屬品  
 一 航行シ得ヘキ場所ノ定限  
 一 證書有効期限  
 一 凧船コハ左ノ事項ヲ加フ  
 一 公稱馬力  
 一 凧機ノ種類  
 一 凧罐ノ種類  
 一 最大凧壓  
 一 旅客定員

第八條 検査官吏ニ於テ凧船ヲ検査シ航行ニ不適當ト認ムルトキハ其修理ヲ命ジ或ハ出航ヲ差止ムヘシ

第九條 検査證書ノ効力ハ其凧ノ現狀ニ依リ六箇月十二箇月ニ區別ス

第十條 検査證書ハ凧内最モ見易キ場所ヘ掲ケ置クヘシ

第十一條 検査證書ヲ亡失若クハ毀損シタルトキハ其理由ヲ詳記シ再渡ヲ願出ヘシ

第十二條 凧名凧主及ヒ定繫場ヲ變更シタルトキハ農商務省又ハ地方廳ニ届出ヘシ

第十三條 凧体若クハ凧機凧罐其他要部ノ修理若クハ變更ヲナシタルトキハ更ニ検査

一 ヲ受クヘシ

第十四條 凧船航行ノ用ヲ爲サハルニ至リタルトキ又ハ除籍トナリタルトキハ直ニ検査證書ヲ農商務省又ハ地方廳ニ返納スヘシ

第十五條 検査證書ノ有効期限内ト雖モ検査官吏ニ於テ必要ト認ムル場合ニ於テハ臨時檢スルコトアルヘシ

第十六條 凧船ノ検査ヲ受ケスシテ航行シ又ハ無効ノ検査證書ヲ使用シ又ハ検査證書ニ記載セル最大凧壓ヲ超過シ或ハ場所ノ定限ヲ越エテ航行シ又ハ検査官吏ノ命ニ違背シ修理セスシテ出航シ若クハ差止ノ命ニ違背シテ出航シタル者ハ三拾圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十七條 検査證書ニ記載セル認松其他必要ノ所屬品ヲ具ヘス又ハ旅客定員ヲ超過シテ航行シ又ハ第十三條ヲ犯シタル者ハ拾圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十八條 検査官吏ノ臨檢ヲ拒ミ又ハ第十條ヲ犯シタル者ハ貳拾圓以上貳拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第十九條 前三條ノ場合ニ於テ正當ノ事由アルモノハ其罪ヲ論セス

第二十條 第十一條第十二條第十四條ヲ犯シタル者ハ壹圓以上壹圓九拾五錢以下ノ科料ニ處ス

第二十一條 検査細則及ヒ施行ノ手續ハ農商務卿之ヲ定ム  
 △(明治十七年十二月第二十九號布達農商務卿連名)  
 今般第三十號布告ヲ以テ西洋形船檢査規則制定候ニ付テハ在來ノ船檢査ハ明治十九年六月三十日迄ニ檢査ヲ受クヘシ  
 右布達候事

○第廿二款 車稅規則 明治八年二月第二十七號布告

明治六年一月第三十一號布告僕婢馬車人力車駕籠乘馬遊松諸稅規則昨七年十二月三十一日限り相廢シ尤モ遊松ノ儀本年一月一日ヨリ昨七年(二月)第二十一號布告解漁船並ニ海川小廻船等船稅規則ニ照準収稅シ車稅ノ儀ハ改テ車稅規則左ノ通り相定メ同月同日ヨリ施行候條此旨布告候事

- 車稅規則
- 第一則
- 一 馬車貳匹立以上 一ヶ年稅金三圓
  - 一 同 一匹立 一ヶ年稅金貳圓
  - 一 荷積馬車 一ヶ年稅金壹圓

- 一 人力車貳人乘 一ヶ年稅金貳圓
- 一 同 一人乘 一ヶ年稅金壹圓
- 一 牛車 一ヶ年稅金壹圓
- 一 荷積大七次車 一ヶ年稅金壹圓
- 一 荷積中小車但大六以下 一ヶ年稅金五拾錢

第二則  
 一新調ノ車ハ總テ其都度區戶長ヘ届出檢印可申受事  
 但シ從來所持ノ分ニテ檢印無之牛車荷積車等ハ更ニ檢印可申受事

第三則  
 一新調ノモノハ六月以前ハ全年分七月以後ハ半年分納稅シ破解ノ者ハ七月以後ハ全年分六月以前ハ半年分納稅候儀ト可相心得事

第四則  
 一 右稅金上納ハ年々兩度ニ區別シ半ヶ年分宛區戶長ヘ取集メ其管轄廳ヘ可相納事  
 但前半年分ハ其年七月三十一日限り後半年分ハ翌年一月三十一日限り其管轄廳ヘ可相納事

第五則

第一類 行政法 車稅規則

一 荷積車等ノ内耕作一途ニ相用候分ハ免稅タルヘキ事

第六則

一 諸車類無届ニテ營業スル歟又ハ使用スル者ハ其脫稅高ノ五倍科料タルヘキ事

○第十八章 衛生

○第一款 府縣衛生事務條項

明治十二年十二月内務省  
乙第五十五號(府縣へ)達

昨明治十一年當省乙第四十四號並同四十九號ヲ以テ衛生事務擔當ノ吏員ヲ置キ候様相達置候處自今更ニ衛生課ヲ設テ略々衛生ノ大意ニ通スル者ヲ撰テ之ニ專任シ別紙ノ條項爲取扱候様可致此旨相達候事」但事務條項ニ準シ職務章程取調可伺出事

府縣衛生課事務條項

地方衛生課ハ府知事縣令ノ指揮ニ從ヒ成規ニ依リテ管内衛生ノ事務ヲ整理シ其新設ノ事件及ヒ改良ノ方法ニ係ル者ハ地方衛生會ノ議ニ附シ之ヲ施行スル者トス而シテ重要ノ事件ハ施行ノ前之ヲ内務省ニ稟議スヘシ

第一 醫事取締ノ事

一 醫師、獸醫、製藥家、藥舖、産婆等ノ開閉業ヲ督察シ其現員ヲ調査スル事  
一 毒藥、劇藥、贗敗藥ノ調査及ヒ其販賣ヲ督察スル事  
一 賣藥ノ調査及ヒ其販賣ヲ督察スル事

醫師及遺族ヨリ願出ル病屍ノ解剖ヲ許可スル事

第二 飲食料取締ノ事

各地飲水ノ性質ヲ検査并或ハ水道ノ位置構造水源ノ掃除法等ニ注意シ之カ改良ヲ謀ル事  
腐敗製造ノ食物飲料ニ注意シ之カ取締ヲナス事  
飲食物及ヒ玩弄品ノ着色料其他顔料染料等ノ取締ヲナス事

第三 清潔法注意ノ事

市街道路溝渠廁園芥溜ノ掃除及ヒ其修繕ノ方法ヲ設クル事  
學校、病院、囚獄、旅舎、借屋、劇場等ノ衛生上利害ヲ檢察スル事  
市場、製造場、畜場、屠場、魚干場等ノ衛生上利害ヲ檢察スル事  
墓地ノ位置經界及ヒ埋葬火葬ノ手續方法ヲ定ムル事  
埋葬上ノ地形火葬場ノ構造ヲ檢察シ取締ノ方法ヲ設クル事  
公園ノ新設存廢ニ付衛生上ノ利害ヲ檢察スル事

第四 病災豫防ノ事

各種ノ傳染病即チ虎列刺、腸室扶私、發疹室扶私、痘瘡、麻疹、實扶的里亞、赤痢等ノ發見ニ注意シ速カニ之カ豫防ニ着手スル事  
各傳染病ニ就キ消毒法及ヒ患者ノ離隔法等施行ノ當否ヲ檢察スル事

第一類 行政法 府縣衛生事務條項

避病院ノ員數位置ヲ相定シ患者死者取扱ノ當否ヲ檢察スル事

地方病ノ有無類別及ヒ其地ノ燥濕寒温人民ノ常習ニ注意スル事

家畜流行病傳染病ノ豫防消毒法ヲ行フ事

種痘檢査ノ普及ヲ謀ル事

第五 窮民救療ノ事

公立私立病院及ヒ貧院、盲院、聾啞院、癩狂院、棄兒院等ノ設立ヲ謀ル事

郡區醫町村醫配置ノ方法ヲ設ケル事

第六 統計報告ノ事

郡區ヨリ出ス所ノ出生死亡流産ノ申報ヲ收録シ管内ノ人口死者ノ壽夭及ヒ疾病ノ類

別ヲ調査シテ每半年ノ統計表ヲ製スル事

公私立病院、貧院、盲院、聾啞院、癩狂院、棄兒院等ノ設置郡區醫町村醫ノ配置及ヒ種

痘檢査ノ員數等ヲ調査シテ每半年ノ統計表又ハ一覽表ヲ製スル事

醫師、獸醫、製藥家、藥舖、産婆等ノ開閉業地方病ノ有無製藥ノ多寡及ヒ賣藥ノ増減等

ヲ調査シテ毎一年ノ統計表ヲ製スル事

一年中施行セル衛生事項及ヒ管内衛生上ノ全況ヲ蒐録シ考案ヲ附シ年報ヲ製スル事

以上ノ統計報告等ハ都テ毎期ニ内務省衛生局ニ申達スル事

傳染病、家畜傳染病、中毒死亡、避病院、廢置等ハ其時々之内務省衛生局ニ報告スル事

第七 雜件

職業習俗ニ由テ健康ヲ傷害スヘキ事件ヲ調査シ漸次改良除害ノ方法ヲ設ケル事

鑛泉ノ性質効能ヲ檢シ浴場ノ構造法及ヒ浴法等ニ注意シ且其改良ヲ謀ル事

天然生藥物ノ有無及ヒ其產地多寡等ヲ點檢申報スル事

統計表及ヒ諸報告ハ悉皆之ヲ地方衛生會ニ出シ其參考ニ供スル事

地方衛生會ノ請求ニヨリ必要ノ報告ヲ郡區町村ヨリ徵收スル事

○第二款 傳染病豫防規則 明治十三年七月 第三十四號布告

總則

第一條 此規則ニ稱スル傳染病トハ虎列刺、腸室扶私、赤痢、實布徑利亞、發疹室扶私及

痘瘡ノ六病ヲ云フ但六病ノ外流行病アリテ其勢盛ナルノ兆アル片ハ地方長官ハ内

務省ニ具申シ豫防法ヲ施行スヘシ

第二條 醫師ノ傳染病ヲ診斷スル者ハ遅クモ二十四時間ニ之ヲ患者所在ノ町村衛生委

員ニ通知スルヲ要ス衛生委員ハ速ニ之ヲ郡區長及ヒ最寄警察署ニ通知シ郡區長ハ速

ニ之ヲ地方廳(東京府下ハ府廳及ヒ警視本署)ニ届出ツヘシ

△(明治十三年十二月第五十四號布告左ノ一項追加)

地方廳ハ一週間毎ニ新舊患者及ヒ治癒死亡ノ數ヲ内務省ニ申報スヘシ

第一類 行政法 傳染病豫防規則



但土地ノ便宜ニ依リ醫師ヨリ直チニ警察署ニ届出警察署ヨリ衛生委員ニ通知スルモ妨ケナシ

第三條 地方長官ハ管内ニ傳染病流行ノ兆アリト認ムルハ其性状ヲ記シテ速カニ之ヲ内務省ニ申報シ且ツ其管内及ヒ隣接若クハ船舶交通ノ府縣最寄兵營其地碇泊ノ軍艦等ニ報告スヘシ

但(明治十三年十二月第五十四號布告但書削除)

第四條 (明治十三年十二月第五十四號布告削除)

第五條 諸官廳、兵營、軍艦、監獄及ヒ官立ノ學校、病院、製作所等ニ於テ傳染病者アルハ其主長ハ該地方官ト協議シ此規則ニ從ヒ豫防法ヲ施行スヘシ

第六條 虎列刺、赤痢、發疹室扶私、痘瘡ノ流行ニ際シ地方長官ニ於テ豫防ノ爲メ避病院ヲ要スヘキト認ムルハ内務卿ニ具狀シテ之ヲ設クルヲ得

但人民協議ヲ以テ避病院ヲ設クルハ地方長官ノ許可ヲ請フ可シ

第七條 醫師並ニ衛生委員ニ於テ傳染病者ノ看護行届カス若クハ病源ノ傳播ヲ防キ難ト認ムル者ハ避病院ニ入ラシム可シ

第八條 掛リ官吏ハ傳染病者アル家ニハ其病名ヲ書シテ門戸ニ貼付シ要用ノ外人ト交通ヲ絶ダシムヘシ

但シ患者治癒死亡又ハ避病院ニ入りタル後チ相當ノ消毒法ヲ行ハサルノ間ハ仍ホ本條ヲ遵守セシムヘシ

△(明治十五年八月第四十七號布告)

明治十三年(七月)第三十四號布告傳染病豫防規則第八條中病名票貼付ノ儀當分チ之ヲ施行セス

虎列刺病

第九條 虎列刺病者ノ排泄物及ヒ汚穢物ハ其運搬夫ヲ設ケ一定ノ場所ニ運輸シ燒棄若クハ埋却セシム可シ

第十條 虎列刺病者ノ死屍ハ其埋葬地ヲ區劃シ濫リニ雜葬セシムヘカラス且他ニ改葬スルヲ許サス

但火葬ハ尋常ノ燒場ニ於テシテ其遺骨ハ改葬スルモ妨ナシ

第十一條 虎列刺病者ニ用ヒタル臥具衣服器具及ヒ病室松室等ハ消毒法ヲ行フニアラサレハ再ヒ之ヲ用ヒ又ハ受授賣買スルヲ許サス

第十二條 虎列刺流行ノ際ニハ井泉、河流、水道及ヒ厠園、芥留、下水、溝渠等總テ病毒萌生ノ因トナルヘキ場所ニ注意シ掃除清潔ノ法ヲ設クヘシ

第十三條 虎列刺流行スルハ船舶交通ノ地方ニ於テ流行地ヨリ來ル所ノ船舶ヲ検査

第一類 行政法 傳染病豫防規則

シ患者若クハ死者アル片ハ此規則ニ從テ處分スヘシ  
第十四條 虎列刺流行ノ勢猛烈ナル片ハ地方長官ハ内務卿ニ具狀シ其許可ヲ得テ醫師衛生官吏警察官吏郡區町村吏等ヨリ適當ノ人員ヲ撰ヒ檢疫委員ト爲シ豫防消毒ノ事務ヲ擔任セシムルコトヲ得

△(明治十五年九月第四十八號布告左ノ一項追加)

此場合ニ於テハ醫師タル者吐瀉ノ二症ヲ兼備スル病ヲ診斷スル片ハ總テ檢疫委員ニ届出ツヘシ但シ本項施行ノ終始ハ地方廳ヨリ之ヲ管内ニ告示シ内務省ニ申報スヘシ第十五條 前條ノ場合ニ於テハ地方長官ハ祭禮劇場等人民ノ群集ヲ差止ルコトヲ得△(明治十四年十月第五十八號布告左ノ一項追加)

虎列刺已ニ市街村落ノ全部若クハ一部分ニ於テ蔓延ノ兆候ヲ顯ハン其他ノ部分ニ及ホサハル様遮斷シ得ヘキモノト見認ムル片ハ地方官ヨリ内務卿ニ稟議シ交通ヲ絶タシムルノ處分ヲ爲スコトヲ得 但要用ノ者ハ掛官吏檢察ノ上交通ヲ許スコトヲ得

腸室扶私病

第十六條 腸室扶私病流行ノ際ハ第九條第十一條及ヒ第十二條ヲ適用スヘシ

赤痢病

第十七條 赤痢病流行ノ際ハ第九條第十一條及ヒ第十二條ヲ適用スヘシ

實布埤里亞病

第十八條 實布埤里亞病流行ノ際ハ第十一條ヲ適用シ患者ノ痰唾及ヒ之ニ汚穢スル物ハ燒棄若クハ埋却セシムヘシ

發疹室扶私病

第十九條 (明治十二年十二月第五十四條布告改正)

發疹室扶私病者アルトキハ第十條第十一條ヲ適用シ其流行ノ際ニハ第十二條第十三條第十四條及ヒ第十五條ヲ適用スヘシ

第二十條 發疹室扶私病者若クハ其死屍ヲ載セタル車輿等ハ毎回消毒法ヲ行フニアラサレハ他用ニ供スヘカラス

痘瘡病

第二十一條 (明治十五年九月第四十八號布告改正)

痘瘡病者アル片ハ第十條第十一條及ヒ第二十條ヲ適用シ患者ニ未痘者ヲ接近セシムヘカラス其流行ノ際ニハ第十二條ヲ適用スヘシ

罰則

第二十二條 醫師衛生委員此ノ規則ニ違背シタル片ハ五拾圓以內ノ罰金ニ處ス

第二十三條 官吏其管掌ノ事務ニ於テ此規則ニ違背シタル片ハ百圓以內ノ罰金ニ處ス

第二十四條 人民此規則ニ違背シタル片ハ壹圓五拾錢以内ノ科料ニ處ス

○第三款 天然痘豫防規則 明治九年內務省  
甲第十六號布達

第一條 小兒初生七十日ヨリ滿一年迄ノ間ニ必ス種痘ス可シ若シ事故アリテ此期ニ後ル、モノハ其次第ヲ醫務取締若シクハ區戶長ニ届クヘシ

但初種ノ後五年或ハ七年毎ニ再三種ヲ試ムヘシ

第二條 種痘シタル者ハ必ス其種痘醫ヨリ種痘濟ノ證書ヲ請取リ置クヘシ

但天然痘變痘ニ感シタルモノモ本文ニ準シテ醫師ノ證書ヲ請取リ置クヘシ

第三條 醫務取締若クハ區戶長ハ初種ノモノ再三種ノモノ及ヒ事故アリテ種痘スルイ能ハサルモノ等夫々檢査シ地方廳ニ届ケ出ツヘシ

第四條 地方廳ニ於テハ醫務取締若クハ區戶長ノ届書ヲ以テ半年分ツ、取纏メ毎年三月九月內務省ニ出スヘシ

第五條 送籍ノ片ハ必ス第二條ニ掲クル醫師ノ證書ヲ所持ス可シ

但滿二十五年以上ノモノ並天然痘濟ノ証跡アルモノハ此限ニアラス

第六條 管内ニ於テ天然痘流行スル片ハ官廳ヨリ流行ノ緩急病症ノ輕重等ヲ近接ノ府縣ニ報告シ且內務省ニ届ケ出ツ可シ

第七條 前條ノ際ニ臨メハ未痘兒ハ勿論種痘濟ノ者ニ至ル迄年齡期限ヲ問ハス普ク接種スヘシ 但未決已決監獄繫留ノ囚徒ハ本條ニ準シ官ヨリ接種セシムヘシ

第八條 第一條及ヒ第二條ノ旨ヲ遵守セス或ハ無稽ノ説ヲ唱ヘ種痘ヲ拒ミ若クハ他人ヲ蠱惑スル等ノ者ハ違式註達ヲ以テ論シ罰金ヲ科ス可シ

○第四款 虎列刺病流行地方ヨリ來ル船舶檢査規則 明治十五年六月  
三十一號布告

第一條 凡ソ虎列刺病流行地方ヨリ來ル船舶ハ檢疫官ノ檢査ヲ受ケ其記名セル許可ノ證書ヲ得タル後ナニアラサレハ他港ニ進航シ陸地又ハ他船ト交連シ及ヒ乗組人船客ノ上陸並ニ積荷ノ陸揚ヲ爲スヘカラス

第二條 其船中該病患者又ハ該病死者ナキトキハ檢疫官直チニ其船舶ノ他港ニ進航シ陸地又ハ他船ト交連シ及ヒ乗組人船客ノ上陸並積荷ノ陸揚ヲ爲スノ許可ヲ與フヘシ

第三條 若シ其船中ニ該病患者又ハ該病死者アル片ハ檢疫官其船舶ヲ陸地及ヒ他船ニ傳染ノ虞ナシト認ムル距離ニ於テ其指定スル場所ニ碇泊セシムヘシ

該病患者ハ之ヲ避病院若クハ其住居若クハ其他檢疫官ノ適當ト認ムル場所ニ送致スヘシ其死者ハ(若シ緣故人ノ望アルトキハ其望ニ從ヒ)地方官所定ノ場所ニ火葬シ若シクハ十分ノ消毒法ヲ施シタル後チ之ヲ埋葬スヘシ

前項ノ手續ヲ終リ検査官ハ其乗組人船客ニハ十分ナル消毒法ヲ施シタル後テ上陸ノ許可ヲ與ヘ其船舶及ヒ傳染ノ虞アリト認ムル積荷ニハ十分ナル消毒法ヲ施シタル後テ其船舶ノ他港ニ進航シ陸地又ハ他船ト交通シ及ヒ積荷ヲ陸揚スルノ許可ヲ與フヘシ

第四條 此規則ニ違背シタル者若クハ此規則ノ執行ヲ妨害シタル者ハ刑法ニ依テ之ヲ處分スヘシ

第五條 此規則施行始終ノ期日并ニ場所ハ其都度内務卿ヨリ之ヲ指定スヘシ

○第五款 検査停船規則 明治十二年七月二十九號布告

第一條 日本政府ハ虎列刺ノ蔓延ヲ防カシテ爲メ茲ニ左ニ掲クル規則ヲ開港場ニ施行スルヲ布告ス而シテ更ニ其施行ノ停止ヲ命スル迄ハ之ヲ實施スルモノトス

第二條 (明治十二年七月第三十號布告改正)

中央衛生會ニテ決スル處ノ開港場ニ官吏及ヒ至當ノ教育ヲ受ケ能ク職任ニ堪ユヘキ日本又ハ外國醫士化學士及ヒ相當ノ助役ヲ以テ地方検査局ヲ設置スヘシ而シテ其局員ノ數ハ其港入船ノ多寡ニ應テ増減アルヘシト雖モ検査一切ノ事務ヲ速ニ整理スルニ差支ナキヲ以テ足レトスヘシ

都テ此地方検査局ハ中央衛生會ノ管轄ニ屬スヘシ

第三條 政府ハ検査停船規則ヲ施行スル各開港場ニ於テ停船場ヲ定メ且虎列刺患者ヲ容ルヘキ病院並ニ該病ノ疑アル患者ヲ容ルヘキ病院ヲ建設シ且遺憾ヲ處置スヘキ地消毒法ヲ施行スヘキ場所並ニ停留セラレタル人ノ爲メ都テ必需ノ具ヲ備ヘタル屋舎ヲ設置スヘシ

第四條 検査信號旗ヲ掲ケタル番船ヲ各港口ノ近傍ニ置キ各船入港ノ前検査ノ爲メ之ヲ停止シ地方検査局ノ人員少ナシトハ二名ヲ派出シテ之ヲ検査スヘシ但シ右局員ノ内一名ハ必ス醫士タルヘシ而シテ船長醫士或ハ船内ノ人ハ誰ニテモ検査官吏ノ尋問ニ對シテ都テ之ニ應答シ又所定ノ式紙ニ事項ヲ記入シ其氏名ヲ記シタル明告書ニ調印シテ差出ヘシ (圖點ヲ施シタル數字明治十二年七月第三十號布告改正) 船長ハ検査官吏ノ求ニ應シ船内ノ各部ヲ開キ検査ヲ受クヘシ但シ船中船客又乗組人ニテ占居シタル片又ハ他ノ事故ニ依テ病毒ニ感染シタル恐アル片ハ其検査ヲ受クヘシ

検査官吏ハ該船ノ航海日記ヲ査閲シ乗組人及ヒ船客ノ人名録ヲ船内現在ノ人員ト引合ハヌコトヲ得ヘシ

第五條 (明治十二年七月第三十號布告改正)

虎列刺病流行セサル港又ハ其疑ナキ港ヨリ來航スル船ノ船長ハ明告書及ヒ其他ノ手

第一類 行政法 検査停船規則

續テ以テ該船有病ノ港又ハ其疑アル港ニ立寄ラス又有病ノ船若シハ其疑アルモノト直チニ交通セス且航海中眞性虎列刺病又ハ疑似症ヲモ船内ニ發セシモノ無キ旨ヲ証明シテ檢疫官吏ヲ満足セシムル片ハ該船ハ直チニ入港スルヲ得ヘシ  
軍艦ハ其艦長及ヒ醫官ニテ調印セル書面ヲ以テ前條ノ趣ヲ明告スル迄ニテ足ソリトスヘシ而シテ該艦ハ検査ヲ經ス入港スルヲ得ヘシト雖モ若シ右ノ書面ヲ差出サハル片ハ檢疫停船規則ニ從フヘシ

第六條 船内ニ眞性虎列刺病若クハ疑似症ニ罹リタル者ナシト雖モ有病ノ港又ハ其疑アル港ヨリ來ルカ又ハ其航海中直ニ有病ノ船若クハ其疑アルモノト交通シタル船及ヒ船内ノ人員ハ其港ヨリ出帆ノ日又ハ有病若クハ其疑アル船ト交通ノ日ヨリ起算シテ七日ノ期滿ツル迄ハ停留セシムヘシ但地方檢疫局ニ於テ右ノ時間ヲ短縮スルハ差支ナキヲ認ムル片ハ此限ニアラス  
右七日ノ期該船來着ノ上又ハ其前既ニ過キ去ル片ハ消毒法ヲ行ヒシ上速カニ船客ノ上陸ヲ許スヘシ

一般ノ積荷ハ消毒法ヲ施スニ及ハヌ自餘ノ物品ハ檢疫官吏ノ見込ヲ以テ消毒法ヲ行ヒ或ハ行ハサルヘシト雖モ爛布古衣夜具ハ勿論其他檢疫官吏ニ於テ殊ニ危険ナリト見込ムルモノハ消毒法ヲ行フヘシ

消毒法ヲ行ヒタル物品ハ速カニ陸揚スルヲ得ヘシト雖モ消毒法ヲ行ハサル物品ハ停船ノ定期滿ル迄陸揚スヘカラス若シ停船中眞性虎列刺及ヒ疑似症ヲ發スル片ハ其船及ヒ人員物品ハ都テ第八條第九條ニ從ヒ處置スヘシ

第七條 (明治十二年七月第三十號布告改正)

有病ノ港又ハ其疑アル港ヨリ來ル軍艦ハ其艦長及ヒ醫官ヨリ書面ヲ以テ該艦來港前七日以内艦内ノ者有病ノ港或ハ其疑アル港ニ上陸セシトナク又ハ病毒感染ノ恐レナク且ツ航海中艦内ニ眞性虎列刺病又ハ疑似症ヲ發セシトナキ旨ヲ明告スル片ハ直ニ入港スルヲ得ヘシ右ノ書面ヲ差出サハル片ハ該艦ハ檢疫停船規則ニ從ハシムヘシ  
第八條 船舶來港ノ上其船内ニ眞性虎列刺若クハ疑似症ヲ發スル者アル片ハ檢疫官吏ニテ指示シタル停船場ニ移シテ要用ノ消毒法ヲ行ヒシ日ヨリ起算シテ七日ノ間停船セシムヘシ

△(明治十二年七月第三十號布告第二項改正)

船舶來港前病毒消滅シ而シテ檢疫官吏ノ満足スヘキ方法ヲ以テ消毒法ヲ施行セル上ハ地方檢疫局ニ於テ可トスル程停船ノ時間ヲ短縮シ得ヘシ

△(明治十二年七月第三十號布告第三項改正)

消毒法施行後停船中眞性虎列刺病若クハ疑似症ヲ發スル者アル片ハ地方檢疫局ノ必

要ト考斷スル程消毒法ヲ反覆施行シ其施行ノ時ヨリ起算シテ尙三日間停船セシムヘシ但最初定メタル時限猶三日以上アル片ハ最初定メタル時限ニ達スル迄停船セシムヘシ

患者及ヒ死者ノ遺骸ハ第九條ニ從ヒ處置スヘシ

第九條 前條ニ記スルカ如キ船中ノ來着スルニ方リ其乘組ノ患者未ダ癒エサレハ其容體ニ依リテ之ヲ避病院ニ移シ若シ已ニ死シテ遺骸ノ處置未ダ済マサル片ハ其爲メニ設ケタル場所ニ於テ火葬スルカ又ハ其關係アル者ノ望ミニ任セテ十分消毒法ヲ行ヒシ後埋葬スヘシ

患者及ヒ遺骸ヲ船中ヨリ他ニ移シタル後夜具衣類其他ノ物品及ヒ船内何レノ部分ニテモ病毒感染ノ恐アル者ハ地方檢疫局ニ於テ指示セル如ク十分ニ消毒法ヲ施スヘシ而シテ消毒法ヲ施ス爲メ要用ノ入ト船中ヲ取締ル可キ人トノ外都テ船内ノ人員ハ其人ノ爲ニ特ニ設ケル場所ノ家屋ニ移シ消毒法ヲ行フヘシ船内ニ殘リタル人員ハ船内ニテ消毒法ヲ受ケルカ又ハ交代シテ陸上ニアル適當ノ家屋ニ於テ之ヲ受ケヘシ

第十條 有病ノ港或ハ其疑アル港ヨリ出帆シ途中ノ港ヲ經ルト雖モ其港ニ於テ檢疫處置ヲ受ケタル船中直チニ有病ノ港又ハ其疑アル港ヨリ來ルモノト認メ處置スヘシ  
第十一條 (明治十二年七月第三十號布告改正)

定期郵便ヲ運搬スル諸船ハ着港ノ上速ニ其郵便物ヲ運送スルコトヲ得ヘシ而シテ政府ハ右ノ郵便物ヲ運送配達ノ爲メ至當ノ方法ヲ設ケヘシ

第十二條 病院ニ入ル患者ハ治療及ヒ必要品ヲ受ケルヲ得ヘシ  
病院或ハ停泊ノ船内ニ在ル患者ヲ尋訪セント欲スル人ハ地方檢疫局ニ於テ定メタル方法ニ從フヘシ

避病院ニ關係ナキモ醫業ニ通シタル醫士ハ患者又ハ其代理人ノ請ニ由テ診察協議スルコトヲ得ヘシ

第十三條 船中ニ於テ眞性虎列刺病若クハ疑似症ヲ發スルコトナキ片ハ停留セラレタル人ヲ船中ニ停メ置クコトヲ得ヘシ又ハ地方檢疫局ニ於テ衛生上ノ見込ニ從ヒ特ニ陸地ニ設ケアル避病ノ場所ニ移サルコトアルヘシ

第十四條 (明治十二年七月第三十號布告改正)

檢疫停船規則施行ノ港ニ來着スル船舶ニ於テ檢疫官吏之ヲ虎列刺病ノ源因ナラント思考スル疑似ノ病徴ヲ發スル者アル片ハ其患者ハ病院ノ別室ニ移シ船中ニ於テ其病症ヲ診斷スルニ充分ノ時間ヲ終ル迄停留セシムヘシ但其時間ハ四十八時ニ過クヘカラス而シテ地方檢疫局ハ醫士ノ報告ニ依リテ該規則ノ内其場合ニ適スル條款ヲ實

施スヘシ

第十五條 有病ノ港又ハ其疑アル港ヲ發シ船用品或ハ荷物積込ノ爲メ途中檢渡所ノ設テアル無病ノ一港ニ立寄タル船ハ豫メ檢疫官吏ノ檢査ヲ經且ツ必要ト認メザル消毒法ヲ行ヒ船用品或ハ貨物ヲ積入ル、毎ニ地方檢疫局ヨリ指示スル方法ニ從フ可シ

又該船内ニ眞性虎列刺病若クハ疑似症ヲ發シタル片ハ該船又ハ其乗込人及ヒ物品ヲ處置スルハ第八條第九條ニ準スヘシ但シ該船内ヨリ上陸スル者アル片ハ他船ニテ到着シタル人ニ行フヘキ同一ノ處置ヲ爲スヘシ

第十六條 船舶ノ檢査ハ其來着後成ルヘク速カニ施行スヘシ若シ來着後十二時間ヲ過キテ檢査ヲ爲サ、ル片ハ入港スルヲ得ヘシ但シ其遲延天氣惡キカ爲メカ又ハ避ケ難キ事情アルカ爲メカ又ハ船長若クハ該船ニ關係アル人ノ所行或ハ詐偽ニ出ツルカノ片ハ此限ニ在テス其場合ニ於テハ其遲延シタルノ事故終リタル片檢査ヲ爲スヘシ

第十七條 地方檢疫局ヨリ指圖シタル消毒法ハ檢疫官吏之ヲ施行シ其船ノ士官及ヒ船員之ヲ補助スヘシ但消毒法ハ之ヲ命シタル時ヨリ成ルヘク二十四時間ニ完了シ而シテ其入費ハ船主又ハ其責アル者ヨリ辨償スヘシ

第十八條 檢疫停船規則ヲ施行スル港内ニ碇泊中船内ニ眞性虎列刺病又ハ疑似症ヲ發

シタル船ハ直ニ第八條第九條ノ規則ニ從フヘシ  
△(明治十二年七月第三十號布告第二項改正)

然リト雖モ若シ其船既ニ本港ニ於テ停留ヲ經タル片ハ檢疫官ハ地方檢疫局ニテ必要ト考斷スル式テ消毒及ヒ檢査ノ方法ヲ反覆施行スヘシ

第十九條 (明治十二年七月第三十號布告改正)

虎列刺病既ニ流行スル港内ニ來着スル船舶檢査消毒法患者及ヒ死者ノ處置ヲナスハ前記ノ規則ニ從ハシムヘシ右ヲ施行スル爲メノ豫備ハ政府ニ於テ爲スヘシト雖モ船及ヒ人員停留ノ規則ハ休止スヘシ

第二十條 第六條第八條及ヒ第九條ニ記スル船舶ノ景狀地方檢疫局ニ於テ特ニ公衆ノ健康ニ危險ナリト思慮シ非常ノ處置ヲ必要トスル片ハ此規則外ニ豫防ノ嚴制ヲ施スヲ得ヘシ其場合ニ當リテ地方檢疫局ハ直ニ中央衛生會ニ臨時ノ報告書ヲ差出スヘシ而シテ右報告書ノ寫ハ請求ニ依リテ地方檢疫局ヨリ之ヲ該船ノ船長船主又ハ其用途ニ付與スヘシ

第二十一條 檢査中又ハ停留中ノ船舶又ハ停留人ノ寓所ニハ凡ソ何人ヲ問ハス地方檢疫局ノ許可ナクシテ往クコトヲ許サス

第二十二條 前條ノ規則ヲ施行スルニ就テ其人ニ係ル所ノ食料醫藥其他欠クヘカラサ

ル費用ハ其本人又ハ代理人ヨリ辨償スヘシ  
第二十三條 此規則ニ背キ或ハ從フコト拒ム者ハ犯ス毎ニ二百圓以内ノ罰金ヲ科スヘシ若シ其船長船主若クハ其船ノ用途又ハ其各人若クハ一人ノ命令又ハ利益ノ爲メ此規則ニ背キ或ハ從フコト拒ム片ハ毎犯罰金五百圓ニ至ルマテ増加スルコトアルヘシ此規則ニ就テ拂フヘキ費用ヲ辨償セサルモノアル片ハ民事ノ訴訟ヲ以テ之ヲ要求スヘシ

但シ罰金ハ科セサルヘシ

此規則ヲ犯シ停留場ヲ脱去スル者ハ(船又ハ人)罰金ヲ科シ且即時停留場ニ返ラシムヘシ

○第六款 墓地及埋葬取締規則 明治十七年十月二十五號布達

墓地及埋葬取締規則左ノ通相定ム

墓地及埋葬取締規則

第一條 墓地及火葬場ハ管轄廳ヨリ許可シタル區域ニ限ルモノトス

第二條 墓地及火葬場ハ總テ所轄警察署ノ取締ヲ受クヘキモノトス

第三條 死體ハ死後二十四時間ヲ經過スルニ非サレハ埋葬又ハ火葬ヲナスコトヲ得ス

但別段ノ規則アルモノハ此限ニアラス

第四條 區長若クハ戸長ノ認許證ヲ得ルニ非サレハ埋葬又ハ火葬ヲナスコトヲ得ス

但改葬ヲナサントスル者ハ所轄警察署ノ許可ヲ受クヘシ

第五條 墓地及火葬場ノ管理者ハ區長若クハ戸長ノ認許證ヲ得タル者ニ非サレハ埋葬又ハ火葬ヲナサシム可ラス又ハ警察署ノ許可證ヲ得タルニ非サレハ改葬ヲナサシム可ラス

第六條 葬儀ハ寺堂若クハ家屋構内又ハ墓地若クハ火葬場ニ於テ行フヘシ

第七條 凡ソ碑表ヲ建設セント欲スル者ハ所轄警察署ノ許可ヲ受クヘシ其許可ヲ得ス

シテ建設シタルモノハ之ヲ取除ケシムヘシ(但墓地外ニ建設スルモノ亦之ニ準ス)

第八條 此規則ヲ施行スル方法細則ハ警視總監府知事縣令ニ於テ便宜取設ケ内務卿ニ届出ツヘシ

○第七款 墓地及埋葬取締規則方法細目 明治十七年十一月内務省

本年第廿五號布達第八條ニ記載セル方法細目ハ左ノ條件ヲ標準トスヘシ此旨相達候事

第一條 墓地ハ從前許可セラレタル者ニ限ル(但己ムコトヲ得サル事情アリテ之ヲ取

廣メ又ハ新設スル場合ニ於テハ地方廳ニ願出ヘシ)

第二條 墓地ヲ新設スルハ國道縣道鐵道大川ニ沿ハス人家ヲ隔ルコト凡ソ六十間以上

ニシテ土地高燥飲用水ニ障ナキ地ヲ撰ムヘシ



第三條 墓地ハ種族宗旨ヲ別タス其町村ニ本籍ヲ有シ若クハ其町村ニ於テ死シタルモノハ何人ニテモ之ニ葬ムルコトヲ得其從前別段ノ習慣アルモノハ此限ニアラス(但死刑ニ處セラレタル者ハ墓地ノ一隅ヲ區劃シテ其内ニ埋葬スルモノトス)

第四條 墓地ノ周圍(墓地ト墓地ニ非サル地トノ境界ヲ云フ)ニハ樹木ヲ栽ユヘシ墓地ノ内ニハ一丈以上ノ樹木堀墻ヲ存スヘカサルモノトス(但從前ヨリ現存スル者ハ此限ニアラス)

第五條 墓地ハ清潔ヲ旨トシ掃除及修繕ヲ怠ルヘカラス

第六條 火葬場ハ人家及人民幅濶ノ地ヲ隔ル凡ソ百二十間以上ニシテ風上ニ位セサル地ヲ撰ヒ火爐煙筒ヲ備ヘ臭煙ヲ除クノ裝置ヲナシ且周圍ニ堀墻ヲ設クヘシ

但山林原野等ニシテ人家ヲ隔タル場所ナキトキハ格別ナリトス

第七條 火葬ハ成ルヘク日没後之ヲ行フヘシ

第八條 墳穴ノ深サハ六尺以上タルヘシ若シ土地ニヨリ六尺ニ至リ難キモノ及ヒ火葬ノ遺骨ヲ埋藏スルモノハ格別ナリトス

第九條 墓地火葬場ニハ必ズ管理者ヲ置キ其姓名ハ區役所又ハ戶長役場ニ届ケ置クヘシ

第十條 死者ノ姓名族籍官位勳爵法號及生死ノ年月日建立者ノ姓名ヲ記スルニ止リ誌銘傳贊等ノ碑文ヲ刻セサル墓標ハ所轄警察署ノ許可ヲ受ルノ限ニ非ス

第十一條 死屍ヲ埋葬又ハ火葬セント欲スル者ハ主治醫ノ死亡届書ヲ添ヘテ區長又ハ

戶長ノ認許證ヲ乞フヘシ

醫師ハ治療ヲ受クルノ猶豫ナクシテ死亡シタルモノヲ埋葬又ハ火葬セント欲スルハ醫師ノ檢案ヲ差出シ區長又ハ戶長ノ認許證ヲ乞フヘシ

妊娠四ヶ月以上ノ死胎ニ係ルトキハ醫師若クハ産婆ノ死産證ヲ差出シ區長又ハ戶長ノ認許證ヲ乞フヘシ

變死ニ係ルハ立會醫師ノ檢案書ニ檢視官ノ檢印ヲ乞テ差出ヘシ

囚徒ノ死屍ヲ引取埋葬又ハ火葬セント欲スルモノハ獄醫ノ死亡證書寫ニ司獄官ノ檢印ヲ乞ヒテ差出スヘシ

第十二條 區戶長ハ前條ノ届書證書ヲ領收スルコトヲサレハ埋火葬ノ認許證ヲ與フ可ラス

第十三條 管理者ハ葬主ヨリ領收シタル區戶長ノ認許證ヲ編纂シ毎三ヶ月所轄警察署ノ檢閱ヲ受ケテ之ヲ區役所又ハ戶長役場ヘ差出スヘシ

第十四條 管理者ハ墓地ノ繪圖及墓籍ヲ調製シ置クヘシ

第十五條 此標準ニ據リ難キモノハ其事情ヲ具シ伺出ヘシ

○第八款 墓地及埋葬取締規則違背者處分方 明治十七年十月第八十二號(警視廳府縣)達

今般第貳拾五號ヲ以テ墓地及埋葬取締規則布達候ニ付此規則ニ違背スルモノハ違警罪ノ刑ヲ以テ處分スヘシ此旨相達候事

○第十九章 醫制

○第一款 醫師免許規則

明治十六年十月  
第三十五號布告

醫師免許規則別冊ノ通制定シ明治十七年一月一日ヨリ施行ス

但明治十五年(二月)第四號布達同年(八月)第三十九號布告ハ此規則施行ノ日ヨリ廢止ス

右奉 勅旨布告候事

醫師免許規則

第一條 醫師ハ醫術開業試験ヲ受ケ内務卿ヨリ開業免狀ヲ得タル者トス

但此規則施行以前ニ於テ受タル醫術開業ノ證ハ仍ホ其効アリトス

第二條 開業免狀ヲ得ントスル者ハ試験及第證書ヲ以テ地方廳ヲ經由シテ内務省ニ願出スヘシ

第三條 官立及府縣立醫學校ノ卒業證書ヲ得タル者其證書ヲ以テ開業免狀ヲ得ノコトヲ願出ツルトキハ内務卿ハ試験ヲ要セスレテ免狀ヲ授與スルコトアルヘシ

第四條 外國ノ大學醫學部若クハ醫學校ニ於テ卒業シタル者或ハ外國ニ於テ醫術開業免許ヲ得タル者其卒業證書又ハ開業證書ヲ以テ開業免狀ヲ得ノコトヲ願出ツルトキ

ハ内務卿ハ其證書ヲ審査シ試験ヲ要セスレテ免狀ヲ授與スルコトアルヘシ

第五條 醫師ニモシキ地ニ於テハ府知事縣令ノ具狀ニヨリ内務卿ハ醫術開業試験ヲ經

タル者下雖トモ其經歷ニヨリ假開業免狀ヲ授與スルコトアルヘシ

第六條 開業免狀ヲ得ル者ハ免狀下付ノ節手数料金三圓ヲ納ムヘシ

第七條 開業免狀ヲ得タル者ノ氏名本籍ハ内務省ノ醫籍ニ登錄シ時々之ヲ公告スヘシ

第八條 開業免狀ヲ毀損亡失シ又ハ氏名本籍ノ變換ニ由リ免狀ノ書換ヲ願フ者ハ其事

由テ記シテ地方廳ヲ經由シテ内務省ニ願出スヘシ

第九條 開業免狀ノ書換ヲ願フ者ハ免狀下付ノ節手数料金壹圓ヲ納ムヘシ

第十條 醫師廢業又死亡シタル片ハ地方廳ヲ經由シテ其開業免狀ヲ内務省ニ返納スヘシ

第十一條 醫師其業ニ關シ犯罪若シクハ不正ノ行爲アルトキハ中央衛生會ノ審議ヲ經

内務卿ニ於テ其業ヲ停止若クハ禁止スルコトアルヘシ

但其事開業免狀ヲ得ルノ前ニ在リト雖モ本條ニ準シ處分スルコトアルヘシ

第十二條 前條ニ據リ醫業禁止ノ處分ヲ受ケタル者アルトキハ地方廳ニ於テ直ニ其

開業免狀ヲ取上ケ之ヲ内務省ニ返納スヘシ其停止ノ處分ニ係ルモノハ幾年月日開停

業シタル旨ヲ開業免狀ニ裏書シ應印ヲ捺シテ之ヲ本人ニ下付スヘシ

第十三條 内務卿ハ醫業禁止ノ處分ヲ爲シタル後ト雖トモ本人ノ行狀ヲ調査シ中央衛

生會ノ審議ヲ經特ニ其禁止ヲ解クトアルヘシ

○第二款 醫術開業試驗規則 明治十六年十月 第三十四號布達

今般第三十五號ヲ以テ醫師免許規則布告相成候ニ付醫術開業試驗規則別冊ノ通り相定メ明治十七年一月一日ヨリ施行ス

但明治十二年(二月)内務省甲第三號布達ハ同日ヨリ廢止ス  
右布達候事

醫術開業試驗規則

- 第一條 醫術ヲ開業セントスル者ハ此規則ニ據リ試驗ヲ受クヘシ
- 第二條 内務卿ハ毎年二回醫術開業試驗ヲ舉行スヘシ但試驗ヲ舉行スヘキ地方及ヒ試驗日ハ六ヶ月前之内務卿ヨリ告示スヘシ
- 第三條 内務卿ハ醫術開業試驗ヲ舉行スル毎ニ官立及ヒ府縣立醫學校病院ニ從事スル者又ハ地方ニ於テ學術名望アル醫師理化學者等ヲ撰ヒ試驗委員ヲ命スヘシ
- 但齒科醫術開業試驗ニ於テハ齒科醫一名ヲ試驗委員ニ加フルコトアルヘシ
- 第四條 内務卿ハ主事者ヲ派遣シ試驗一切ノ事ヲ監督整理セシムヘシ
- 第五條 醫術開業試驗ハ之ヲ二期ニ分チ前期試驗後期試験トス前後二期ノ試験ヲ同時

ニ受クルコトヲ得ス

但齒科醫術開業試験ハ全科一時ニ受クルモノトス

第六條 試驗科目ヲ定ムルコト左ノ如シ

前期試験科目

- 第一 物理學 第二 化學
- 第三 解剖學 第四 生理學

後期試験科目

- 第一 外科學 第二 內科學
- 第三 藥物學 第四 眼科學
- 第五 產科學 第六 臨床實驗
- 第七條 齒科試驗科目ヲ定ムルコト左ノ如シ
- 第一 齒科解剖及生理 第二 齒科病理及治療
- 第三 齒科用藥品 第四 齒科用器械
- 第五 實地試驗

第八條 前期試験ハ一ヶ年半以上後期試験ハ更ニ一ヶ年半以上修學セシ者ニ非レハ之ヲ受クルコトヲ得ス

第一條 行政法 醫術開業試験規則

△(明治十七年二月第二號布達左ノ但書追加)

但齒科醫術開業試驗ハニケ年以上修學セシ者ニ非サレハ之ヲ受クルコトヲ得ス  
第九條 前期試験ヲ受ケントスル者ハ其願書ニ修學ノ履歷書ヲ副ヘ後期試験ヲ受ケ  
トスル者ハ其願書ニ履歷書及前期試験及第ノ證書ヲ副ヘ毎年六月十二月中地方廳ニ  
差出スヘシ地方廳ハ翌月五日迄ニ其書類ヲ取纏メ内務省ニ進達スルモノトス

但履歷書ニハ其師若シハ他ノ開業醫師ニ名以上ノ保証アルヲ要ス

第十條 地方廳ニ於テ試験出願者中醫事ニ關シ犯罪若クハ不正ノ行爲アリト認ムル者  
アルトキハ之ヲ内務省ニ具狀スヘシ内務省ニ於テハ中央衛生會ノ審議ヲ經其情狀ニ  
因リ期限ヲ定メ試験ヲ許サハルコトアルヘシ

第十一條 試験問題ハ試験主事者試験委員協議ノ上之ヲ撰定シ試験場ニ臨ミ受験人ヲ  
シテ筆答セシムヘシ

但時宜ニヨリ口答セシムルコトアルヘシ

第十二條 試験主事者ハ試験終ルノ後試験委員ト與ニ其成績ヲ評定シ及第シタル者ニ  
ハ直チニ及第證書ヲ與フヘシ

但及第證書ニハ試験主事者委員連署スヘシ

第十三條 試験ニ落第シタル者ハ半年ヲ終ルニ非シハ再試験ヲ請フコトヲ得ス

第十四條 醫術開業試験ヲ受クル者試験開場ノ前日迄ニ左ノ手数料ヲ納ムヘシ

前期試験手数料 金三圓 後期試験手数料 金五圓

齒科試験手数料 金五圓

第十五條 受験中疾病及シ其他ノ事故アリテ試験ヲ中止シ又ハ落第シタル者ト雖モ前  
條ノ手数料ヲ返付セス

○第三款 同受験人心得 明治十六年十二月内 務省甲第廿六號告示

今般太政官第三十四號ヲ以テ醫術開業試験規則布達相成候ニ付右受験人心得左之通相  
定候條此旨告示候事

受験人心得

第一條 醫術開業試験ハ當省ヨリ告示シタル試験舉行地ノ中各自便宜ノ地ニ於テ之ヲ  
受クルコトヲ得ヘシ

第二條 醫術開業試験ヲ受ケント欲スル者ハ本年第三十四號布達醫術開業試験規則第  
九條ニ準據シ其願書ヲ居住ノ地方廳ヘ差出スヘシ

第三條 前條許可ノ指令ヲ受ケタル者ハ當省ヨリ告示シタル期限迄ニ試験舉行ノ地ニ  
着シ宿所氏名ヲ其地方廳ヘ届出ツヘシ

第一類 行政法 醫術開業受験人心得

第四條 試驗手数料ハ試驗舉行ノ前日迄ニ醫術開業試驗場ヘ相納ムヘシ  
第五條 試驗場ノ取締上不都合ト認ムヘキ所爲アル者ハ主事者ヨリ退場セシムルコトアルヘシ

第六條 試驗中一科以上欠席ノ者ハ其期ノ試驗ヲ終フルコトヲ得ス(明治十七年内務省  
甲第三十五號告示改正)

願書式 醫術開業試驗願

住所(寄留ナレハ本籍ヲ併記スヘシ)

族籍 氏名

年月生

私儀何年何月何地ニ於テ醫術開業前期(後期)齒科ナレハ醫術ノ上齒科ノ二字ヲ加ヘ前期後期ノ四字ヲ除ク  
度別紙書類相添此段奉願候也

年 月 日 氏 名 印  
右 氏 名 印  
衛生委員 氏 名 印

内務卿宛

○第四款 鍼灸接骨術開業諸件 明治十八年三月内務省  
甲第十號(府縣へ)達

鍼灸術營業者之儀ハ從來開業ノ者並ニ新規開業セントスル者ハ自今出願セシメ其修業  
履歴ヲ檢シ相當ト認ムルトキハ差許不苦其取締方ノ義ハ便宜相設テ可申此旨相達候事  
但既ニ營業差許タルモノハ更ニ出願セシムルニ及ハス

△明治十八年三月内務省甲第七號(府縣へ)達

入齒齒抜口中療治接骨等營業ノ者ハ明治十六年(十月)第三十四號布達ニ據リ醫術開業  
試驗ヲ經ルニ非サレハ新規開業不相成候條從來ノ營業者ハ此際各地方廳ニ於テ鑑札ヲ  
付與シ相當之取締法相立可申此旨相達候事  
但既ニ取締法相設居候向ハ更ニ本文之手續ヲ爲スニ及ハス

○第五款 醫師醫業上ニ關スル犯罪處分方 明治十五年八月  
第三十九號布告

醫師タル者醫業ニ關シ犯罪若クハ不正ノ行爲アルトキハ中央衛生會ノ審議ヲ經内務卿  
ニ於テ其業ヲ停止若クハ禁止スルコトヲ得  
但其事開業免許ヲ得ルノ前ニ在リト雖モ本項ニ準シテ處分スルコトアルヘシ  
右奉 勅旨布告候事

第一類 行凶法 醫師醫業上ニ關スル犯罪處分方

○第二十章 褒章

○第一款 褒章條例 明治十四年十二月 第六十三號布告

褒章條例別紙ノ通相定メ來明治十五年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

褒章條例

第一條 凡ソ自己ノ危難ヲ顧ミズ人命ヲ救助セシ者又ハ德行卓絶ナル者（孝子順孫節婦義僕ノ類）又ハ公衆ノ利益ヲ興シ成績著明ナル者（疏河築堤修路墾田ノ業或ハ貧院學校設立ノ類ヲ云フ）ヲ表彰スル爲メ左ノ三種ノ褒賞ヲ定ム

紅綬褒章

右自己ノ危難ヲ顧ミズ人命ヲ救助セシ者ニ賜フモノトス

綠綬褒章

右德行卓絶ナル者ニ賜フモノトス

藍綬褒章

右公衆ノ利益ヲ興シ成績著明ナル者ニ賜フモノトス

第二條 奇特ヲ實行アリト雖モ褒章ヲ賜フヘキ場合ニ至ラサルモノハ褒狀ヲ與フル

アルハシ

第三條 己ニ褒章ヲ賜ハリタルモノ再度以上同様ノ實行アリテ褒章ヲ賜フヘキ片ハ其

都度飾版一個ヲ賜與シ其章ノ綬ニ附加セシメ以テ標識トス

第四條 褒章ハ本人ニ限リ終身之ヲ佩用シ及ヒ徽號トナスヲ得然レモ重罪ノ刑ニ處セ

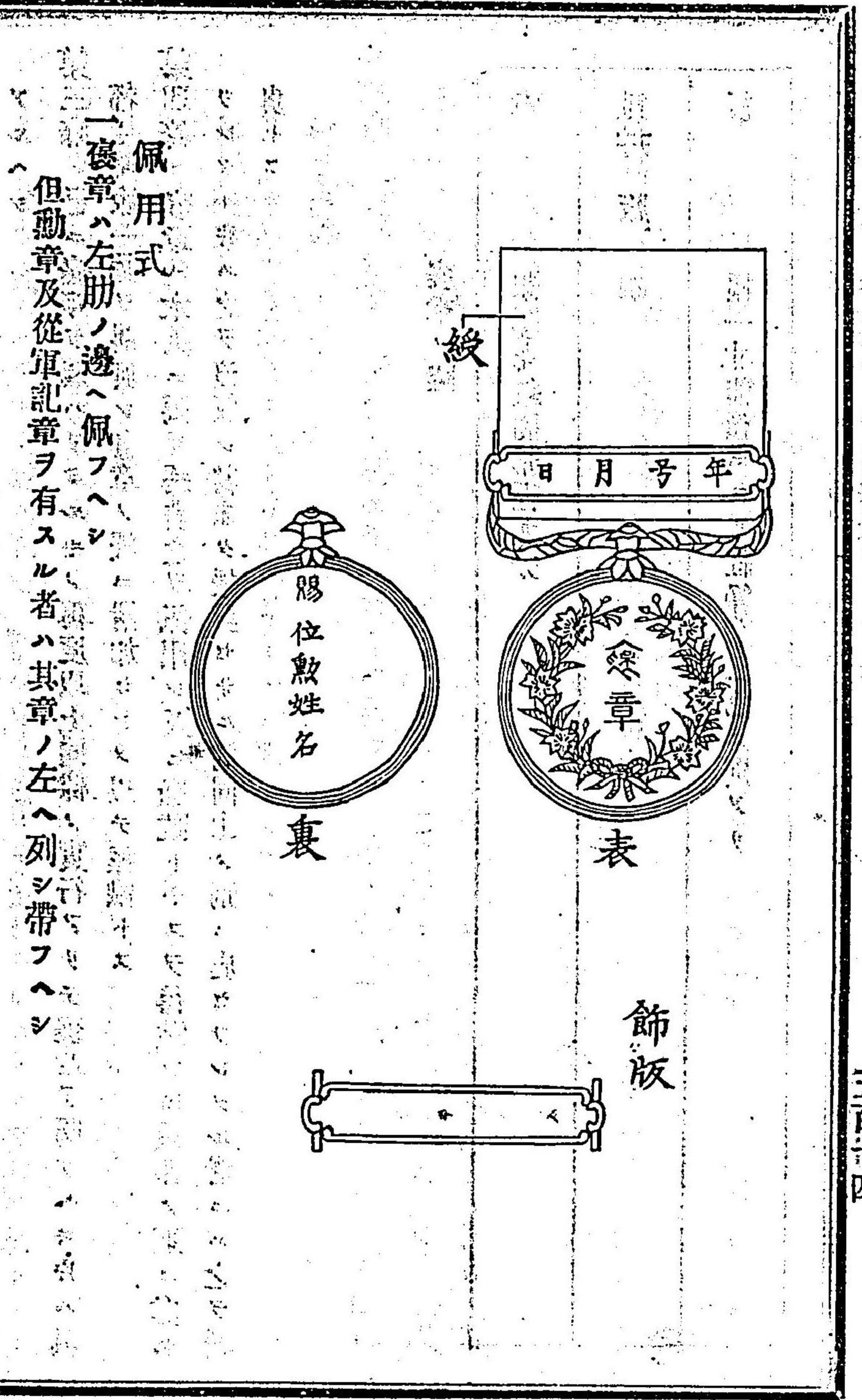
ラレタル片ハ之ヲ沒収シ其未タ授與セサル前同上ノ刑ニ處セラレタル者ニハ之ヲ授與セス

褒章ノ圖



章	銀櫻花紋圓形徑九分
鈕并飾版	銀
綬	幅一寸種類ニヨリ紅綠藍三色ノ別アリ

第一類 行政法 褒章條例



佩用式  
 一 褒章ハ左册ノ邊ヘ佩フヘシ  
 但勳章及從軍記章ヲ有スル者ハ其章ノ左ヘ列シ帶フヘシ

○第二款 褒章條例取扱手續 明治十四年十二月 第三百三號達

今般第六十三號ヲ以テ褒章條例布告候ニ付取扱手續左ノ通相定候條此旨相達候事  
 但明治八年七月 第二百一十一號達ハ右條例施行ノ日ヨリ廢止候事

第一條 凡ソ褒章ヲ賜フヘキ者アルトキハ其管轄長官ヨリ内務卿又ハ農商務卿ニ具申  
 内務卿又ハ農商務卿ハ其當否ヲ審査スヘシ  
 但官吏職務上ニ於テ人命ヲ救助シ又ハ公益ヲ興シタルハ褒章ヲ賜フノ限ニアラス

第二條 内務卿又ハ農商務卿ニ於テ褒章ヲ賜フヘキモノト思量スルトキハ之ヲ賞勳局  
 總裁ニ申牒スヘシ賞勳局總裁ハ其申牒ニ據リ勅奏任官并ニ從六位以上及ヒ勳六等以  
 上ノ者及ヒ華族ノ戶主ニハ褒章ヲ直接シ其他ノ者ハ内務卿又ハ農商務卿ヲ經由シ其  
 管轄長官ヲシテ之ヲ傳達セムヘシ  
 但外國人ニ危難救助ノ褒章ヲ賜フヘキトキハ外務卿ヨリ賞勳局總裁ニ申牒スヘシ  
 授與ノトキモ亦同卿ヲ經由シテ之ヲ傳達セムヘシ其公私備ニ係ル者ハ本條ニ同

第三條 褒狀ハ管轄長官ヨリ與フルモノトス然レモ勅奏任官並ニ從六位以上及ヒ勳六  
 等以上ノ者及ヒ華族ノ戶主ハ内務卿又ハ農商務卿ニ具申スヘシ内務卿又ハ農商務卿

ハ之ヲ太政官ニ上申シ太政官ニ於テ之ヲ賜フヘシ

○第三款 金穀財産寄附者賞與法 明治十六年一月 第壹號布告

明治十四年十二月 第六十三號布告褒章條例ニ依リ褒章ヲ賜フヘキ者又ハ公益ノ爲メニ金穀財産等ヲ寄附シタル者ハ金銀木杯若クハ金圓ヲ賜ヒ又ハ褒章ト金銀木杯金圓ヲ併セ賜フコトアルヘシ

右奉 勅旨布告候事

○第四款 金銀木杯金圓賜與手續 明治十六年三月 第十七號達

本年第一號布告ノ旨ニ依リ金銀木杯又ハ金圓賜與手續別紙ノ通相定候條此旨相達候事

金銀木杯金圓賜與手續 第一條 褒章ヲ賜フヘキ者ニ金銀木杯又ハ金圓ヲ賜ヒ又ハ褒章ト之ヲ併セ賜フ片ハ其等差左ノ如シ

定例

- 第一等 木杯三組(品格ヲ三等ニ分ツ)又ハ金拾圓ヨリ多カラス六圓ヨリ少ナカラス
- 第二等 木杯三組(品格ヲ三等ニ分ツ)又ハ金五圓ヨリ多カラス貳圓五拾錢ヨリ少ナカラス

第三等 木杯三個(品格ヲ三等ニ分ツ)又ハ金貳圓ヨリ多カラス壹圓ヨリ少ナカラス

但賜杯賜金ニ及ビカラスモノハ褒狀ヲ與フルコトアルヘシ

特例 第一等 金杯壹個又ハ三組又ハ金圓

第二等 銀杯壹個又ハ三組又ハ金圓

第二條 公益ノ爲メニ金穀財産等ヲ寄附シタル者ニ金銀木杯ヲ賜ヒ又ハ褒章ト之ヲ併セ賜フ片ハ其等差左ノ如シ

寄附金額又ハ價格 拾圓未滿 褒狀

△(明治十七年二月第二十二號達左ノ但書追加)

但壹圓未滿ハ褒詞ヲ以テ褒狀ニ換フルコトアルヘシ

拾圓以上百圓未滿 木杯壹個  
但五拾圓未滿ハ拾圓毎ニ五拾圓以上ハ貳拾五圓毎ニ品格ニ等差アリ

百圓以上五百圓未滿 木杯三組  
但三百圓未滿ハ五拾圓毎ニ三百圓以上ハ百圓毎ニ品格ニ等差アリ

五百圓以上貳千圓未滿 銀杯一個

第一類 行政法 金穀財産寄附者賞與法 五百十七



但シ千圓未滿ハ貳百五拾圓毎ニ千圓以上ハ五百圓毎ニ品格ニ等差アリ  
貳千圓以上五千圓未滿 銀杯三組

但千圓毎ニ品格ニ等差アリ  
五千圓以上壹万圓未滿 金杯壹個

但貳千五百圓毎ニ品格ニ等差アリ  
壹万圓以上 金杯三組

第三條 金銀杯又ハ特別金圓又ハ褒章ト金銀木杯又ハ金圓ヲ併セ賜フ事項ハ賞勳局總裁之ヲ管理スルモノトス

但勅奏任官并從六位以上及ヒ勳六等以上ノ者及ヒ華族ノ戶主ニ賜フヘキ片ハ第四條ニ準據スヘシ

第四條 金銀杯又ハ特別金圓又ハ褒章ト金銀木杯又ハ金圓ヲ併セ賜フヘキ者アル片ハ警視總監府知事縣令ヨリ内務卿又ハ農商務卿ニ其申シ内務卿又ハ農商務卿ハ之ヲ審查シ賞勳局總裁ニ申牒スヘシ賞勳局總裁ハ其申牒ニ據テ勅奏任官並ニ從六位以上及ヒ勳六等以上ノ者及ヒ華族ノ戶主ニハ之ヲ直授シ其他ノ者ハ内務卿又ハ農商務卿ヲ經由シ警視總監府知事縣令ヲシテ之ヲ傳達セシム

第五條 金銀木杯又ハ金圓又ハ褒狀ヲ受リヘキ者ニシテ其未ダ授與セサル前重罪ニ處ラシタル片ハ之ヲ授與セズ

○第廿一章 叙勳

○第一款 叙勳條例 明治十六年一月

第壹號達

叙勳條例別冊之通相定候條此旨相達候事

叙勳條例

第一條 叙勳條例ハ文武官ノ勳勞アル者ヲ叙シ及ヒ進級セシムルノ例ナリ

但臨時勳功ニ依テ叙スルハ本例ノ限ニアラス

第二條 文武官數年勳勞アルモノハ其成績ヲ勘査シ左表ニ照シテ勳等ニ叙ス其初叙勳任官ハ勳三等奏任官ハ勳六等判任官以下ハ勳八等ヨリス尙ホ勳勞年數ヲ累サスルコト由リ進級スルコトヲ得然レハ判任官ハ十四等官并十四等相當官以下ハ勳六等ニ進ムヲ得ス奏任官ハ七等官并ニ七等相當官以下ハ勳三等ニ進ムヲ得ス勅任官ハ三等官并ニ三等相當官ハ勳一等ニ進ムヲ得ス○大臣參議諸省卿參事院元老院議長陸海軍大將ノ勳一等ニ叙スルハ進級年例ノ限リニアラス○陸海軍下士ノ初叙ハ滿十年以上トス初叙並ニ進級例

勳一等	勳二等	勳三等	勳四等	勳五等	勳六等	勳七等	勳八等
進 以十	進 以五	初 以五			初 以十		
進 以上	進 以上	進 以上	進 以上	進 以上	進 以上	進 以上	初 以上
勳 任	勳 任	勳 任	勳 任	勳 任	勳 任	勳 任	勳 任
奏 任	奏 任	奏 任	奏 任	奏 任	奏 任	奏 任	奏 任
以 下 任	以 下 任	以 下 任	以 下 任	以 下 任	以 下 任	以 下 任	以 下 任

第三條 臨時勳功若ハ特旨ニ依テ叙セラレタル者モ本例ニ依リ進級セシム  
 年金ヲ受領スルモノハ別段ノ恩命アリニ非サレハ引續キ前級ノ年金ヲ賜フ  
 第四條 四等以下ノ勳章ヲ有スルモノ勳任官トナリ七等以下ノ勳章ヲ有スルモノ奏任  
 官トナリタル時ハ進級年數ノ五分一以上ニシテ勳三等又ハ勳六等迄進級スルヲ得  
 第五條 文武官ノ勳等叙スヘキ勳勞者アル時ハ各廳ニ於テ本人ノ履歷明細書ヲ作リ  
 其長官ノ證認狀ヲ副シ毎年一月又ハ八月限ニ賞勳局總裁ニ申請スルヲ得

但地方官ノ叙勳スヘキ者ハ内務卿ヨリ之ヲ申請セシム  
 第六條 賞勳局總裁ハ各廳ノ申請ヲ檢閲審査シ議定官ノ會議ヲ開キ其當否ヲ論定シ以  
 テ上奏ス  
 第七條 勳章授與式ハ毎年四月十一月ノ二回ニ執行ス  
 但臨時叙勳ハ此限ニアラス

○第二款 叙勳條例附則

明治十六年一月 第三號達

今般第二號ヲ以テ叙勳條例相達候ニ付右附則左ノ通相定候條爲心得此旨相達候事

叙勳條例附則

叙勳條例ハ叙勳進級ノ綱領ナリ故ニ其節目ヲ左ニ掲ク  
 第一款 叙勳條例第二條中進級例圖ニ列記スル官等區分年數期限ノ勳勞者ヲ待  
 ツノ所以ナリ故ニ縱合表中ハ年數期限ニ至ルモ其成績勳勞ノ證認ヲ與フルニ不充分  
 ナル者ハ之ヲ申請スルヲ得  
 第二款 履歷明細書ハ檢閲ニ便スル爲メ表ヲ製シ任免黜陟叙位賞罰ノ要領ヲ掲ケ尙ホ  
 内地出張外國派遣又ハ職務ノ分課委員等ヲ別紙ニ詳記シ以テ其履歷ヲ明メシム  
 第三款 勳章授與式ハ毎年四月及ヒ十二月ニ執行スルヲ以テ一月又ハ八月ヲ限リ叙勳

申牒スト雖モ其履歷明細書ニハ豫メ三月盡日又ハ十月盡日マテノ算數ヲ記載スヘシ  
若シ申牒ノ後授與以前ニ於テ轉免黜陟或ハ死亡ノ者アル時ハ速ニ其理由ヲ賞勳局ニ  
通知スヘシ

但勳位進級ニ係ルモノハ初叙以後ノ履歷ノミチ式ニ依リ記載スヘシ

第四款 勤務ノ年數ハ勅任官ハ勅任タルノ日ヨリ奏任官ハ奏任タルノ日ヨリ判任官以  
下ハ判任官以下タルノ日ヨリ起算ス然レ等外ヨリ判任トナリ又判任ヨリ奏任トナリ  
又ハ奏任ヨリ勅任トナリタル者ハ各其前任ノ年數ヲ其後任ノ半數トシテ通算スルヲ得  
但出仕ハ本官ニ同シ又准勅奏判御用掛ハ各本任ヨリ三分一折減シテ勤務年數ニ計  
算スルヲ得雇ノ名義タル時間ハ算入セス

第五款 年月ノ計算ハ一年ハ滿十二ヶ月ヲ以テシ(舊曆ノ閏月ハ除ク)一月ハ十五日ヲ  
以テ區別ス例ハ任官十五日前ニ在レハ滿一月ニ算シ十六日後ニ在レハ半月ニ算シ免  
職ノ時ハ之ニ反ス

第六款 免職又ハ廢官ノ後再任スル者ハ前後奉職年數ヲ通算スルヲ得但勳位進級ニハ  
之ヲ通算セス其刑法ニ觸レ又ハ懲戒例ニ照シ免職シタル者ハ再任スルト雖モ渾テ  
前ノ奉職年數ヲ通算スルヲ得ス

第七款 文官本屬長官ノ懲戒ヲ受テ罰俸二個月半以下ヲ科セラルトキハ勤務年數半

年ヲ減算シ罰俸三ヶ月以上ヲ科セラルトキハ一年ヲ減算ス再度以上若此ノ例ニ  
準テ懲責ヲ拘ハラス

舊刑法ニ觸レ謹慎閉門降官又ハ贖罪罰俸ニ處セラレタル者ハ左ノ例ニ照シテ減算ス  
但武官ノ減算法ハ陸海軍省ニ於テ別段ノ規則ヲ以テ之ヲ定ム

刑名	期	減算年數
謹慎又ハ贖罪	二十日以上 <small>但十日以下ハ除算 スルノ限ニアラス</small>	半年
閉門又ハ贖罪	五十日以上	一年
降官		一年半
罰俸	五ヶ月以下	一年半
同	六ヶ月以上	二年

證認狀書式 (用紙美濃野紙)  
某官某名義出身(或ハ叙勳何等)以來數官ヲ歷任(或ハ本衙ニ精勤)シ何年以上ニ至リ勳

第一類 行政法 叙勳條例附則

勞鈔ナカヲス就中某(局課)長(何部何課)ヲ擔任若クハ兼務スルコト久シク(或ハ臨時某事件ヲ擔任シ處分宜ヲ得)其成績顯著タルヲ確認シ因テ例ニ據リ式ニ照シ履歷明細書ヲ具シ及申候也

年號月日

某官某名印(本屬長官)

賞勳局總裁某名殿

(履歷明細書式其一ハ畧之)

履歷明細書式其二

(用紙美濃紙)

年號月日

官位 苗字名

一某局長被仰付候事或ハ(某課長被免候事某分課差免候事官衙ノ名以下做之)

但ハ達書全文ヲ記載スヘシ以下做之

年號月日

一叙某位或ハ位記返上被仰付候事

年號月日

一某委員被仰付候事或ハ(差免候事(兼務)被仰付候事其掛専務)

年號月日

一某國或ハ某地へ出張被仰付候事(外國行ノ上ハハ發程及歸期ヲ月日ヲ記載スヘシ)

年號月日

一賞典

但賞詞及賜金賜物ノ件數ヲ明載スヘシ

年號月日

一責罰

但罰文刑名ヲ明載スヘシ

備考

明治二年己巳七月以前ハ勅奏判任ノ區分名稱アルコトナシ然レハ履歷ヲ調査スルニ方ツテハ元年二月新正ノ職制ニ於テハ八局ノ判事以上ヲ勅任權判事ヲ奏任筆生ヲ判任トシ同年閏四月創正ノ政体ニ於テハ三等官以上ヲ勅任五等官以上ヲ奏任六等官ヨリ九等官マテ判任ト視テ記載スヘシ且當時藩士等ヲ撰用スルニ五等官以上ニハ徴士ト命シ六等官以下ニハ御雇ノ字ヲ冒ラスヲ例トス叙勳條例附則第四款但書雇ノ名義タルモノト混同スル勿レ

明治四年七月廢藩以前藩職ヲ爲シ并同年十一月府縣改置以前縣務(廢藩ノ際大參事以下是迄ノ通事務取扱ヲ命セラレシモノ)ヲ奉シタル時間ハ除算スヘシ

但維新ニ置カレタル奈良兵庫大津笠松神奈川新潟等ノ府縣ハ此限ニアラス

○第三款 勳章年金褫奪及停止 明治十六年六月二十二號布告

勳章ヲ有スル者其榮譽ヲ汚辱スルノ所爲アル時ハ勳章及年金ヲ褫奪ス外國勳章ハ其佩用免許狀ヲ沒収ス  
勳章ヲ有スル者重罪輕罪ノ訴ヲ受ケ拘留若クハ保釋責付セラレタル時ハ勳章ヲ佩用スルコトヲ得ス又之ニ屬スル禮遇特權及年金ヲ受クルコトヲ得ス  
右奉 勅旨布告候事

○第四款 勳章年金褫奪及停止取扱手續 明治十六年九月二十九號達

本年六月二十二號布告ノ旨ニ依リ勳章年金褫奪及停止取扱手續左ノ通相定候條此旨相達候事

勳章年金褫奪及停止取扱手續

第一條 勳章ヲ有スル者左ノ項目ニ觸ル、トキハ榮譽ヲ汚辱シタル者トス  
第一項 重罪輕罪ノ刑ニ該ル者

但輕禁錮以下ノ刑ニ該ル者ハ其所犯ノ情狀ニヨル

第二項 懲戒例及免職條例ニヨリ免官シタル者

第三項 素行修マラス帶勳者タルノ面目ヲ汚ス者

第二條 勳章ヲ有スル者ニハ先ツ其勳章勳記年金票佩用免許狀ヲ褫奪シタル後處刑言渡ヲ爲スモノトス

第三條 第一條第二項ニ觸ル、者アルトキハ裁判管轄長官ヨリ司法卿又ハ海軍卿ヲ經由シテ其罪狀及刑名ヲ賞勳局總裁ニ具申スヘシ

第四條 第一條第二項第三項ニ觸ル、者アルトキハ所轄長官又ハ地方官ヨリ其情狀ヲ賞勳局總裁ニ具申スヘシ

第五條 賞勳局總裁ハ其具狀ヲ審査シ重禁錮以上ノ刑ニ該ル者ハ直ニ上奏シ其輕禁錮以下ノ刑又ハ第一條第二項第三項ニ觸ル、者ハ議定官ノ會議ニ依テ其褫奪ノ當否ヲ論定シ褫奪スヘキ者ハ奏請ス

第六條 褫奪ノ裁可アリタルトキハ賞勳局總裁ハ褫奪狀ヲ作り褫奪ノ具申ヲ爲シタル長官ヲ經由シテ本人ニ傳達セシム

褫奪ニ及ハサルトキハ賞勳局總裁ヨリ褫奪ノ具申ヲ爲シタル長官ニ通知スヘシ

第七條 勳位進級セン者ナルトキハ前級ノ勳章勳記ヲモ褫奪スヘシ年金票モ亦同シ

第八條 褫奪シタル勳章勳記年金票佩用免許狀ハ褫奪ヲ行ヒタル官廳ヨリ賞勳局ニ還納スヘシ

第九條 勳章ヲ有スル者重罪輕罪ノ訴ヲ受ケ拘留セラレタルトキハ其年月日及ヒ事由

ヲ裁判管轄長官ヨリ司法卿又ハ陸海軍卿ヲ經由シテ賞勳局給裁ヘ其申スヘシ  
但公訴權消滅スルカ若クハ放免ノ言渡ヲ爲シタルトキハ亦之ヲ申告スヘシ

○第廿二章 恩給

○第一款 官吏恩給令

明治十七年一月 第一號達

官吏恩給令左ノ通相定候條此旨相達候事

官吏恩給令

第一條 官吏恩給ハ文官勅任官奏任官判任官其本官奉職ノ年數及ヒ其年齡ニ依リ退官  
後之ヲ支給ス但出仕ハ本官ニ準ス

第二條 恩給ハ官吏滿十五年以上奉職シ年齡六十歳ニ至リテ退官ヲ許シタル者又ハ年  
齡六十歳ニ至ラズト雖モ滿十五年以上奉職シタル後廢官廢廳若クハ不治ノ疾病ニ罹

リ其職ニ堪ヘサル確証アル者ニ終身之ヲ給ス  
大臣參議各省卿元老院議長參事院議長ハ滿二年以上奉職シタルノ後退官スル時ハ特

ニ旨ヲ以テ終身恩給ヲ支給スルコトアル可シ

第三條 在職滿十五年以内ト雖モ公務ニ依リ不治ノ病ニ罹リ又ハ重傷ヲ負ヒ其職ニ堪  
ヘズ退官セシムル者亦終身恩給ヲ支給ス

○第廿二章 恩給  
○第一款 官吏恩給令  
明治十七年一月 第一號達  
官吏恩給令左ノ通相定候條此旨相達候事  
官吏恩給令  
第一條 官吏恩給ハ文官勅任官奏任官判任官其本官奉職ノ年數及ヒ其年齡ニ依リ退官  
後之ヲ支給ス但出仕ハ本官ニ準ス  
第二條 恩給ハ官吏滿十五年以上奉職シ年齡六十歳ニ至リテ退官ヲ許シタル者又ハ年  
齡六十歳ニ至ラズト雖モ滿十五年以上奉職シタル後廢官廢廳若クハ不治ノ疾病ニ罹  
リ其職ニ堪ヘサル確証アル者ニ終身之ヲ給ス  
大臣參議各省卿元老院議長參事院議長ハ滿二年以上奉職シタルノ後退官スル時ハ特  
ニ旨ヲ以テ終身恩給ヲ支給スルコトアル可シ  
第三條 在職滿十五年以内ト雖モ公務ニ依リ不治ノ病ニ罹リ又ハ重傷ヲ負ヒ其職ニ堪  
ヘズ退官セシムル者亦終身恩給ヲ支給ス

第四條 公務ニ依リ重傷ヲ負ヒ若クハ不治ノ病ニ罹リ開業醫ノ診斷書ヲ具ヘテ其職ニ  
堪ヘサル旨ヲ証明スルコトヲ得ル時ハ其退官ヲ許シ在職年數ニ拘ハラズ終身恩給ヲ  
支給ス

第三條及ヒ前項ノ場合ニ於テ盲聾或ハ一肢以上ノ用ヲ失ヒ不治ノ症ニ罹リタル者ハ  
其退官ヲ命ジタルト又ハ退官ヲ許シタルトニ拘ハラズ其情狀ニ依リ特旨ヲ以テ現官  
相當恩給ノ外ニ猶其最下金額十分ノ七迄ヲ増給スルコトアル可シ

開業醫ノ診斷書ニ就キ疑フ可キモノアルトキハ本屬長官ハ更ニ醫員ヲ派遣シ其診斷  
ニ依リ事實ノ當否ヲ判定ス可シ

第五條 恩給ハ退官現時ノ俸額ニ依ル其給額ハ奉職滿十五年ニシテ俸給年額ノ四分ノ

一即チ二百四十分ノ六十トシ爾後滿一年毎ニ二百四十分ノ一ヲ加ヘ滿三十五年ニ至

リ二百四十分ノ八十即チ俸給年額ノ三分ノ一ニ至ツテ止ム但非職中退官スル者ト雖  
モ恩給ハ其在職俸給ノ年額ニ照シテ之ヲ支給ス

第二條ノ第二項并ニ第三條第四條ニ掲グル所ノ十五年未滿ノ奉職者ニ恩給ヲ支給ス

ルコアルトキハ其給額ハ俸給年額二百四十分ノ六十ニ當ルノ額ヲ以テス  
進級後一年未滿ニシテ退官シタル者ハ前官ノ俸給ニ依リ恩給ヲ支給ス但公務ニ起因  
スル傷痍疾病ノ爲メ退官シタル者ハ此限ニアラス

第四條 公務ニ依リ重傷ヲ負ヒ若クハ不治ノ病ニ罹リ開業醫ノ診斷書ヲ具ヘテ其職ニ  
堪ヘサル旨ヲ証明スルコトヲ得ル時ハ其退官ヲ許シ在職年數ニ拘ハラズ終身恩給ヲ  
支給ス  
第三條及ヒ前項ノ場合ニ於テ盲聾或ハ一肢以上ノ用ヲ失ヒ不治ノ症ニ罹リタル者ハ  
其退官ヲ命ジタルト又ハ退官ヲ許シタルトニ拘ハラズ其情狀ニ依リ特旨ヲ以テ現官  
相當恩給ノ外ニ猶其最下金額十分ノ七迄ヲ増給スルコトアル可シ  
開業醫ノ診斷書ニ就キ疑フ可キモノアルトキハ本屬長官ハ更ニ醫員ヲ派遣シ其診斷  
ニ依リ事實ノ當否ヲ判定ス可シ  
第五條 恩給ハ退官現時ノ俸額ニ依ル其給額ハ奉職滿十五年ニシテ俸給年額ノ四分ノ  
一即チ二百四十分ノ六十トシ爾後滿一年毎ニ二百四十分ノ一ヲ加ヘ滿三十五年ニ至  
リ二百四十分ノ八十即チ俸給年額ノ三分ノ一ニ至ツテ止ム但非職中退官スル者ト雖  
モ恩給ハ其在職俸給ノ年額ニ照シテ之ヲ支給ス  
第二條ノ第二項并ニ第三條第四條ニ掲グル所ノ十五年未滿ノ奉職者ニ恩給ヲ支給ス  
ルコアルトキハ其給額ハ俸給年額二百四十分ノ六十ニ當ルノ額ヲ以テス  
進級後一年未滿ニシテ退官シタル者ハ前官ノ俸給ニ依リ恩給ヲ支給ス但公務ニ起因  
スル傷痍疾病ノ爲メ退官シタル者ハ此限ニアラス

第六條 奉職滿十五年ニ超ル者ト雖モ年齡未タ六十歳ニ至ラスシテ自己ノ便宜ニ依リ退官ヲ請フ者又ハ服務紀律ニ違ヒタル者ノ諭旨退官及ヒ懲戒處分若クハ刑事裁判ニ依リ免官セシ者ハ恩給ヲ支給セス

第七條 奉職年數ノ計算ハ明治四年八月ヨリ起算ス其以後任官ノ者ハ其拜命ノ月ヨリ起算ス但年齡二十歳未滿ノ奉職年數ハ算入セス

明治四年八月以前ヨリ奉職シタル者ハ明治四年七月ノ現官等ニ對スル月俸ノ半額ヲ以テ奉職年數ノ一箇年ニ當テ其年數ニ應スルノ金額ヲ以テ別ニ一時賜金トシテ給與ス(明治十七年四月第二十五號達改正)

第八條 武官ヨリ文官ニ轉シ若クハ退官後再ヒ任官シタル者ハ前官後官ノ奉職年數ヲ通算ス但御用滯在中ノ年月及ヒ嘗テ滿年賜金若クハ退官一時賜金ヲ受ケタル者ノ前官年數ハ算入セス

第九條 恩給ヲ受クル者再ヒ官ニ就キ爾後退官ノ節其俸額前官ヨリ少キトキハ仍ホ前官ノ俸額ニ依リ恩給ヲ支給ス

第十條 勅委任官奉職中既ニ恩給ヲ受ク可キ期ニ至リタル者及ヒ其退官恩給ヲ受クル者死去セントキ又ハ其期ニ至ラスト雖モ公務ニ依リ死去セントキハ其情狀ニ依リ特旨ヲ以テ其寡婦ニ扶助料トシテ死者生存中ノ恩給年額四分ノ二以内ヲ終身支給スル

コトアル可シ寡婦ナケレハ其繼嗣ノ孤兒男女并ニ實子滿二十歳ニ至ル迄之ヲ給スルコトアル可シ其寡婦ハ其本夫ノ在官中ニ入籍シタル者ニ限ル

判任官ハ奉職中既ニ恩給ヲ受ク可キ期ニ至リタル者ニシテ公務ニ依リ死去セントキニ限リ其情狀ニ據リ特旨ヲ以テ本條ニ準スルコトアル可シ但其扶助料ハ寡婦ニ止マリテ孤兒父母祖父母兄弟姉妹ニ及ハス

第十一條 寡婦復籍若クハ再嫁シ又ハ死去シタルトキハ其扶助料ハ更ニ繼嗣ノ孤兒二十歳未ニ給ス扶助料ヲ受クル孤兒既ニ嫁娶シ若クハ官廳ヘ奉職シ俸給ヲ受ケ又ハ諸官立學校ノ官費生徒ト爲リタルトキハ其扶助料ヲ給セス

第十二條 扶助料ヲ受ク可キ寡婦孤兒ナク又ハ扶助料ヲ受ケタル寡婦復籍若クハ再嫁シテ孤兒ナク尙ホ從來死者ニ依リテ生活セル父母又ハ祖父母アリテ他ニ之ヲ奉養スルノ子孫ナキトキハ其情狀ニ依リ特旨ヲ以テ寡婦ニ相當セル扶助料三分ノ二以内ヲ終身支給スルコトアル可シ

第十三條 其扶助料ハ父母祖父母共ニ存在スルハ先ツ之ヲ父ニ給シ其父死歿若クハ其恩典ヲ失フコトアレハ轉シテ之ヲ母ニ給ス以下其母ヨリ祖父ニ祖父ヨリ祖母ニ順次此例ニ依リ之ヲ轉給ス可シ但父及ヒ祖父ハ年齡五十歳以上其未滿ハ廢疾又ハ不具

ニシテ産業ヲ營ムコト能ハサル者又母及ビ祖母ハ夫ナキ者就レモ本人死歿ノ際年齡五十歳以上ニシテ其戸籍ニ在リシ者ニ限ル

第十四條 扶助料ヲ受ク可キ寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナクシテ從來死者ニ依リ生活セラル二十歳未滿又ハ二十歳以上ト雖モ癩疾不具ノ兄弟姉妹アリテ之ヲ救育スルノ親族ナキ者ハ其情狀ニ依リ特旨ヲ以テ寡婦ニ相當セル扶助料一箇年分ヨリ少カラス五箇年分ヨリ多カラサル額ヲ一時限リ支給スルコトアル可シ

第十五條 恩給ハ在官者退官ノ翌月ヨリ支給ス扶助料ハ恩給ヲ受ケ又ハ受ク可キ者死去ノ翌月ヨリ支給ス其轉給スル者亦同シ

第十六條 恩給及ヒ扶助料ノ給否ハ本屬長官若クハ其所管地方長官ノ証明ニ依リ恩給局ノ審査ヲ經テ太政大臣之ヲ裁定ス

恩給及ヒ扶助料ノ給與ニ關シ若シ穩當ナラサル廉アルコトヲ覺知シタル者ハ之ヲ其本屬長官若クハ地方長官ニ請願シ而シテ猶ホ穩當ノ指令ヲ得サルトキハ本人ヨリ直ニ之ヲ太政官恩給局ニ請願スルコトヲ得但之ヲ裁判所ニ訴フルコトヲ許サス

第十七條 恩給若クハ扶助料ヲ給スル本人ニハ太政官ヨリ其証書ヲ下付ス  
第十八條 恩給ヲ受クル者公權ヲ剝奪セラレタルトキハ全ク之ヲ止メ又左ノ各項ニ該ルトキハ其時間ノミ之ヲ停ム

一 公權ヲ停止セラレタル時

二 再ヒ官ニ就キ俸給ヲ受クル時

三 事故アリテ日本人タルノ分限ヲ失フ時

四 政府ノ許可ナクシテ日本國外ニ出タル時

第十九條 扶助料ヲ受クル者禁錮以上ノ刑ニ處セラルトキ又ハ第十八條ノ第三項若クハ第四項ニ該ルトキハ之ヲ止ム

第二十條 恩給ヲ支給ス可キ退官者アルトキハ本屬長官ハ本人ノ履歷書其傷痍疾病ニ起因スルモノハ其証書ヲ具シ且事實ヲ証明シテ之ヲ太政官へ進達シ以テ恩給ノ下付ヲ請求ス可シ

第二十一條 扶助料ヲ願ハントスル者ハ本人主名ヲ以テ親族二名後見人アノハ其親族後見人ヲ加フナキトキハ同郷ノ戸主二名連署セシ願書ニ其戸籍ノ寫恩給若クハ扶助料給與又公務ニ依リ死亡セル者ハ其原因症候等照査ニ供ス可キ証據書ヲ添ヘ之ヲ所管地方廳ニ出願ス可シ地方長官ハ其事實ヲ証明シテ之ヲ太政官ニ進達シ以テ扶助料ノ下付ヲ請求ス可シ但一ケ年經過ノ後出願スル者ハ之ヲ受理セス

第二十二條 恩給若クハ扶助料ノ支給ヲ止ムルトキハ恩給局ヨリ所管地方廳ニ達シニ



週日以内ニ其給與ノ證書ヲ収メシム其恩給若クハ扶助料ヲ受クル者死去又ハ除籍シ扶助料ヲ繼承スル者ナキトキハ遺族若クハ親族ヨリ其死亡又ハ除籍ノ證書ヲ添ヘ一箇月以内ニ之ヲ所管地方廳ニ届出テ該長官ハ事由ヲ具シ其證書ト共ニ之ヲ恩給局ニ進達ス可シ

第二十三條 恩給及ヒ扶助料ノ金額ハ毎年六月十二月ニ於テ其前半年分半年ニ滿タサ以テ計テ大藏省ヨリ本人所在ノ地方廳ヲ經由シテ之ヲ交付ス

第二十四條 恩給若クハ扶助料ノ金額ヲ受領セントスル者ハ其證書及ヒ本人生存證書ヲ表証シ別ニ受領證書ヲ差出ス可シ

第二十五條 恩給若クハ扶助料ヲ受クル者其金額受領ノ地ヲ轉セントスルトキハ金額交付期月ノ三箇月前ニ其所在ノ地方廳ニ願出可シ若シ其期ヲ過クル者ハ仍ホ元所在地ニ於テ之ヲ交付ス

第二十六條 恩給并ニ扶助料ハ一箇年以上其受領ヲ請求セサルトキハ其時間ノ金額ハ支給セス

第二十七條 恩給并ニ扶助料ニ關スル願書ハ郡區長戸長證書ハ戸長ノ奥印ヲ要ス

第二十八條 盜難若クハ水火災等ニテ恩給若クハ扶助料給與ノ證書ヲ失ヒタルトキハ速ニ所管地方廳ヲ經テ恩給局ニ其旨届出可シ

第二十九條 官吏滿五年以上奉職ノ者十一年未滿ニシテ退官セシ時ハ現俸給三ヶ月分ヲ給シ其滿十一年以上十五年未滿ニシテ同上ノ者ニハ現俸給四ヶ月分ヲ給ス但恩給ヲ受クル者並ニ自己ノ便宜ニ依リ退官ヲ請フ者又ハ服務紀律ニ違ヒタル者ノ諭旨退官及ヒ懲戒處分若クハ刑事裁判ニ依リ免官セシ者ニハ總テ之ヲ給セス(明治十七年四月第三十五號達追加)

第三十條 官吏在官中死去ノ者ハ現俸給三ヶ月分ヲ給ス(明治十七年四月第三十五號達追加)

○第二款 官吏恩給令附則 明治十八年三月 第十五號達

官吏恩給令附則左ノ通相定候條此旨相達候事

官吏恩給令附則 第一條 本令第二條第三條及第四條ニ該ル者退官スルトキハ同時ニ其恩給願書(第一書式)及證據書類ヲ本屬長官ニ差出スヘシ但廢官廢廳ニ係ル者ハ其事務ノ引繼ヲ受ケタル長官ニ之ヲ差出スヘシ

第二條 本令第十條第十一條第十二條第十三條及第十四條ニ該ル者ハ其扶助料願書(第二號書式)及證據書類ヲ本籍地方長官ニ差出スヘシ

第三條 恩給願書若クハ扶助料願書ヲ受領セシ長官ハ査覈ノ上轉給願書ヲ除クノ外其計算書(第三書式)ヲ製シ本令第二十條ニ據リ該書類ヲ太政官ニ進達スヘシ

第四條 恩給願書ニ添フヘキ證據書類ハ左ノ如シ

- 一 履歷書
- 二 戶籍寫

三 診斷書(負傷若クハ罹病者ニ要ス)

四 見證々書(第四書式)(公務ニ依リ負傷シタル者ニ要ス)

第五條 本令第四條ニ掲クル最下金額十分ノ七迄ノ増給差等ハ左ノ如シ

- 一 二肢ヲ亡シ或ハ兩眼ヲ盲スル者 十分ノ七
  - 二 前項ニ等シキ傷痕或ハ疾病ヲ受ケシ者 十分ノ六
  - 三 一肢ヲ亡シ或ハ全ク二肢ノ用ヲ失フ者 十分ノ五
  - 四 前項ニ等シキ傷痕或ハ疾病ヲ受ケシ者 十分ノ四
  - 五 全ク一肢ノ用ヲ失フ者 十分ノ三
  - 六 前項ニ等シキ傷痕或ハ疾病ヲ受ケシ者 十分ノ二
- 第六條 本令第三條ニ掲タル公務ニ依リ不治ノ病ニ罹リ又ハ重傷ヲ負フトハ一肢以上ノ用ヲ失ヒ或ハ失フニ等シキ者ニ限ル

第七條 公務ニ依リ不治ノ病ニ罹リ又ハ負傷シ恩給ヲ受ケタル者仍ホ重症ニ趨キシト

左ノ期限内ニ出願スレハ査覈之上更ニ増加恩給ヲ下賜スヘシ

- 一 一肢ノ用ヲ失ヒ或ハ一肢ノ用ヲ失フニ等シキ者ハ二ケ年
- 二 二肢ヲ亡シ或ハ二肢ノ用ヲ失ヒ又ハ兩眼ヲ盲シ或ハ二肢ヲ亡スル者及之ニ等シキ者ハ三ケ年

第八條 前條ニ當該シ増加恩給ヲ願ハントスル者ハ其願書(第五書式)ニ診斷書及恩給

證書ヲ添ヘ之ヲ本籍地方長官ニ差出スヘシ

第九條 年齢六十歳未満ト雖モ滿十五年以上奉職シ服務紀律違犯ノ故ニ非スシテ論旨

退官ノ者若クハ非職滿期免官ノ者ハ本令第二條廢官廢廳ノ例ニ依ル

第十條 官吏滿五年以上奉職ノ後本官ヲ免シ直ニ御用掛或ハ准官吏等ニ採用ノ者ハ其

際恩給或ハ本令第二十九條ノ一時賜金ヲ給セス其御用掛或ハ准官吏退職ノトキニ於

テ前官ニ對スル恩給若クハ一時賜金ヲ下賜ス但御用掛或ハ准官吏奉職中自己ノ便宜

ニ依リ其職ヲ辭スル者及服務紀律ニ違ヒ論旨退職ノ者又ハ懲戒處分若クハ刑事裁判

ニ依リ免職ノ者ハ恩給或ハ一時賜金支給ノ限ニ在ラス

第十一條 奉職年數ハ月ヲ以テ計算スヘシ但退官同月内ニ再任セシ者ハ其月ヲ二ケ月ニ算スルヲ得ス

第十二條 非職中ノ年月ハ奉職年數ニ算入スヘシ但官吏非職條例第七條ニ該ル者ニシテ非職俸ヲ受ケサルノ年月ハ之ヲ除算ス

第十三條 本令第七條第三項ニ掲ケル月俸トハ明治四年六月東京淺草米廩ノ平均相場ニ依リ當時ノ官祿一ヶ月分ニ相當スル金額ヲ云フ

第十四條 本令第二十九條及第三十條ノ一時賜金ハ非職中退官或ハ死去スル者ト雖モ其本俸ノ額ニ照シテ之ヲ支給ス

第十五條 自己ノ便宜ニ依リ退官シタル者又ハ服務紀律ニ違ヒ諭旨退官ノ者及懲戒處分若クハ刑事裁判ニ依リ免官ノ者再ヒ任官スルコトアルモ其前官年數ハ之ヲ通算セ

第十六條 公務ニ依リ死去ノ者アルトキハ其事實ヲ保證シタル書面(見證人アレハ其証書ヲ添ヘ)及履歷書又恩給ヲ受クルノ期ニ達シタル者死去セントキハ其履歷書ヲ本屬長官ヨリ遺族ニ下附スヘシ

第十七條 扶助料願書ニ添フヘキ證據書類ハ左ノ如シ

一 死者履歷書 (在官中死去シタルトキニ要ス)

二 戸籍寫

三 恩給證書 (轉給ノトキニ要ス)

四 醫師ノ死亡届書若クハ檢案書 (公務ニ依リ死去シタルトキニ要ス)

五 本屬長官保證書 (公務ニ依リ死去シタルトキニ要ス)

第十八條 本令第十三條及第十四條ニ掲ケル癩疾又ハ不具ノ者扶助料ヲ願ハントスルトキハ前條書類ノ外仍ホ其診斷書ヲ添フヘシ

第十九條 本令第十條ニ掲ケル恩給年額四分ノ二以内ノ差等ハ公務ニ依リ死去セシ者ノ寡婦ニハ四分ノ二其他ノ寡婦ニハ四分ノ一トス

第二十條 本令第十條ニ掲ケル恩給ヲ受クヘキ期ニ至ルトハ奉職滿十五年以上ヲ云フ

第二十一條 扶助料ヲ受ケタル寡婦其支給ヲ止メラルトキハ轉シテ之ヲ繼嗣ノ孤兒ニ給ス

第二十二條 扶助料ヲ受ケタル寡婦死去シテ孤兒ナク又ハ扶助料ヲ受ケタル孤兒死去シ仍ホ其亡夫或ハ亡父ノ父母又ハ祖父アルトキハ本令第十二條ノ例ニ依ル

第二十三條 本令第十三條ニ掲ケル母及祖母癩疾又ハ不具ニシテ產業ヲ營ムコト能ハス他ニ之ヲ奉養スル者ナキトキハ同條但書父及祖父ノ例ニ依ル

第二十四條 恩給或ハ扶助料ノ出願ヲ許可セントキ恩給許可令ハ本屬長官ヲ經テ直ニ本人ニ下附シ扶助料許可令ハ内務省ニ交付シ内務省ハ本籍地方廳ヲ經テ之ヲ本人ニ下附ス

恩給證書ハ總テ内務省ニ交付シ内務省ハ本籍地方廳ヲ經テ之ヲ本人ニ下附ス  
 第二十五條 本令第十六條第二項ニ掲クル請願ノ期限ハ恩給證書受領ノ日ヨリ三ヶ月  
 トス其期限ヲ過ルモノハ受理セス  
 第二十六條 本籍地方廳ニ於テ本令第二十五條ノ出願ヲ許可シタルトキハ直ニ大藏省  
 ニ届出テ且本人移住ノ地方廳ニ通牒スヘシ  
 第二十七條 恩給ヲ受クル者賭博犯處分規則ニ依リ懲罰ニ處セラレタルトキハ本令第  
 十八條第一項ニ準シ扶助料ヲ受クル者同上ノトキハ本令第十九條ニ準ス  
 第二十八條 恩給若クハ扶助料ヲ受ケタル者本令第十一條第二項第十八條第三項第四  
 項ニ該ルトキハ其本籍地方廳ヨリ直ニ恩給局ニ届出ツヘシ  
 本令第十八條ニ掲クル再ヒ官ニ就キ休給ヲ受クルトハ准官吏以上ヲ云フ  
 第二十九條 恩給若クハ扶助料ヲ下賜シ又ハ其支給ヲ止メ若クハ停メタル時ハ恩給局  
 ヨリ之ヲ大藏省及會計検査院ニ通牒スヘシ  
 官吏恩給令附則諸書式

第一書式甲

恩給願書  
 某 儀

△廢官廢  
 應免官ノ  
 者ハ元ノ  
 官名應名  
 フ記スヘ  
 何年何月間奉職罷在候處(年齢六十歳以上ノ老体ト相成退官出願候ニ付御  
 許可ノ上ハ)(何々)(何々)相當ノ恩給下賜度證據書類相添此段奉願候也  
 年 月 日  
 △ 官 氏 名 印  
 本屬長官宛

第一書式乙

恩給願書  
 何年何月間奉職罷在候處何年何月何日何地ニ於テ何服務中何ニ依リ(何ノ  
 部ニ何ノ傷痍ヲ負ヒ)(何々)爾來治療仕候得共遂ニ(何々)(何々)退官相願  
 候ニ付御許可ノ上ハ(相當ノ恩給)(相當ノ恩給並ニ増加恩給)下賜度證據  
 書類相添此段奉願候也  
 年 月 日  
 官 氏 名 印  
 本屬長官宛

第二書式甲

扶助料願書

第一類 行政法 官吏恩給令附則

明治何年何月ヨリ恩給下賜相成居候處(何年何月間奉職罷在候處)何年何月何日死亡仕候ニ付某へ相當ノ扶助料下賜度證據書類相添此段奉願候也

何府(縣)國郡(區)町(村)番地

何族(平民)

故何某寡婦(孤兒)

年月日

氏名印

同親族(後見人)

氏名印

同親族

氏名印

地方長官宛

戶長

氏名印

郡(區)長

氏名印

第二書式乙

扶助料願書

何年何月間奉職罷在候處何年何月何日何地ニ於テ何服務中何ニ依リ(何ノ夫(父)官某儀

部ニ何ノ傷瀆ヲ負ヒ(何々)何年何月何日死亡仕候就テハ某へ相當ノ扶助料下賜度證據書類相添此段奉願候也

何府(縣)國郡(區)町(村)番地

何族(平民)

故何某寡婦(孤兒)

年月日

氏名印

同親族(後見人)

氏名印

同親族

氏名印

地方長官宛

戶長

氏名印

郡(區)長

氏名印

第二書式丙

扶助料願書

故官氏名寡婦  
某儀

明治何年何月ヨリ扶助料下賜相成居候處何年何月何日(復籍)(再婚)(何々)仕候ニ付更ニ某へ扶助料轉給相成度證據書類相添此段奉願候也

年月日

何府(縣)國郡(區)町(村)番地  
故何某孤兒

氏名

同親族(後見人)

氏名印

同親族

氏名印

地方長官宛

戶長

氏名印

郡(區)長

氏名印

第三書式

明治四年八月以前ノ任官ナレハ四年

恩給計算書

官氏名

何年何月生

明治何年何月何年何月

八月ノ官ヲ茲ニ記ス  
寡婦孤兒扶助料計  
算書ナレハ本額四分ノ二若クハ一此年額若干圓

何年何月何日	何年何月何日	何年何月何日	何年何月何日	何年何月何日	何年何月何日
任官	任官	任官	任官	任官	任官
退官	退官	退官	退官	退官	退官
何年何月	何年何月	何年何月	何年何月	何年何月	何年何月

滿何年(前官)(現官)俸給二百四十分ノ若干  
此年額若干圓

通計何年何月

明治何年何月

何官廳  
取調主任

官氏名

印

第四書式

見證々書

第一類 行政法 官吏恩給令附則

見證ノ實況及其理由ヲ極テ詳悉スルヲ要ス

右明治何年何月何日何地ニ於テ何服務中何ニ依リ何ノ部ニ何ノ傷痕ヲ負ヒ候ニ候ヲ某何ノ際見認候也

年月日

見證人 屬籍職業 氏

明治何年何月何年何月

同 同 同

第五書式

增加恩給願書

某 儀

何年何月何日何地ニ於テ何服務中何ニ依リ何ノ部ニ何ノ傷痕ヲ負ヒ候ニ付何年何月何日退官御許可ノ上恩給下賜ノ處該傷痕漸次重症ニ變シ(何々)候ニ付增加額(下賜)(變更)相成候様御詮議ヲ被遂度證據書類相添此段奉願候也

何府(縣)國郡(區)町(村)番地

年月日	何族	何官	氏	名	印
地方長官宛	戶長	郡(區)長	氏	名	印
		氏	名	印	

○第三款 文官傷痕疾病等差例

明治十八年三月十六號達

官吏恩給令附則第五條傷痕疾病等差例左ノ通相定候條右ニ據リ取調候儀ト可心得此旨相達候事

文官傷痕疾病等差例

公務ノ爲メ傷痕ヲ受テ又ハ疾病ニ罷リ遂ニ一肢以上ノ用ヲ失フニ等シキ不治ノ症トナリ官吏恩給令附則第五條ニ掲ケル各項ニ該當スル者ニ等差ヲ付スルノ概テ左ノ如シ

第一條 偏眼ヲ盲スル者全鼻ヲ失スル者ハ共ニ第五項トシ之ニ偏耳ノ官能ヲ併セ撥スル者ハ第四項トス

第二條 兩耳ヲ聾スル者ハ第四項トス

第一類 行政法 文官傷痕疾病等差例

第三條 偏眼兩耳ノ官能ヲ併セ廢スル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第二項或ハ第三項トス  
 第四條 一眼ヲ失ヒ他ノ一眼暗昧シ僅ニ自己ノ用ヲ辨スルヲ得ル者ハ第二項トス  
 第五條 咀嚼言語ノ兩機ヲ併セ廢スル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第一項或ハ第二項トス  
 第六條 咀嚼ノ用ヲ廢スル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第二項或ハ第三項トシ幾分ノ障礙アル者ハ第五項其輕キ者ハ第六項トス  
 第七條 精神亡失或ハ錯亂シテ常ニ看護ヲ要スル者ハ第一項トス  
 第八條 癡呆若シハ健忘症ヲ遺シ常ニ看護ヲ要セサル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第三項若クハ第五項トス  
 第九條 神經痛ヲ遺シ常ニ看護ヲ要セサル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或ハ第六項トス  
 第十條 言語ノ機能ヲ廢スル者ハ第三項トシ言語ノ機能ヲ妨ケラレタル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或ハ第六項トス  
 第十一條 胃腸膀胱等ニ癰管ヲ遺ス者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第二項或ハ第三項トス  
 第十二條 腸歇爾尼亞ヲ遺ス者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或ハ第六項トス  
 第十三條 陰莖或ハ墨丸ヲ全失スル者ハ第三項トス  
 第十四條 陰莖ヲ半失スル者偏墨丸ヲ失スル者ハ共ニ第六項トス  
 第十五條 頸項背腰諸筋ノ運用ヲ妨クル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或ハ第六項トス

第十六條 一肢ヲ失ヒ且他肢ノ用ヲ全廢スル者ハ第一項トス  
 第十七條 二上肢ヲ失フ者ハ肩關節ヨリ腕關節ニ至ル間ハ何レノ部位ヲ論セス第三項トス  
 第十八條 肩關節ヨリ腕關節ニ至ル間ノ關節作用ヲ廢スルモ全肢ノ用ヲ廢スルニ至ラサル者ハ第六項トス  
 第十九條 一手ニ於テ四肢以上ヲ失スル者ハ第四項トシ五指癒着若クハ強硬等ノ爲メニ把握採摘ノ用ヲ廢スル者ハ第五項トス  
 第二十條 一手ニ於テ四指或ハ五指ノ各一部ヲ失スルモ尙把握ノ用ヲ爲シ得ル者ハ第六項トス  
 第二十一條 一手ニ於テ拇指示指ヲ併セ失スル者或ハ拇指示指ヲ除キ他ノ三指ヲ失スル者ハ第六項トス  
 第二十二條 一下肢ヲ失スル者ハ股關節ヨリ踝關節ニ至ルノ間ハ何レノ部位ヲ論セス第三項トス  
 第二十三條 股關節ヨリ踝關節ニ至ル間ノ作用ヲ妨ケラレタル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或ハ第六項トス  
 第二十四條 跗骨ヨリ蹠骨ニ至ルノ部ヲ失スル者ハ何レノ部位ヲ論セス第四項トス

第一類 行政法 文官傷演疾病等差例



第二十五條 一足ニ於テ五指ヲ失スル者ハ第五項トシ第一指ヲ併セ三指ヲ失スル者ハ

第六項トス

第二十六條 不治病ノ爲メ常ニ看護ヲ要スル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第一項或ハ第二項トス

第二十七條 不治病前項ヨリ輕キモ歩行スル能ハサル者ハ第三項トス

第二十八條 不治病前項ヨリ輕キモ自己ノ用辨ニ妨碍アル者ハ第四項トス

第二十九條 不治病前項ヨリ輕キモ營業ヲ爲シ難キ者ハ第五項トス

第三十條 不治病前項ヨリ輕キモ營業ニ妨アル者ハ第六項トス

○第四款 陸軍恩給令 明治十六年九月

第三十七號達

陸軍恩給令別冊ノ通改正條此旨相達候事

但陸軍罷役俸并恤金令ハ廢止ス

陸軍恩給令

陸軍恩給令目錄

第一章 總則

第二章 恩給及ヒ増加

第三章 寡婦(孤兒)扶助料

第四章 服役年算則

第五章 從軍年算則

第六章 恩給支給順序

第七章 賑恤金

第八章 給助金

陸軍恩給令

第一章 總則

第一條 陸軍恩給ハ陸軍諸種ノ勤勞ニ依リテ之ヲ給スル者ナリ其種類別テ左ノ五項トス

一 退職恩給

二 免除恩給

三 寡婦(孤兒)扶助料

四 賑恤金

五 給助金

第二條 退職恩給免除恩給寡婦扶助料ハ本人ノ終身孤兒扶助料ハ男女共ニ二十歳ニ至

ル迄之ヲ給シ賑恤金給助金ハ三時限リ之ヲ給ス

第一類 行政法 陸軍恩給令

第三條 軍人ハ定限ノ年齢ニ達スレハ現役ヲ辭シテ恩給ヲ受クルヲ例トス其定限左ノ如シ(明治十七年四月第三十七號達改正)

- 會計監督 軍醫監 藥劑監 六十
- 憲兵大中佐 會計副監督 軍醫正 藥劑正 馬醫監 五十七
- 步騎砲工輜重兵大中佐 憲兵少佐 會計監督補 五十四
- 會計一等軍吏 一等軍醫 一等劑官 一等馬醫 五十一
- 步騎砲工輜重兵少佐 憲兵大尉 會計二等軍吏 五十一
- 二等軍醫 二等劑官 二等馬醫 砲工兵上等監護 五十一
- 步騎砲工輜重兵大尉 憲兵中少尉 會計三等軍吏 五十一
- 三等軍醫 三等劑官 三等馬醫 軍樂長 四十八
- 砲工兵監護 砲兵監守 砲兵監査 諸工長 四十八
- 諸工下長 四十八
- 步騎砲工輜重兵中少尉 憲兵下士 會計書記 四十五
- 看護長 馬醫生 軍樂次長 軍樂手 四十五
- 步騎砲工輜重兵下士 憲兵卒 會計卒 看護卒 樂生 四十
- 步騎砲工輜重兵卒 三十五

第四條 軍人定限ノ年齢ニ達スト雖モ前途尙ホ任用ニ堪ヘ若クハ材能特拔又ハ老練者ヲ要スル職務ニ在ル者ハ仍ホ留任ヲ命スルコトヲ得但強テ現役ヲ辭スル者ハ此限ニテ止ラズ

第五條 上長官士官准士官未タ定限ノ年齢ニ達セスト雖モ服役實期十一年以上ノ者ニテ服役ニ堪ヘサルヲ認メタル時ハ士官以上ハ陸軍卿准士官ハ其所管長官旨ヲ諭シテ現役ヲ退キ恩給ヲ願ハシムルコトアル可シ

第六條 恩給ハ公權剝奪ノ時ハ全ク之ヲ止メ左ノ各項ニ該ル時ハ其時間ノミ之ヲ停止ス

- 一 公權停止ノ時
- 二 事故アリテ日本人タルノ分限ヲ失フ時
- 三 政府ノ許可ナクシテ日本國外ニ出タル時
- 第七條 恩給ヲ受ケタル者再ヒ現役ニ就キ若クハ文官ニ任シ俸給ヲ受クル時ハ其間該恩給ヲ停止ス但其負傷增加恩給ハ仍ホ之ヲ給ス
- 第八條 寡婦(孤兒)扶助料ハ當該軍人死歿ノ日 戰地等ニテ死歿ノ者ハヨリ一ケ年間願出テサル者ハ其權利消絶ス
- 陸軍官憲ヨリ報告ノ日
- 恩給及ヒ扶助料ハ一箇年以上其金額ノ受領ヲ怠ル時ハ其怠リタル年間金額ハ之ヲ給セズ

第九條 恩給及扶助料ノ金額計算ニ就キ違算アリト思惟スル時ハ初メテ金圓ヲ受領セシヨロリ三箇月以内ニ管轄地方廳ヲ經テ陸軍卿ニ上申ス可シ若シ此期限ヲ過クル時ハ之ヲ受理セス

第二章 恩給及ヒ増加

第十條 退職恩給ハ准士官以上服役實期十一年以上ニシテ定限ノ年齢ニ達シ又ハ傷痕ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ查問會議ノ處決若クハ陸軍卿ノ諭旨ニ依リ退職スル者ニ之ヲ給ス戰闘及戰時平時ニ拘ハラス公務ノ爲メニ傷痕若クハ疾病ヲ受ケ一肢以上ノ用ヲ失ヒ或ハ之ヲ失フニ等シト認ムル者又ハ戰地ニ於テ流行病ニ罹リ或ハ健康ニ有害ナル感動ヲ受クルヲ願ミルヲ能ハスニテ非常ノ勞動及ヒ困苦ヲ忍ビ勤務ニ從事シ爲ニ健康ヲ妨害シ全ク職務ニ堪ヘサルニ至リ其證據明亮ニシテ退職スル者ハ服役實期十一年未滿ト雖モ亦之ヲ給ス(明治十八年一月第四號達ヲ以テ本條及次條中追加)

其退職恩給ノ額ハ十一年ヨリ三十九年ニ至リ年々差等アルコト甲號表面ノ如シ但十一年未滿者ニ給ス可キ恩給ハ其十一年ニ等シキ額ニ依ル

第十一條 免除恩給ハ下士及ヒ卒服役實期十一年以上ニシテ定限ノ年齢ニ達シ或ハ服役滿期トナリ或ハ傷痕若クハ疾病ノ爲メ免官若クハ免役スル者ニ之ヲ給ス前條第二項ニ掲グルルカ如キ傷痕疾病ヲ受ケ永久健康ヲ妨害シ全ク兵役ニ堪ヘス其證據

據明亮ニシテ免官若クハ免役スル者ハ服役實期十一年未滿ト雖モ亦之ヲ給ス其免除恩給ノ額ハ十一年ヨリ三十九年ニ至リ年々差等アルコト乙號表面ノ如シ但十一年未滿者ニ給ス可キ恩給ハ十一年ニ等シキ額ニ依ル

第十二條 准士官以上傷痕ヲ受クルト雖モ尙ホ奉職セシメ後日退職スル者ハ現官等ニ依リ恩給ヲ給ス但負傷増加恩給ハ負傷當時ノ官等ニ依リ之ヲ給ス

第十三條 傷痕疾病ニ起因シ恩給ヲ願出ル者ハ其原因症候トモ詳細之ヲ開陳ス可シ

第十四條 傷痕疾病ヲ受ケシ事故及ヒ其原因ハ見證證書又ハ公文若クハ查問會議口供書ノ寫ヲ以テ之ヲ證明ス可シ

第十五條 傷痕疾病不治ノ狀ハ陸軍病院長及ヒ主任醫官(地方病院ニ於テ治療ヲ受ケシ者ハ其院長并ニ主任醫師)ノ診斷證書ヲ以テ之ヲ証ス可シ

其診斷證書ハ傷痕疾病ノ原因症候及ヒ其治療方法ヲ述ヘ以テ不治ノ狀ヲ詳悉ス可シ病院ニ就キ治療ヲ受ケタル者ト雖モ陸軍病院長若クハ地方病院長ノ診斷書ヲ要ス

第十六條 傷痕疾病不治ノ狀ハ軍醫若クハ地方醫師ノ證書ニ依ルト雖モ其軍務ニ堪ヘサルヤ否ヤハ當該所管ニ於テ檢査判定シ所管長官ヨリ之ヲ陸軍卿ニ呈ス可シ陸軍卿ハ更ニ軍醫本部ニ下シテ覆數セシメ以テ之ヲ決定ス(十七年六月第六十號達ヲ以テ條中改正)

第十七條 恩給ハ軍人ノ現官階ニ依リ之ヲ給ス但下士以上其官階ニ進ミ未タ進級條例

第一類 行政法 陸軍恩給令

ノ停年最下限ノ半ニ至ラスニテ退職免官ヲ願フ時ハ前官ニ準シテ之ヲ給ス其戰闘若クハ公務ノ爲メ傷痍ヲ受ケ或ハ戰地ニ於テ受ケタル疾病ノ爲メ恩給ヲ給スルハ此限ニアラス

第十八條 准士官以上退職恩給ヲ願フ時所管長官ハ陸軍卿ニ呈スル進達書ノ日ニ於テ直ニ休暇ヲ命ス下士卒免除恩給ヲ願フ時亦該長官同上ノ日ニ於テ直ニ免官若クハ免役ス可シ

第十九條 戰闘及ヒ戰時平時ニ拘ハラヌ公務ノ爲メ傷痍ヲ受ケ左ノ各項ニ該ル者ハ恩給ノ外更ニ丙號表面ノ金額ヲ加給ス但公務ノ爲メ疾病ニ罹リ遂ニ一肢以上ノ用ヲ失フニ等シキ不治ノ症トナル者モ亦本條ニ準ス

- 一 兩眼ヲ盲シ或ハ二肢ヲ亡スル者
- 二 前項ニ等シキ傷痍ヲ受ケル者
- 三 一肢ヲ亡シ或ハ全ク二肢ノ用ヲ失フニ至ル者
- 四 前項ニ等シキ傷痍ヲ受ケル者
- 五 至ク一肢ノ用ヲ失フ者
- 六 前項ニ等シキ傷痍ヲ受ケル者

第二十條 傷痍疾病ニ依リテ恩給ヲ受ケ引續キ重症ニ趨キ或ハ現役ヲ離レシ後重症ニ

趨キタル者左項ノ期限内ニ願出シ時ハ検査ノ上事實相違ナキニ於テハ更ニ恩給ヲ給シ或ハ負傷増加恩給ヲ給ス可シ但更ニ恩給ヲ願フハ現役ヲ離ルハ際其傷痍ノ爲メ服役シ難キ確定ヲ得タル者ニ限ル

- 一 一肢ノ用ヲ失ヒ或ハ二肢ノ用ヲ失フニ等シキ者ハ現役ヲ離レシ日ヨリ二箇年
- 二 一肢ヲ亡シ或ハ二肢ノ用ヲ失ヒ或ハ兩眼ヲ盲シ或ハ二肢ヲ亡スル者ハ現役ヲ離レシ日ヨリ三箇年

第三章 寡婦(孤兒)扶助料

第二十一條 寡婦扶助料ハ左ノ項目ニ該ル者ニ之ヲ給ス其給額ハ當該軍人ノ官階ト死歿ノ緣故トニ依リテ差アリ

- 一 戰闘或ハ公務ノ爲メ死歿シ或ハ之ニ依リテ受ケタル傷痍ニ原因シテ死歿シ又ハ戰地ニ於テ流行病ニ罹リ或ハ健康ニ有害ナル感動ヲ受ケタルヲ願ミルコト能ハスシテ非常ノ勞動及ヒ困苦ヲ忍ビ勤務ニ從事シ爲メニ發病死歿シ又ハ平時當務ニ依リ傳染病者ニ接シ該病毒ニ感染シ死歿シタル軍人ノ寡婦
- 二 退職若クハ免除恩給ヲ受ケタル後或ハ之ヲ受ケ可キ權ヲ有シテ死歿シタル軍人ノ寡婦

其扶助料ノ額第一項ニ該ル者ハ丁號表面ニ依リ第二項ニ該ル者ハ戊號表面ニ依ル